

古代王権の成長と日韓関係

—4～6世紀—

森公章

濱田耕策(第1章)

はじめに

第1章 4世紀の日韓関係

第1節 楽浪・帯方2郡の滅亡と日韓関係—三韓の動向と倭国—

第2節 七支刀銘の日韓関係—百済の国家形成と倭国—

第3節 広開土王碑文の日韓関係—高句麗・新羅の国家形成と倭国—

第2章 5世紀の日韓関係

第1節 倭国・朝鮮半島諸国と中国南北朝との通交

1. 倭の五王と中国南朝との通交
2. 官爵の除正とその意味
3. 倭王権の成長と府官制的秩序の導入・渡来人の役割

第2節 百済の南遷と倭国の外交政策

1. 倭王武と百済王余慶・牟大の上表文
2. 全羅南道の前方後円墳と百済
3. 倭系百済官僚の生成
4. 加耶諸国の情勢と倭国・百済・新羅

第3章 6世紀の日韓関係

第1節 加耶諸国をめぐる百済・新羅の紛争と倭国

1. 百済の己汶・帶沙侵攻と倭国
2. 金官国の興亡と倭国
3. 安羅をめぐる百済・倭国の方策
4. 「任那」の用法と「任那日本府」(「在安羅諸倭臣等」)の実態

5. 百濟聖明王の敗死と加耶諸国の行方

第2節 加耶諸国滅亡後の朝鮮半島諸国と倭国

1. 倭・百濟関係の推移
2. 「任那調」をめぐる倭国と新羅の関係
3. 倭国と朝鮮半島諸国との等距離外交

おわりに

(要旨)

4・5・6世紀の日韓関係と言え、その中心的課題の1つとして「任那」問題が挙げられる。かつては「任那日本府」なるものが朝鮮半島南部に存在し、倭王権の出先機関ないしは半島経営の拠点として機能したものと説明されてきた。しかし、こうした見解は現在では大きく変更されており、史料用語として「任那」「任那日本府」が用いられることはあるが、半島南部の歴史は加耶諸国とその興亡として説明されている。そこで、本論では4～6世紀の日韓関係を理解する今日的視点を整理することにした。

4世紀は日本側には信頼できる文献史料が少なく、「謎の4世紀」と言われてきた。「七支刀」と「広開土王碑文」の2つの海外史料を中心にこれまで説かれてきたことを鑑みると、百濟と高句麗の王権による外交と戦争の記録であるこれらの史料に現れる「倭王」や「倭」等は日本列島の統一的王権とその勢力と見なされ、ここでは文献とこの金石文史料から読み取れる4世紀の日韓関係をめぐる研究成果の問題点について、第1期の本委員会の報告「4世紀の日韓関係」(濱田耕策委員執筆)を補正、補充しつつ整理した。

5世紀に関しては、まず倭の五王が中国南朝の宋に要求した官爵の解釈が問題になる。これらは軍事権の委任を示すだけで、民政権や領土支配については無関係であると理解されるに至っているが、その中の秦韓・慕韓に何らかの実態があったかどうかは見解が分かるところである。秦韓の実態は不明だが、慕韓に関しては1980年代にその存在が確定した朝鮮半島西南部全羅南道の榮山江流域の前方後円墳をめぐる議論が重要である。考古学的立場からは榮山江流域が完全に百濟の文化圏に入るのには6世紀中葉以降のことで、前方後円墳はその最終的なせめぎ合いの様相を呈しているとされている。6世紀前半頃まで百濟と一定の距離をおき、百濟と関係を深めながらも、倭国内の諸勢力、特に九州中・北部の勢力、また大加耶とも提携する独自の勢力が存立していたと見て、ここに「慕韓」、即ち馬韓の残存勢力の存在を想定してはどうかと考える。但し、その文化的特徴から見て、この地域は百濟でもないし、加耶でもないし、勿論倭国の領土でもない。そうした自立した地域の存在と多元的外交の可能性が5世紀の日韓関係を特徴付けているのである。

こうした5世紀の倭と朝鮮半島諸国との多元的な関係が、倭—百濟関係一辺倒になるのが6世紀であり、加耶諸国をめぐる百濟と新羅の紛争勃発、その中で基本的に百濟支持の立場で介在する倭の存在が意味を持ってくる。そこで『日本書紀』に登場する「任那日本府」の理解が問題になる。これは「在安羅諸倭臣等」が当時の表記に近く、その実態は加耶地域居住の倭人集団であると考えられる。彼らは倭国の朝廷とは独自の立場にあったが、本国である倭国の朝廷、あるいはそれぞれの出身豪族ともいくつかの

パイプを有しており、何よりも自らの存立・活動の場を確保するために、独立維持を希望する安羅など残存の加耶諸国と共同して、百済と新羅、倭国、さらには高句麗とも外交交渉を行い、その時々で最善の方策を模索する行動をとった。なお、王権の成長という点では、6世紀中葉の加耶諸国滅亡後に、倭王権はこうした地方豪族独自の活動や外交権を接収して、7世紀に中央集権国家確立の時代を迎えることになる。

(キーワード)

百済系史料、『三国史記』、七支刀、広開土王碑文、倭の五王、全羅南道の前方後円墳、多元的關係、加耶、安羅、「在安羅諸倭臣等」

はじめに

4・5・6世紀の日韓関係と言え、その中心的課題の1つとして「任那」問題が挙げられる。当該時期の歴史を考える上で、日本側の中心的な文献史料となる『日本書紀』では、神代紀のスサノヲの新羅あるいは「韓郷之島」への降下記事を除けば、実質上の最初の外交記事は崇神65年(紀元前33?)7月条であり、垂仁2年(紀元前28?)是歳条によると、任那人蘇那曷叱知=意富加羅國王之子都怒我阿羅斯等(別名を于斯岐阿利叱智于岐といい、「蘇」は「于斯」(牛)の朝鮮語sioを、「那曷」は「岐(来)」と同義である「出る」「行く」の朝鮮語の語根na-kaを写したものと説明できるという)の来航が記されている。「任那」=意富加羅=大駕洛(『三国遺事』卷2所引「駕洛国記」)は南部加耶諸国の有力国の一つ金官国を指し、金官国は魏志倭人伝に倭国の北岸と見える狗邪韓国を引き継ぐ国であるから、崇神・垂仁紀の年紀は措くとして、早くから倭国と通交関係にあった半島南部の弁辰地域との交流が『日本書紀』の外交記事の劈頭を飾るのは相応しいものと言えよう。

『日本書紀』には6世紀の継体・欽明紀を中心として、「任那」や「日本府」に関わる記事が多く見えており、「任那日本府」なるものが朝鮮半島南部に存在し、倭王権(大和朝廷、ヤマト政権、ヤマト王権など様々な呼称法が存するが、倭国の王権の意で、本稿ではこの語を用いる)の出先機関ないしは半島経営の拠点として機能したものとして説明されてきた。即ち、「任那日本府」の設置は4世紀後半における倭王権の朝鮮半島南部への進出(高句麗広開土王碑文による)の時期で、当初は軍事的拠点の確保=「任那」(金官国)の軍事的統轄の形態、軍屯的な官家としての支配であったが、6世紀に入ると、百済・新羅の「任那」諸国への侵入が激しくなり、行政・外交機能を中心とする行政機関としての「日本府」が設置されたという。しかし、562年新羅が「任那」諸国を併呑し、「任那」諸国は滅亡、倭王権の「任那」支配、「日本府」の存在も終了するのである(註1)。つまり倭王権は朝鮮半島南部に「任那」という領土を有しており、4~6世紀、さらには7世紀の倭王権の外交活動はこの「任那」の保全・復興を主目的とするものであったが、結局のところそれは失われてしまったと見る訳である。

しかし、こうした見解は現在では大きく変更されており、史料用語として「任那」「任那日本府」が用い

られることはあるが、半島南部は加耶諸国とその興亡として説明されている。このような認識の変化の背景として、「任那」問題の前提としての4・5世紀の様相について、4世紀末の倭・百済関係のあり方を窺わせる石上神宮七支刀(奈良県天理市)、4世紀末～5世紀初の倭の半島での活動を示す高句麗広開土王碑文(中華人民共和国吉林省集安市)、『宋書』倭国伝に登場する5世紀の倭の五王の外交と内政など、『日本書紀』以外の文献史料に対する考察の深化がなされ、合せて『日本書紀』そのものの批判的検討も大きく進展したことが指摘できる。その意味では「任那」問題は4～6世紀の日韓関係の1つの焦点であり、6世紀の「任那」問題それ自体の理解についても大きな変化があったことは勿論である。

こうした研究の経緯や今日の見解の整理は本文のそれぞれの箇所に譲るとして、ここでは以下の叙述全体に関わる問題として、『日本書紀』、特にその外交記事の原史料となった百済系史料について、研究史と今日の見解をまとめておきたい。720年(養老4)に完成した『日本書紀』は6世紀頃から存した「帝紀」「旧辞」を中心に、朝廷の諸記録、諸豪族の家記、地方の伝承、個人の手記・覚書、寺院の記録、そして中国の史書や百済系史料など様々な史料を素材に編纂されたと考えられている(註2)。そうした中で4～6世紀の日韓関係を考える上で留意すべきなのは、朝鮮諸国との通交に関しては、4・5世紀については「百済記」、5世紀後半の一時期に「百済新撰」、6世紀の「任那問題」に関わる部分は「百済本記」と、百済系史料、いわゆる百済三書が利用されていることである。百済系史料は干支で年次が記されており、それを利用した『日本書紀』神功46年(『日本書紀』の紀年では246年)条の百済との関係の端緒や同52年(252)条の七支刀の記事では、干支二運、つまり120年を加える(紀年を修正する、修正紀年)と、『日本書紀』の紀年が中国・朝鮮の史書や金石文と年代が合致する場合が多いことが知られている。

例えば広開土王碑文永樂9年(399)条に百済が倭と「和通」したとあるのは、『三国史記』百済本紀阿莘王6年(397)5月条に百済が太子腆支を「質」として倭国に派遣したという記事をふまえたものである。これに対応するのが『日本書紀』応神8年3月条分註所引「百済記」の「百済記云、阿花王立无禮於貴國。故奪我枕彌多禮及峴南・支侵・谷那・東韓之地。是以遣王子直支于天朝、以脩先王之好也。」で、応神8年は『日本書紀』の紀年では277年だが、120年を加算すると397年になり、朝鮮側の文献史料・金石文の記述と合致することになる。記事によってはさらに60年の加算、干支三運を下げるべきものがあるが(註3)、こうした形で『日本書紀』の記事を中国・朝鮮側の史料と照合できるのは、百済系史料の有用性を示すものと言えよう。

この百済三書の成立時期や特色については、次のような諸説が呈されている。

A【津田左右吉1963、池内宏1970など】もともとは百済で編纂された通期的な史籍であって、7世紀後半の亡命百済人が将来したものである。しかし、『日本書紀』編者の手元にはそれぞれ部分的にしか遺存していなかったらしく、編者はこれを史料としながらも大胆な改変や潤色を加えて、起源説話を作ったり、日本の思想を示そうとした。

B【今西龍1970、三品彰英1962、井上秀雄1973など】6世紀末に百済が対倭政策の必要上編纂して提出したものである。三書はそれぞれ扱った時代を異にし、その性質上百済側の意図的な改変や潤色、また政治的主張がある。しかし、『日本書紀』編者は一貫してその原文や迎合的記述を尊重した。

C【木下礼仁1974】三書の字音仮名は「推古朝遺文」(7世紀前半の推古朝のものと考えられる金石文

などの一次史料)のそれと極めて高い近似性を示し、8世紀の奈良時代のものとの間には相当の懸隔がある。したがって三書は推古朝を中心とする時期に、「推古朝遺文」を残したのと同じ流れに竿さす文化荷担者の手になるものであることを示している。

D【坂本太郎1961、丁仲煥1974、久信田喜一1974、鈴木靖民1974、山尾幸久1977・1987など】三書の原形は百済の記録または史籍であるが、7世紀後半の亡命百済人が、それをもとにして改めて編纂し、『日本書紀』の修史局に提出した。それぞれ特定の時代を対象とし、日本にとって不利なことを削り自己の立場を擁護する種々の変改・潤色がある。

本稿では学説引用部分を除いて、倭、倭国という表現を用いているが、これは日本国号や君主号としての天皇号は7世紀後半の天武・持統朝頃に成立したという今日の有力学説に依拠したものである(註4)。その背景には従来有力とされてきた天皇号推古朝成立説を支える「推古朝遺文」と称される金石文などの記載が、天智朝、あるいは天武・持統朝に下るものと解されるようになったこと(註5)、古代国家、中央集権的律令国家成立の画期としての推古朝、乙巳の変(「大化改新」)という見方に疑問が呈され、むしろ663年白村江の敗戦や672年壬申の乱を経た天武・持統朝の画期性が注目されるようになったことなどが存する(註6)。百済三書には「日本」「天皇」の語が存し、倭国を指して「貴国」と称する共通の用語法とも合せて、現段階では百済三書の性格としてはD説が最も有力な学説であると言えよう。

但し、『日本書紀』本文に利用された百済三書の記述の中には、百済三書のもとになった百済の史籍の筆致がそのまま残されていると見られる部分もいくつか認めることができ【熊谷公男2005、中野高行2007】、そうした記述・用語の弁別に努めることも必要である点を付言しておきたい。

0-01『日本書紀』欽明15年(554)12月条

百済遣下部杆率汶斯干奴上表曰、百済王臣明及在安羅諸倭臣等・任那諸國旱岐等奏、以斯羅無道、不畏天皇、與狛同心欲殘滅海北彌移居。臣等共議遣有至臣等仰乞軍士、征伐斯羅。而天皇遣有至臣帥軍以六月至來、臣等深用歡喜。以十二月九日遣攻斯羅。臣先遣東方領物部莫哥武連、領其方軍士攻函山城。有至臣所將來民竹斯物部莫奇委沙奇能射火箭、蒙天皇威靈、以月九日酉時焚城拔之。故遣單使馳船奏聞。別奏、若但斯羅者、有至臣所將軍士亦可足矣。今狛與斯羅、同心戮力、難可成功。伏願速遣竹斯嶋上諸軍士、來助臣國。又助任那、則事可成。又奏、臣別遣軍士萬人助任那、并以奏聞。今事方急、單船遣奏。但奉好錦二疋・毳氈一領・斧三百口及所獲城民男二・女五。輕薄追用悚懼。』餘昌謀伐新羅。耆老諫曰、天未與、懼禍及。餘昌曰、老矣何怯也。我事大國、有何懼也。遂入新羅國築久陀牟羅塞。其父明王憂慮、餘昌長苦行陣久廢眠食、父慈多闕、子孝希成、乃自往迎慰勞。新羅聞明王親來、悉發國中兵斷道擊破。是時新羅謂佐知村飼馬奴苦都(更名谷智)曰、苦都賤奴也。明王名主也。今使賤奴殺名主、冀傳後世莫忘於口。已而苦都乃獲明王、再拜曰、請斬王首。明王對曰、王頭不合受奴手。苦都曰、我國法違背所盟、雖曰國王當受奴手。(一本云、明王乘踞胡床、解授佩刀於谷知令斬。)明王仰天大息涕泣、許諾曰、寡人每念、常痛入骨髓、願計不可苟活。乃延首受斬。苦都斬首而殺、掘坎而埋。(一本云、新羅留理明王頭骨、而以禮送餘骨於百済。今新羅王埋明王骨於北廳階下、名此廳曰都堂。)餘昌遂見圍繞、欲出不得、士卒遑駭不知所圖。有能射人筑紫國造、進而彎弓占擬、

射落新羅騎卒最勇壯者、發箭之利通所乘鞍前後橋及其被甲領會也、復續發箭如雨、彌厲不懈、射却圍軍。由是、餘昌及諸將等得從間道逃歸。餘昌讚國造射却圍軍、尊而名曰鞍橋君(鞍橋、此云矩羅賦)。於是、新羅將等具知百濟疲盡、遂欲謀滅無餘。有一將云、不可。日本天皇以任那事、屢責吾國。況復謀滅百濟官家、必招後患。故止之。

例えば史料01は百濟聖明王が新羅との戦闘で敗死する場面を描いたもので、その時代から言えば、「百濟本記」に依拠した記事と位置づけられる。この記事の前半部分(『印の前までの部分)には「斯羅(新羅)」、「狛(高麗、高句麗)」、「在安羅諸倭臣等(日本府)、また「竹斯嶋(筑紫島)」、「有致臣(内臣)などの表記(丸括弧内は通常の表記)があり、「百濟本記」の原形に近い文章が残されていることが看取できる。「海北」の語や「彌移居(官家)の用字【弥永貞三1964】もまた百濟系史料本来のものであると考えられる。これに対して、百濟王子余昌の突出と聖明王死去の場面を伝える後半部分は、用語も異なり、「百濟本記」が大幅に改変されていると判断される。

また百濟系史料には百濟王族や百濟出身貴族が倭国において政治的地位を確保するために、過去において百濟が「天皇」に如何に奉仕したかを記すという目的もあったので、百濟系史料の作成意図による潤色と『日本書紀』編纂時の造作・潤色を弁別することも必要であるという指摘も存する【松波宏隆1993】。倭国の対外関係では、仏教の導入など百濟との関係が重視されてきたが、こうした百濟中心史観は『日本書紀』の史料的性格に多分に影響されている可能性があり、百濟との関係を重視しつつも、その実相を再検討し、他の朝鮮半島諸国との多元的關係に目配りすることが求められていると言えよう。そうした視点での新たな研究蓄積も着実に進められているところである。

以下、こうした『日本書紀』の史料的特性にも留意しながら、各種史料の検討の上に立って、古代日韓關係の諸相・諸問題を整理することにしたい。

(註1)末松保和『任那興亡史』(大八洲出版、1949年)、井上秀雄「いわゆる任那日本府について」(『任那日本府と倭』東出版寧樂社、1973年、初出1959年)、八木充「大和国家の任那支配」(『律令国家成立過程の研究』塙書房、1968年、初出1963年)など。

(註2)坂本太郎『六国史』(吉川弘文館、1970年)、日本古典文学大系『日本書紀』上(岩波書店、1966年)「解説」など。

(註3)『日本書紀』応神37年(丙寅=306+120→426)2月戊午朔条「遣阿知使主・都加使主於吳、令求縫工女。(中略)吳主於是与工女兄媛・弟媛、吳織・穴織四婦女。」と雄略14年(庚戌=470)正月戊寅条「身狭村主青等共吳国使、将吳所献手末才伎漢織・吳織及衣縫兄媛・弟媛等泊於住吉津。」は同事重出記事と考えられ、雄略朝の出来事を応神朝にも懸けたものと解される。この場合は干支は合致しないが、こうした事例が存することは干支三運を加算すべき事由を示唆するものと言えよう。

(註4)森公章「天皇号の成立をめぐって」(『古代日本の対外認識と通交』吉川弘文館、1998年、初出1983年)、「日本国号と天皇号」(『新体系日本史』1国家史、山川出版社、2006年)。

(註5)東野治之『日本古代金石文の研究』(岩波書店、2004年)。

(註6)鈴木靖民『古代国家史研究の歩み』(新人物往来社、1980年)、森公章「倭国から日本へ」(『日

本の時代史』3倭国から日本へ、吉川弘文館、2002年)などを参照。

【引用文献一覧】

- 池内宏1970『日本上代史の一研究』中央公論美術出版
- 井上秀雄1973「任那日本府の行政組織」『任那日本府と倭』東出版寧楽社
- 今西龍1970「百済史講話」『百済史研究』国書刊行会
- 弥永貞三1964「官家・彌移居考」『名古屋大学文学部研究論集』35→『日本古代社会経済史研究』岩波書店、1980
- 木下礼二1974『『日本書紀』にみえる『百済史料』の史料的価値について』『古代日本と朝鮮』学生社
- 久信田喜一1974「『百済本記』考」『日本歴史』309
- 熊谷公男2005「いわゆる「任那四県割讓」の再検討」『東北学院大学論集』29
- 坂本太郎1961「継体紀の史料批判」『國學院雑誌』62-9→『日本古代史の基礎的研究』上、東京大学出版会、1964
- 鈴木靖民1974「いわゆる任那日本府および倭問題」『歴史学研究』405
- 丁仲煥1974『『日本書紀』に引用された百済三書について』『古代日本と朝鮮の基本問題』学生社
- 津田左右吉1963「百済に関する日本書紀の記載」『津田左右吉全集』2、岩波書店
- 中野高行2007『『日本書紀』における「任那日本府」像』『新羅史学報』10(『政治と宗教の古代史』慶應義塾大学出版会、2004の改訂版・韓国語訳)
- 松波宏隆1993「任那復興會議」関係記事と『百済本紀』『国史学研究』19
- 三品彰英1962「百済記・百済新撰・百済本記」『日本書紀朝鮮関係記事考證』上、吉川弘文館
- 山尾幸久1977「百済三書と日本書紀」『朝鮮史研究会論文集』15
- 山尾幸久1987『『日本書紀』と百済系史料』『立命館文学』500

第1章 4世紀の日韓関係

第1節 楽浪・帯方2郡の滅亡と日韓関係—三韓の動向と倭国—

BC2世紀末からAD4世紀初までの朝鮮半島にあった韓の諸国と列島の倭国との関係では、中国王朝が半島の中・西北部に置いた楽浪・帯方の2郡との交渉とここを介して王朝の都の洛陽へ遣使が進行したことによって、通交する者の間には中原王朝との臣属の関係を媒介として結ばれた相互の遣使・通交のサークルの如き様相が生まれており、2郡が遼東に撤退するまではそこには戦争や対立という厳しい事態は現れ難かったのではないと思われる。

中国王朝とその出先機関とも言える2郡に通い合う「惑星」の如き関係の半島と列島の諸地域では、

郡県に敵対する高句麗の武力は2郡が防波堤の位置にあって、韓と倭の地域にはその圧力は及び難く、高句麗の攻撃を受ける2郡からはその避難民を迎えていた。

この遣使・通交サークルのなかでは倭国はその外縁に位置する地理的条件の故に中国王朝や2郡からは有利な一面があったのではなかろうか。

前漢から魏を経て西晋王朝まで、中国王朝が伝統的に採用する遠交近攻政策は東アジアにも及ぶ。また、中国皇帝の徳治を異民族社会に拡張する立場から、中国王朝と倭国との場合では、その中間に位置して2郡を介して早くに皇帝の徳治に浴した韓の諸国は、外縁にある倭国の中国王朝への通交を促進させることが求められるが、それを実行するによって徳治が自己の社会にもより厚く及ぶことになるのである。

倭国の卑弥呼が2郡と魏の都に遣使し、優待されたのも韓の諸国のこうした位置から倭国の通交に「重譯」を始めとする「職約」から提供される協調が進んだからであり、また、魏が呉に対抗する軍事の立場から倭国を高く評価したことにもよる(西嶋1999、大庭2001、堀2006)。

倭国が2郡とこれを介して中国の諸王朝によく通交した背景には、倭国内部の要因とともに中国王朝の対外関係の構造維持の原理と倭との中間にある韓の諸国の「職約」を考えなければならない。なかでも通交の要衝たる弁韓の狗邪国や瀆盧国、そして楽浪、帯方2郡に接して朝鮮半島西部に位置する馬韓の諸国が倭国の中国通交に協調する「職約」の姿勢である。「職約」の遂行のなかで文化が価値をもって交流したのである。このことが倭国と加羅、そして百済との長くも堅い関係を生みかつ維持させた根源のひとつと考えられる(西嶋1983)。

ところが、この中国王朝と韓の諸国と倭国を結ぶ遣使・通交を脅かす存在が東北部の高句麗であり、その高句麗の行動を容易にした国際環境は西北の匈奴や鮮卑族が中国王朝へ攻勢し続けたことである。

かくて、高句麗の美川王が派遣した軍は313年に2郡を攻め、郡治を中国内部に撤退させ、朝鮮半島中・西北部におよそ400年もの間に続いた中国王朝による半島西北部における郡県支配と半島南部への間接統制は消滅した。

その年代は『梁書』や『資治通鑑』には建興元年(313)に乙弗利(美川王)が率いた軍が2郡を治める遼東の張統と慕容廆を攻撃したことを記録するが、これを承けた『三国史記』では高句麗が313年に楽浪郡を攻撃し、つづいて翌314年には帯方郡を攻撃したと編年する。(【史料1】参照)

【史料 I】

- ①『梁書』巻54・列伝48・高句麗「晋永嘉乱(307～312)、鮮卑慕容廆、抛昌黎大棘城、元帝授平州刺史、句麗王乙弗利、頻寇遼東、廆不能制」
- ②『資治通鑑』巻88・晋紀10・孝愍帝上・建興元年(313)・夏4月条「遼東張統據楽浪帯方二郡、與高句麗王乙弗利(美川王)相攻、連年不解、楽浪王遵、説統帥其民千餘家歸廆、廆為之置楽浪郡、以統為太守、遵參軍事」
『三国史記』巻17・高句麗本紀
- ③美川王3年(302)秋九月、王率兵三万侵玄菟郡、虜獲八千人、移之平壤。

- ④ 同 12年(311)秋八月、遣将襲取遼東西安平。
- ⑤ 同 14年(313)冬十月、侵楽浪郡、虜獲男女二千余口。
- ⑥ 同 15年(314)秋九月、南侵帯方郡。
- ⑦ 同 16年(315)春二月、攻破玄菟城、殺獲甚衆。

2郡の治所が遼東に移転したこと、即ち、中国王朝の郡県支配の機構が高句麗の攻撃を受けて朝鮮半島西北部から撤収されたことは、直ぐさまに高句麗が旧郡県の土地と民をその支配構造のなかには編入することではなかった。2郡の撤退後にも郡県の故地からは東晋の年号を印した埴には「韓氏」「孫氏」など中国人コロニーの性格を濃く持った定着型氏族が根強く残っていたことが窺える(朝鮮総督府1933)。高句麗がこれらの土地と勢力を統合するには、427年に長寿王が平壤に遷都するまで、およそ1世紀の過程を必要としたのである。

かくて、朝鮮半島の中西・西北部から2郡が消滅したことは高句麗と韓の諸国との間に緩衝地帯が残ることになったが、3世紀に盛んに進行した韓の諸国とこれに嚮導された倭の遣使サークルの如き関係はその求心点が消滅したこと、また楽浪・帯方2郡の旧民の一部が韓の社会に移動することが盛んとなったことから、韓の諸国の政治社会内部に変動を生むことになる。

この変動は倭国にも政治変化を生み出し、百済そしてやや遅れて新羅、さらに加羅と倭国における王権の権力集中を進めることになる。

しかし、この時代の列島の歴史は「なぞの4世紀」と称されるように、4世紀の列島地域の政治動向を伝える文献記録は乏しい。中国王朝に通貢した記事がこの間には見られないことは、先に2郡が撤退しており、その地を占拠しつつあった高句麗が通貢するには障害となっていたこと、また、これに対抗して半島地域では馬韓と辰韓、そして列島地域では邪馬台国から大和王権の倭国が誕生する王権形成が進行していたのである。(西嶋1985)

さて、2郡の遼東への撤収後の東アジアの動勢は一層変動する。西晋が316年に滅亡し、318年には建業(南京)に東晋が再興されたが、華北に五胡の王朝が興亡する中国の動勢に対応して、東北の高句麗は慕容氏政権との対立を軸として五胡十六国との間に対立と通交を交互に行う複雑な関係が継続する。この高句麗が北隣の勢力に対応している間、南の三韓と倭にも高句麗のこの動向に連なる新たな変動が生ずる。

【史料Ⅱ】

- ①『晋書』卷6・元帝「太興二年(319)十二月。鮮卑慕容廆襲遼東。東夷校尉平州刺史崔瑟奔高句麗」
- ②『資治通鑑』卷91・晋紀13・中宗「太興二年(319)十二月……中略……高句麗数寇遼東。廆遣慕容翰・慕容仁伐之。高句麗王乙弗利逆来求盟。翰・仁乃還」
- ③『晋書』卷百八・慕容廆載紀「明年(320)。高句麗寇遼東。廆遣衆擊敗之」
- ④『晋書』卷百五・石勒載紀「時(330)。高句麗・肅慎致其楛矢。宇文・屋孤、竝獻名馬于勒」
- ⑤『三国史記』卷18、故国原王4年(334)「秋八月、増築平壤城」
- ⑥ 同、故国原王5年(335)「春正月、築国北新城」

高句麗は慕容氏政権に対して築城に代表される防衛体制を強化した。その一方では、慕容皝に破れた慕容仁の幕下の佟壽や後趙の宋晃等の亡命を容れて(336、338年)、慕容氏との緊張関係と将来に備えた策を採っている。341年には高句麗は南北から5万5千の燕軍の進撃を迎えると、故国原王は作戦を誤り、丸都城を燕軍に落とされ、故国原王は都から遁走し、父の美川王の墓を燕軍に暴かれ、父の屍をも奪われる屈辱を受けたほかにも、王母や王妃のみならず宝物と5万余の男女を略奪される甚大な被害を被っている。

故国原王は翌年に燕王皝のもとに遣使し方物を貢いでその臣となることで父の美川王の屍は取り戻したが、母はなお質として前燕に留められた。

高句麗は手酷く敗北したにも拘わらず、前燕に対する臣属の姿勢は固まっておらず、王は一旦は南に移り住み、343年には東晋に通貢する姿勢を取った。そこで、高句麗は345年には前燕の攻撃を受け、翌年には前燕が1万7千の騎兵を送って夫餘を伐ち、その王を虜とした攻勢の前に、349年には高句麗に亡命していた宋晃を前燕に送り返して、ここで恭順の姿勢を示した。さらに、故国原王は355年12月に前燕に質を入れて恭順の姿勢を固くするや、14年ぶりに母を迎えることができたのである。

故国原王の内外の施策はやがて半世紀後に広開土王代の対外策を半島南部に展開するに至る陣痛でもある。故国原王は334年に平壤城を増築していたが、336年に東晋に通貢できたのもそれ故に可能であったのであり、また343年には旧帯方郡治下の黄城に故国原王が前燕の攻勢から避難できたことにも2郡の故地の勢力に向けた懐柔策とその建設の成果があったからである。

かくて、朝鮮半島の2郡の故地に向けた故国原王の南方志向は子の小獣林王と故国壤王にも継承された。高句麗は太白山脈に沿って拠点となる山城を構築して南下したが、朝鮮半島の東北部に位置して歴史的にも高句麗に属した濊を介して新羅がその策の対象となった。(末松1954、鬼頭1998)

その一方では高句麗は2郡の故地の獲得を狙う百済との対立を激化させた。この中で百済は長い歴史のある遣使・通交サークルの展開のなかで連携の蓄積を持った倭国を対高句麗対策に組み込むことになるのである。

この高句麗が2郡の故地に勢力を進めたのは、高句麗王権がその西北方面では劣勢な対外的危機から、王権の安定の基盤を半島の中南部に求めたことを意味しよう。それは、また、王国の経済基盤のなかに農業経済を組み入れることを旧楽浪・帯方郡の治下の社会に求めたことであつたと考えられる。

即ち、高句麗はその西北方面においては鮮卑族の後燕に苦慮していたが、西南部では楽浪、帯方2郡の支配機構を崩壊させた313年からおよそ50年の間に、高句麗がその故地に居住する遺民の社会を懐柔しつつ、ここを支配領域のなかにとり込みつつあつたのである。そのことが、百済では新羅の動向とも絡みながら、また倭国とも新羅とも対応しつつ、これを百済に結びつけることになるのである。

『三国史記』卷2・新羅本紀

基臨尼師今3年(300)「春正月、與倭国交聘」

訖解尼師今3年(312)「春三月、倭国王遣使為子求婚。以阿漚急利之女送之」

同 35年(334)「春二月、倭国遣使請婚。辭以女既出嫁」

同 36年(335)「二月、倭王移書絶交」

同 37年(336)「倭兵猝至風島。抄掠辺戸。又進圍金城急攻。王欲出兵相戰。伊伐滄康世曰。賊遠至。其鋒不可當。不若緩之、待其師老。王然之。閉門不出。賊食盡將退。命康世率勁騎追擊。走之」

【史料Ⅲ】

- ①『晋書』卷7・成帝「咸康二年(336)二月庚申。高句麗遣使貢方物」
- ②『晋書』卷百九・慕容皝載紀「(咸康三年)其年(339)。皝伐高句麗。王釗乞盟而還。明年(340)。釗遣其世子朝於皝」
- ③『晋書』卷109・載記卷9・慕容皝「咸康七年(341)皝遷都龍城、率勁卒四萬入自南陝、以伐宇文、高句麗、又使翰及子垂為前鋒、遣長史王寓等、勒衆萬五千從北置而進。高句麗王釗(故國原王)謂皝軍之從北路也。乃遣其弟武、統精銳五萬踞北置、躬率弱卒以防南陝、翰與釗戰于木底、大敗之。乘勝遂入丸都。釗單馬而遁、皝掘釗父利(美川王)墓、載其尸并其母妻珍寶、掠男女五萬餘口、焚其宮室、毀丸都而歸。明年(咸康8年(342)釗遣使稱臣於皝、貢其方物、乃歸其父尸」
- ④『三国史記』卷18、故國原王12年(342)「春二月、修葺丸都城、又築国内城。秋八月、移居丸都城」
- ⑤『三国史記』卷18、故國原王13年(343)「秋七月、移居平壤東黃城。城在今西京東木覓山中」
- ⑥『晋書』卷7・康帝「建元元年(343)十二月。高句麗遣使朝獻」
- ⑦『資治通鑑』卷98・晋紀20・孝宗「永和五年(349)十二月。高句麗王釗送前東夷護軍宋晃于燕。燕王雋赦之」
- ⑧『資治通鑑』卷一百・晋紀22・孝宗「永和十一年(355)十二月。高句麗王釗遣使詣燕。納質修貢以請其母。燕主雋許之。遣殿中將軍刁龕。送釗母周氏歸其國。以釗為征東大將軍營州刺史封樂浪公。王如故」
- ⑨『三国史記』卷18、故國原王39年(369)「秋九月。王以兵二萬南伐百濟。戰於雉壤。敗績」
- ⑩『晋書』卷113・載記・苻堅「太和五年(370)、又遣猛率楊安、張蚝、鄧羌十將率步騎六萬伐(慕容)暉。堅親送猛於霸東……中略……暉遣其太傅慕容評率衆四十餘萬以救二城(晋陽、壺關)、評憚猛不敢進、屯於潞川。……中略……堅遂攻鄴、陷之。慕容暉出奔高陽、堅將郭慶執而送之。堅入鄴宮、閱其名籍、凡郡百五十七、縣一千五百七十九、戸二百四十五萬八千九百六十九、口九百九十八萬七千九百三十五。諸州郡牧守及六夷渠帥盡降於堅。郭慶窮追餘燼、慕容評奔於高句麗、慶追至遼海、句麗縛評送之」
- ⑪『三国史記』卷18、故國原王41年(371)「冬十月。百濟王率兵三萬來攻平壤城。王出師拒之。為流矢所中。是月二十三日薨。葬于故國之原」
- ⑫ 同 小獸林王2年(372)「夏六月。秦王苻堅遣使及浮屠順道。送佛像經文。王遣使廻謝。以貢方物。立太學。教育子弟」
- ⑬ 同 3年(373)「始頒律令」
- ⑭ 同 4年(374)「僧阿道來」
- ⑮ 同 5年(375)「春二月。始創肖門寺。以置順道。又創伊弗蘭寺。以置阿道。此海東佛法

之始。秋七月。攻百済水谷城」

- ⑩ 同 6年(376)「冬十一月。侵百済北鄙」
- ⑪ 同 7年(377)「冬十月。無雪。雷。民疫。百済将兵三萬来侵平壤城。十一月。南伐百済」
- ⑫『資治通鑑』卷一百四・晋紀26・烈宗「太元二年(377)春。高句麗新羅西南夷皆遣使入貢于秦」
- ⑬『三国史記』卷18、小獸林王8年(378)「旱。民饑相食。秋九月。契丹犯北邊。陷八部落」
- ⑭ 同 14年(384)「冬十一月。王薨。葬於小獸林。號為小獸林王」

本節では前漢王朝がBC108年とBC107年に平壤を中心とする古朝鮮の故地を中心として白頭山一帯と朝鮮半島の北部に4郡を設定して以来、その改廢から高句麗の攻撃を受けて313年と314年に郡県統治が半島から完全に撤収されるまで、この間の半島と列島の諸族が相互にも通交しつつ郡へ通交する様を文献を通して通覧してきた。

その問題意識は、4世紀末の所謂「倭国の軍事的な朝鮮半島への進出」や「出兵」と言われるような対立的な関係が突如として出現したわけではないこと、古代の半島と列島の地域間交流の蓄積のうえに、これがまた王権の成長と国家の形成を生みだし、その国家の交流と地域間の交流の関係の歴史を理解しておくことが欠かせないことである。

そこで本節において通覧した半島と列島の地域間交流を進展させた基本要因を指摘すれば以下である。

①BC108年以來、およそ400年にわたって朝鮮半島の西北部に前漢と後漢、さらには公孫氏政權と魏、晋の郡として存在した楽浪郡と3世紀初めよりおよそ100年間存在した帯方郡の2郡は郡下の県を通じて中国王朝の統治がこの地域に及んだばかりでなく、特に半島の南部地域の韓の諸国と列島の倭国が連鎖しつつ2郡に通交してきた。

そこに王朝の徳治主義にもとづく対異民族の慰撫策と遠交近攻の王朝防衛策が相俟って半島地域より遠方に位置する倭国の王朝と2郡への通交が勸奨された。王朝に通う窓口でもあった楽浪・帯方の2郡が半島の西北部に位置したことは、その後の日韓関係が半島の南部の諸族を介して進行し、やがて百済との友好的な関係を進展させた一方では、新羅とは対立的な方向に進むことになる地理的要因であった。

この2郡とは反対に、半島の東北部に置かれた臨屯郡が早くに高句麗の攻撃の前に廢止され、やはり玄菟郡も高句麗の攻撃から半島の東北部から遼東に撤退したことの背景には高句麗族の国家形成への成長があった。この地域から郡県が消滅したことによって半島の東北部地域には高句麗の勢力が成長し、やがて4世紀後半には半島の東南部にある新羅が高句麗の勢力圏に収められることになった。

②楽浪・帯方の2郡へ半島と列島の諸国が通交するには相互の協調が見られる。3世紀にあつては盛んに晋に通交した馬韓を始めとする東夷の諸国の間には通交をめぐる紛争のことは記録に見ない。韓の小国の首長が魏王朝から「臣智」や「邑君」の爵位を受け、また魏から下賜された「印綬と衣幘」を身に付けて郡に至って「朝謁」するものが「千有余人」にもなると『三国志』魏書の韓伝にあることは、そのことを推察させる。

この韓の2郡への遣使ブームは、遠地の倭国の2郡への遣使を呼び、またその嚮導を進めることにな

ったのである。「臣智」や「邑君」が通交者の嚮導を忌避すればその「職約」を務めないこととなり、郡からの圧力を受けることになるからである。

後に、新羅が高句麗とともに前秦に通交したのも高句麗の「職約」であり、高句麗が新羅に優位な位置を得ることにもなる。

馬韓さらには弁韓の諸国が2郡へ通行することを基礎として、倭国は2郡を介して中央の王朝の優遇を得たのである。「漢倭奴国王」や「親魏倭王」の金印に代表される様に、倭国ではこの優位な地理関係と通交のシステム原理から郡を介した王朝の下賜品が蓄積されて行く。中国文化の遺産が時系列に列島の西部地域に貯蔵される様相が継続する由縁である。

＜参考文献＞

大庭脩2001『親魏倭王』学生社

鬼頭清明1998「東アジア世界の変貌とヤマト王権」平野邦雄編『古代を考える邪馬台国』吉川弘文館

朝鮮総督府1933『昭和七年度古蹟調査報告 第一冊』

西嶋定生1985『日本歴史の国際環境』東京大学出版会

西嶋定生1999『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会

西嶋定生1999『倭国の出現—東アジア世界のなかの日本』東京大学出版会

堀敏一2006『東アジア世界の形成—中国と周辺国家』汲古書院

第2節 七支刀銘の日韓関係—百済の国家形成と倭国—

【七支刀銘文の研究史】

七支刀は今日、奈良県天理市柚之内に鎮座する石上神宮の宝庫に保存されている。明治6年(1873)に同社の大宮司に任命された菅政友(菅、1907)がこれを発見し、「六叉鉞」の名称で公表したことから世に知られることとなった(藤井、1995)。以来、七支刀に向けられた今日までの研究成果と問題点は神保公子氏によって簡潔に整理されている(神保、1973、1975、1981)。

この刀銘が古代の日韓関係史研究に欠かせない史料として、その価値が高まったのは古代日韓関係史像の再検討の必要が喚起された1970年代からのことである。

神保氏は、七支刀銘文の研究史を3期に区分された。第1期は「研究が開始された時期で、明治から第二次大戦に至るまで」とする。この期は七支刀に銘文のあることが注目され、銘文の冒頭に刻まれた紀年の比定に研究が集中し、『日本書紀』神功皇后紀に記録された「七枝刀」こそこの七支刀であると見なされたが、研究は歴史叙述にまで進まず、七支刀が未だ歴史研究の対象外にあった期間と言う。

続く第2期は、1950年に榎本杜人氏が七支刀を実査し(榎本1950、1952、1953、1954、1955)、翌年にも福山敏男氏が実調査をもとに銘文研究を発表された(福山1951、1952)ことを神保氏は画期と捉える。両氏の調査によって紀年の「泰和」は東晋の「太和」の異表記であるとする判読が有力となり、また、銘文中に「百済」「倭王」を釈読したことが注目を呼び、七支刀銘文は古代日韓関係史の研究において高

い史料価値があることが確認され、また、『日本書紀』巻9・神功皇后摂政52年(372)条に基づいて、372年に七支刀が百済から倭国に献上された、とする理解が強まったと、この第2期を神保氏は把握した。

第3期は1963年に発表された金錫亨氏の論文「三韓・三国の日本列島内の分国について」(原題「삼한 삼국의 일본 렬도 내 분국에 대하여」(『력사과학』1963年1号、平壤))が鄭晋和氏によって和訳され、『歴史評論』(165・168・169号、1964年5・8・9月)誌において我が国の古代史学界に紹介されたことに始まる。この金論文は百済王が王の「侯王」、即ち臣下と見なした倭王に七支刀を下賜したと説いた。第2期以来つづいた百済王が倭王に七支刀を献上したと見た日韓関係史像をここでその上下を逆転させる金論文は日本のみならずやがて韓国の古代史学界に波紋を起こした。

こうして、七支刀銘文の判読とその紀年の再検討、百済と倭国との位置関係の再検討などの問題が研究者によって考究され、古代日韓関係史像の再検討が盛んに進められる緊要な課題となった、と神保氏は整理される。

この第3期は、それまでの学説に再検討を加え、多くの新説が提出されたが、七支刀が国宝指定の考古史料であることから研究者は容易にこれを実査出来なかったことに起因する点もあるが、各説は七支刀銘文を慎重に実査検討した上での研究ではなかったことが新学説の危うさでもあった。

しかし、この間、実査を根気強く希求しつづけた村山正雄氏によって1996年12月に同氏編著の『石上神宮七支刀銘文図録』(吉川弘文館、以下『図録』と略称する)が刊行され、精巧な写真とレントゲン写真が研究者に提供されることになったから、これより今日に至る第4期の研究史が始まったと言える。研究者が「七支刀銘文」の全61文字を慎重に検討できる好資料を得たのである。

【七支刀の銘文】

第4期に木村誠氏が村山編著の写真類を検討し、その結果(木村、2000)を発表されるまで、「七支刀銘文」は61文字で構成されると判読されてきた。木村氏は表面冒頭の紀年の「年」と「月」の2字の間が他の字間に比べると空き過ぎることに注目し、村山氏の指摘を継承して、『図録』のレントゲン写真のなかで「年月」の字間のなかに「+」字が埋もれていることを認めて、これを「十」字と判読した。これに続く文字格の殆ど消えた字格は、これまでは鑄造時の好機とされる盛夏の五月の「五」字と推読してきたが、木村氏はここにも鑄の中に「一」字を判読して、前者と併せて「年十一月」と判読する新しい判読を提示した。

吉田晶氏(2001)がこれに納得したが、木村氏の判読法は『図録』に基づいている点は評価されるが、果たして妥当な判読であるか疑問がある。山尾幸久氏(1981、1983、1986、1989)や拙稿(2005)が説くように、「年月」の字間のやや空きこそ七支刀が百済において「原七支刀」を手本にして仿製したものと理解を支える傍証のひとつでもある。

七支刀は鑄造から今日までの永い年月の間に鉄錆が隆起し、また金象眼が剥落した部分があるために、全く判読が不能となった文字がある。こうした判読不能な文字を含みながらも、『図録』を得た今日、判読はより精度を高めている。

そこで、「七支刀銘文」の研究史と論点を踏まえて、『図録』に直面して61文字を視覚的に、また文脈整理に重きを置いて整理した判読文が以下である。(以下、は文字の残画から判読される文字。□は

銘文の文脈や同類の金石文史料から推読した文字。判読に至る整理の詳細は『第1期日韓歴史共同委員会研究報告(第1分科)』(2005年11月)を参照して頂きたい。

表面の銘文34字は、

泰和四年五月十六日丙午正陽造百練□七支刀出辟百兵宜供侯王永年大吉祥

となる。「泰和四年」(369年)の盛夏の「五月十六日」は、火気の強い「丙午」の日であるが、太陽が真南に昇った「正陽」の時刻に、「百」たびも「練」ったと言う上質の「□」を材料として、「七支刀」を「造」った。この刀は「出」では「百兵を辟ける」という呪力を持っており、「供供(深く恭しい)」たる「侯王」が佩刀するに「宜し」(相応し)く、また「侯王」は「永年」に涉って「大吉祥」であろう。

裏面の銘文27字は以下である。

先世以来未有此刀百濟王世子奇生聖音(晋)故為倭王旨造傳示後世

と判読される。「先世以来」、「未」だ「此」のような(形の、また、それ故にも百兵を辟けることの出来る呪力が強い)「刀」は(百済には)無かった。「百済王と世子」は「生」を「聖なる晋」の皇帝に「寄」せることとなった。それ「故」に、「倭王」の「為」に皇帝が百済王に賜われた「旨」を共にしようとの刀を(仿製して)「造」った。「後世」にこの刀とこれに秘められた皇帝の旨を伝え示されんことを。

【七支刀銘文の歴史像】

七支刀銘文の判読では前述のように困難な文字があるために、その判読から構成される歴史の解釈にはかなりの相違が生まれているが、以下の理解が可能である。

「泰和四年」は東晋の泰和4年であり、369年である。ところが、七支刀が百済王権の命令で製作されたものであれば、記録の上では、百済は3年後の東晋の咸安2年(372)正月に東晋に初めて遣使し、同年6月に百済王の餘句(近肖古王)が「鎮東將軍領樂浪太守」に冊封されるから、この冊封を受ける372年6月以前に百済王が倭王に送る七支刀に東晋の年号である「泰和」を理解して、これを象眼させたことになるが、このことはありえないと理解される。鈴木靖民氏(鈴木、1983)は、百済王権に参与する中国系の文筆担当者が東晋を尊崇してその年号を百済王が東晋から冊封される前に使用したと推測される。樂浪・帶方2郡が朝鮮半島から遼東に撤収された後、その故地では東晋の年号を使用した「永和九年」(353年)や「元興三年」(404年)銘の磚が出土しているが、それらは高句麗王権或いは百済王権の発動とは異なる私的な次元で年号を地下の墓室に使用した例である。

七支刀は百済王権の発動として倭王との外交に必須の贈与品である。この外交に百済が未だ東晋の正朔を奉ずる冊封関係に参入していない時期に造刀した七支刀に、東晋の年号を自主的に象眼したとは理解できない。百済の古都である漢城や熊津や扶餘地域からも百済が中国王朝と冊封関係を結んだ時期に相当する頃でさえ、王朝の年号を使用したことを明示する遺物は未だ発見されていない。百

済の故地では中国の年号を国内的に使用した遺物を今日まで見ないのは不思議である。(濱田2005)

やはり、百済が372年以前にも東晋に遣使したとの記録が無いことを考えると、「泰和四年」の紀年は本来において百済でオリジナルに銘記されたとは考えられない。この紀年を銘記して、戦争などに「出」では「百兵」を「辟(しりぞ)」けることが出来るという辟邪の呪力を強く期待された「七支刀」は「侯王」が佩刀するに相応しいと言う完結した表面の銘文は、やはり「泰和」の年号を奉ずる政治社会のなかで原形(モデル)が鑄造されたと考えなければならない。それは百済に於いてではなく、山尾氏の説くように369年の東晋においてであると考えられる。(山尾1989)

石上神宮蔵に現存する七支刀は、百済が東晋において「造」られた七支刀を東晋から下賜され、この外交関係を倭王とも共同する意図から百済はこれを倭王に贈与する目的で七支刀の一振り新たに仿製したものと理解される。現存の七支刀は百済において仿製されたものであり、モデルとなった百済に東晋から下賜された「原七支刀」は百済の地下に埋葬されたか、破壊されたか、その所在は不明である。

山尾氏は百済が東晋から七支刀を下賜されると、百済ではこの「原七支刀」を「模造」して裏面に倭王に贈る由来の文を象眼して倭王に贈ったとする説くが(山尾、1989)、その指摘はここでは支持される。そう理解することで、後述するように「倭王の為に旨をもって造る」(「為倭王旨造」)の「旨」と「造」の字義が納得されるからである。

ところで、東晋が「泰和四年」(369年)に七支刀を鍛造した背景には福永光司(1987)や佐伯有清氏(1977)、山尾氏(1989)等が説くように、その形態と「百兵」を「辟」けることが出来るという道教的禁呪を期待する信仰が東晋社会に隆盛したことを想起すべきであろう。

さて、ここまで考察してみると、表銘文には百済の王権の意志を読み取ることはできず、「侯王」に“宜”ろしとは皇帝に臣属して、「原七支刀」を下賜されるべき「侯王」とは百済王が該当する。その年は百済の近肖古王が372年正月に東晋に遣使し、同6月には「鎮東將軍領楽浪太守」と冊封され、冊封使を迎えたが、この頃に東晋の外臣となった百済王に「原七支刀」が下賜されたと、理解される。

百済が東晋の正朔(年号)を奉じない頃に、百済在住の中国系知識人が七支刀をオリジナルに造ってこれに東晋の年号を刻み、これを倭王に贈ったとの鈴木氏の推測(1983)は、知識人であれば冊封を受けない国際関係の下で、百済王が倭との外交に東晋の年号を用いることの無理は承知していたであろうから、やはり七支刀のオリジナル(原七支刀)は東晋でこそ鍛造されたと考えるべきである。

ところで、紀年を宋の「泰始四年」(468)と判読した宮崎市定説(1982)でも無理がある。百済王の餘慶(蓋鹵王)が宋の大明元年(457)に鎮東大將軍に冊封されていたから、468年の蓋鹵王代に百済が宋の年号を百済オリジンと見た七支刀に刻することに疑問はなさそうである。しかし、百済では武寧王が521年に梁から寧東大將軍と冊封されながら、その陵墓に納めた買地券には梁の年号を刻まずに干支を用いたように、やはり百済は冊封下においても中国の年号も、また百済が独自の年号を定めたと仮定すればそれすらも使用したことを示す資料を見ないことを考えれば、七支刀の紀年を「泰始四年」(468)と判読しても、その製作地は百済ではなく宋朝であるべきことを考えるべきである。

一方、七支刀の「泰和」は中国王朝からの冊封とは無縁であり、百済の独自の年号であるとする延敏洙氏の説(1994)では、「泰和四年」とは今日の史料範囲では百済による唯一無二の年号使用の遺物と

なる。

また、「泰△四年」と判読する李丙燾氏(1976)は『日本書紀』神功紀52年9月条に七支刀が献上されたとの記事から、同皇后52年は壬申年であり、干支2運下げれば372年に相当するが、この歳の9月こそ七支刀の「十六日丙午」の干支に相当すると言ひ、ここから七支刀の作成は372年9月16日と説く。この李説では、作刀年月が『日本書紀』では七支刀が倭に送られた年月として編年されたと説くのである。そこで李説では、「泰△四年」は372年であり、その元年が369年となるのである。

李説は「泰△」と判読して「泰和」とは判読しないことから東晋の「泰和」の年号論に触れないところにその論は成り立っているが、東晋の「泰和四年」が百済では「泰△」元年であったことになる。しかし、「泰△」と判読する李説は、前述の判読のように「泰和」の判読の前には無理が生まれる。369年の頃は、百済が高句麗に対して優勢な時期であったとしても、369年に百済が独自に建元したとする傍証はやはり見出し難いのである。

延敏洙氏も「泰△四年」と判読して、これを百済の独自の年号であり、武寧王4年(504)とする説にも傍証はなく、またこの頃も百済は干支を使用していることから、李説とともに百済の独自年号説は現在の史料状況では成立しない。

やはり、七支刀の紀年銘は、山尾幸久氏が推定するように東晋での作刀の際に刻まれたものと理解することが妥当である(山尾、1989)。これまで、『日本書紀』では372年に相当する神功皇后摂政52年に七支刀が百済から日本へ献せられたとする記事に引きずられて、七支刀を百済と倭国の2国関係に限定して、これを百済製と見なしてきたが、この前提から離れて、七支刀の原型を東晋に求めた山尾氏の考察は注目される。

さて、表面の銘文は「出でては百兵を辟ける」という呪力をもつ七支刀を盛夏の「五月」の火気の強い「丙午」の日に、「百」たびも「練」った素材を用いた丁寧な工程を経て完成した故に、この強い呪力を秘めた「七支刀」は「供供(深く恭しい)」「(佐伯、1976、1977)たる「侯王」が佩刀するに相応しく、また「侯王」は「永年大吉祥」であろうと言う完結した定型の文である。これはこのままに東晋において皇帝から「侯王」への下賜品として鍛造され、その呪力の強さが期待されて象眼されたと素直に理解される。

ところで、表裏の面の銘文の字体を注視すれば、「造」「百」「刀」「王」が表裏両面でも象眼されており、その字形は、山尾氏が指摘するように相違が多い(山尾、1989)。

こうした表裏の銘に表れた同一文字の字形の差異は鍛造時に表裏の銘の象眼が異なる人物でなされたとは考えがたく、山尾氏の推定のように、表面の銘文は東晋で造られた原型の七支刀の象眼の字体が手本となっており、裏面では「先世以来」百済に無かった原型の「七支刀」を「倭王」の「為」に「造」ったことを強調していることを読めば、百済王の命をうけて原型の七支刀をモデルとしてこの七支刀を仿製して「造」る百済王の発意を表した文である。

こう読んでくると、表裏の銘文でも七支刀を「造」ったと象眼していることの違和感は解消される。山尾氏の説くように、表面は369年に東晋でまず鍛「造」された七支刀が372年頃に百済に伝わったが、山尾氏が仮称するこの「原七支刀」の銘文のなかで、百済王は「出(い)」では「百兵」を「辟」けるといふ戦勝の呪力の意義を理解して、この呪力とこれを「侯王」たる者の百済王に下賜した東晋皇帝の恩とを「倭王」も享受すべく、この「原七支刀」を模して新たに「七支刀」を「造」り、即ち仿製して、倭王に

贈ったということである。

現存の七支刀は百済王が東晋から賜った表面にのみ34文字の銘文を持つ原「七支刀」を仿製し、その裏面にこれを倭王に贈る経緯の文を象眼した、いわば「仿製七支刀」であることになる。

百済王が「原七支刀」を仿製する意図は「為倭王旨造」の句から読みとれる。即ち、この「旨」とはこれまで『宋書』倭国伝に記録されて所謂「倭の五王」の名に引きずられて「倭王」の名として理解されてきた(神保、1973)。また、宮崎(1982)はこれを「嘗」の略体であり、つづく「造」に連なって「はじめて」の意味であると理解された。「嘗(はじめて)」は裏面の冒頭にある「先世以来未有此刀」を承けると理解したのである。しかし、古代東アジア世界の冊封関係を背後として、「侯王」に下賜される臣属関係を背景とする銘文に現れた「旨」は、まず人名や副詞と把握する前に、皇帝の意志を表す「聖旨」や「慈旨」の意味で理解すべきではなからうか。七支刀の裏面の銘文ではこの「旨」の6字上に明らかな「聖」字が刻まれており、「旨」はこれを秘かに承ける文字であると理解される。

「旨」の字は「聖」の字を承ける字義で解釈してこそ百済王が「原七支刀」の銘文の意義、即ち、皇帝が「百兵」を避ける僻邪と「永年大吉祥」とを「侯王」に祈念する「聖旨」を理解して、「原七支刀」をその銘とともに仿製し、これを倭王に贈る外交意図が裏面の銘から理解されるのである。

即ち、「聖旨」を奉じて「此刀」を仿製して「造」ったと言う百済王の対倭外交の意図が読まれる。

その意図は勿論百済のものである。百済の近肖古王と太子は369年に対高句麗戦に有利な形勢を獲得し、372年正月から6月には東晋外交に成果を収め、「原七支刀」を下賜されたと推定されるが、高句麗に対峙しつつ東晋の冊封を受けた外交の新展開を倭王に報じ、倭国をもこの外交ラインに加えて対高句麗ラインの強化を図る百済の対倭外交である。

ただ、倭は既に369年の百済・高句麗戦には百済の陣営に参戦していたとの説がある(末松、1956)。この説に従っても、百済が現存の七支刀(山尾説を支持する立場からは、百済で仿製した七支刀)を倭王に贈ったことは、百済が東晋を背景として対高句麗戦略上において倭との連携を強固にする外交の一環であったと理解される。(鈴木2002)

裏面の銘文に即して百済の外交を理解すれば、百済王(近肖古王)と太子、それは372年6月に百済王は東晋から冊封を受けており、この関係から仿製時には太子を「世子」と象眼することが可能であったのであり、百済王と「世子」は、「聖音(晋)」に「奇(寄の略字と理解する)生」する、即ち「生を寄せる」ことになったのである。「聖音」であれ「聖晋」であれ、ともに、百済王が「侯王」となって臣属する東晋の皇帝やその恩徳を蒙ることを意識した尊称である。その「侯王」のシンボルのひとつが「侯王」が佩刀するに相応しいとして下賜された呪刀の原七支刀であった。東晋王朝の工房で丹念に鍛造された僻邪の呪力が強いと期待された原七支刀が百済王に下賜されたことは、百済王の対高句麗に備えた外交意図を東晋が容れたことを意味しており、百済王(近肖古王)と世子は東晋皇帝の「聖旨」や恩徳たる「聖音」に帰して、これを倭王とも共有すべく呪刀の原七支刀を仿製したものと考えられる。

川口勝康氏(1993)がこの「聖音」は東晋皇帝の「教令・指令」の意味に解釈し、百済が「七支刀」を鍛造した背景には東晋皇帝の命令があると理解して、東晋の外交意図を高く評価したことも肯ける。

このように表裏の銘文を理解してくると、七支刀をめぐる国際関係は以下のようにまとめられる。

①369年に東晋の工房では、「侯王」が佩刀するに相応しく、「出」では「百兵」を「辟」けることが出

来る呪力をもつと期待される七支刀を鍛造し、この呪力の高いことを願って丁寧にこの刀を造った経緯を34文字の銘文に象眼した。

②372年正月に百済の近肖古王が東晋へ初の遣使を行ったが、この際にか、または、続く同年6月に近肖古王を「鎮東將軍領樂浪太守」と冊封する東晋の使者を百済は迎えたが、この際にか、東晋から七支刀が百済王に下賜された。

③百済では東晋の「侯王」に相応しく、かつ呪力を秘めた七支刀が下賜されると、その呪力を期待し、かつ東晋皇帝の恩徳を広めんとし、即ち「聖旨」を奉じて七支刀を仿製し、その「聖旨」の核心たる表面の34字の銘に加えて、百済が七支刀を仿製し、この仿製された七支刀を倭王に贈る経緯を裏面に27文字で象嵌して、倭王に贈る外交を行った。

この経緯から、表面の銘にある「侯王」とは第一義には原「七支刀」を下賜された百済王が東晋の「侯王」なのであり、百済は倭王を百済の「侯王」と位置づけたとの理解は成立しない。その仿製された七支刀を百済王から贈られた倭王は、百済からすれば東晋に対しては百済と同位置にある「侯王」なのであり、これは二次的な「侯王」なのである。

④百済王が倭王に仿製した七支刀を贈った外交の狙いは、百済王が東晋の冊封を受けて「侯王」たる外臣となったが、その延長上に倭王を置いて、百済の対高句麗戦略に倭王が共同するよう奨めることであつた。

⑤『日本書紀』は「七支刀」等の「献」上に続いて、「仍啓曰、臣国以西有水。源出自谷那鉄山。其邈七日行之不及。当飲是水、便取是山鉄、以永奉聖朝」と百済の使者の言を記録しているが、ここに谷那鉄山が鉄の供給地であることを使者が述べているのは、仿製七支刀の原料がこの鉄であつたとのことを暗示している。

⑥『三国史記』百済本紀によれば、百済の近肖古王は即位23年(368)3月に新羅に遣使して良馬2匹を贈って通好していたから、この372年に至って、百済は東晋との関係を核として倭とも通好し高句麗に備える南方ラインを形成したのである。しかし、新羅は高句麗の圧力の前に間もなくこのラインから離脱して高句麗と結ぶことになる。

そこで、あらためて現存の七支刀の裏面の銘文は以下のように解釈してこそ、百済が東晋を背景として倭と結んだ外交意図が理解されよう。

「先世以来、未だこのような(形の、また、それ故にも百兵を辟けることの出来る呪力が強い)刀は(百済には)無かつた。百済王と世子は東晋の冊封を得て、生を聖なる晋の皇帝に寄せることとなつた。それ故に、東晋皇帝が百済王に七支刀を賜われた「旨」を倭王とも共有しようと、下賜された七支刀を(仿製して)「造」つた。後世にも永くこの七支刀とこれに秘められた東晋皇帝の旨を伝え示されんことを。」

さて、百済王が東晋から下賜された七支刀(原七支刀)を仿製した現存の七支刀を倭王に贈ったその外交姿勢には、百済王は倭王をも自己と同じく東晋の「侯王」となるべき国際関係を構想し、これを実行したのである。「伝示後世」の語意が東晋を背景に置いた百済の倭国に向けた姿勢を示しているが、その後の百済と倭国の関係を以下に見ればその外交は成功している。

【七支刀をめぐる国際関係】

前述したように、百済では東晋に初めて遣使して冊封を得るとともに下賜された七支刀を仿製し、これを倭王に贈った外交の背景には百済が直面する対外関係があった。『三国史記』巻24・百済本紀によれば、近肖古王23年(368)春3月に百済は新羅に遣使して、良馬2匹を贈って通好した一方では、翌年(369)9月には高句麗王の故国原王が歩騎2萬の兵で百済を攻撃してきたから、近肖古王は太子に兵を付けてこれを撃破させ、5千餘級を獲得した。同年冬11月にも百済は漢水の南で閲兵し、同26年(371)には、再び高句麗兵の襲撃を受けたから、近肖古王は淇河に高句麗兵を急撃し、高句麗兵を敗走させた。同年冬には近肖古王と太子は精兵3萬を率いて北上し高句麗の平壤城を攻めたが、この戦いでは応戦する高句麗の故国原王は流矢に当たって戦死するほどの勝利を百済は得た。

この高句麗戦における勝利の後に、百済は翌372年正月に東晋に遣使して朝献し、同年6月には近肖古王は東晋の使者を迎えて「鎮東將軍領楽浪太守」に冊封されたのである。この時、百済は前述のように七支刀を下賜されたと推考されたが、これを仿製して倭王に贈る外交を行ったのである。

それは『日本書紀』に言う神功皇后摂政52年(372)9月のこととまずは判断されるが、これにも検証が求められる。『日本書紀』は日本が律令国家として成立する過程における新羅および百済、高句麗との関係史を物語として叙述する傾向があつて、この七支刀が百済から「献上」されたと記録し、『古事記』では中巻の応神天皇記に「照古王」が「横刀」を「貢上」したと記録するが、前述した百済からの仿製された七支刀の贈与のことは372年9月よりやや後のことであるかも知れない。

さて、百済は368年には新羅に通好して、高句麗戦を有利にすすめ、かつ372年に東晋の外臣となった国際関係を築くと、直ぐにもこのライン上に倭国を参入させ、高句麗に備える南方ラインを強化したのである。百済の近肖古が七支刀を倭王に贈る外交の前史は『日本書紀』巻9・神功皇后46年条によれば「甲午年(364)」に百済が加耶の卓淳国に使者を派遣し倭国への案内を求めていたことがあつた。

百済は倭国への通交に連なって加耶諸国にも通じている。『日本書紀』巻19・欽明天皇2年(541)4月条には百済の聖明王が近肖古王代を懐古して、安羅・加羅・卓淳の早岐らが初めて百済に通交し「子弟」の関係を結んだと言う。百済の南方ラインの形成にはまず加耶諸国は欠かせない存在であつたことが理解できる。

ところで、中国周辺の王権と中国の皇帝との間にひとたび冊封関係が成立すると、冊封関係を通じて皇帝の恩徳をさらに周辺に拡張することを宗主国は被冊封国に求めることになる。そこで、被冊封国は王の権威とその位置の保障を得るためにも隣接の王権を冊封関係のなかに導くことになるのである。こうして百済を媒介とする中国南朝と倭王や加耶諸国との間の6世紀前半にまで続く百済を中心とした外交の南方ラインが開始したのである。

百済の近肖古王は自ら築いた東の新羅と西の東晋、そして南の倭国と加耶諸国を結ぶ南方ラインの外交体制のもとで北の高句麗に対抗した。『三国史記』の百済本紀と高句麗本紀には両国が一進一退の戦いを4世紀末の高句麗の広開土王に至るまで繰り返したことが記録されているが、新羅は以下に述べるように早くも377年には百済の南方ラインから離脱して高句麗に取り込まれている。

そこで注目されるのはこの間の新羅の動向である。『三国志』魏書・韓伝に辰韓12国の中の1国として「斯盧国」が見えたが、『晋書』では3世紀末に西晋に通交した「馬韓辰韓等東夷諸国」として一括される

程に、王権は未だ諸国に超越していない。ところが、377年に至って新羅の名において前秦に遣使したことが『資治通鑑』巻104・晋紀・烈宗に「太元二年(377)春。高句麗新羅西南夷、皆遣使入貢于秦」と見える。これは前燕が前秦に滅んだ後に高句麗と新羅が前秦に遣使した外交であるが、ここに新羅が高句麗と並んで秦に入貢したことに、新羅が百済のラインから離れて高句麗に従った動向が現れている。

続いて『太平御覧』巻781・四夷部2・東夷2・新羅には『秦書』を引用して「符堅建元十八年、新羅国王樓寒、遣使衛頭、献美女、国在百済東、其人多美髮、髮長丈餘。又曰、符堅時、新羅国王樓寒、遣使衛頭朝貢。堅曰、卿言海東之事、與古不同何也。答曰、亦猶中国時代变革、名号改易」とある。この前秦王の符堅の建元18年(382)に至って、明確に「新羅国」の名において新羅王の樓寒(奈勿王)が北朝の前秦に通交しているが、この外交にも高句麗の協調があったに違いない。新羅は高句麗に導かれて北朝に連なる北方ラインに組み込まれたのであるが、このラインは5世紀末まで継続することになる(井上、2000)。

一方、百済は『晋書』巻9・孝武帝紀には、「大元九年(384)七月、百済遣使来貢方物」とあり、さらに、同書には「大元十一年(386)夏四月、以百済王世子餘暉、為使持節都督鎮東將軍百済王」ともある。百済は高句麗と戦闘を継続するなかで、新羅の離脱がありながらも、東晋の冊封体制のなかに「百済王」として認知され、倭国に先んじて南朝の冊封体制のなかに自己の位置を構築して行く。

ところで、この間の倭国の動勢は『三国史記』新羅本紀によれば、3世紀以来屢々新羅の辺境を襲ったとあるが、奈勿尼師今9年(364)に新羅へ侵入した後には同38年(393)まで侵入の記録は見ない。4世紀後半から5世紀初にかけて、倭が百済と加耶諸国との南方ラインに立って、高句麗と新羅の北方ラインと衝突したことは、高句麗の立場からこれを414年に記録した広開土王碑文から知られる。

【参考史料】

- ①『日本書紀』巻9・神功皇后摂政「五十二年(372年)秋九月丁卯朔丙子、久氏等從千熊長彦詣之。則献七枝刀一口・七子鏡一面及種種重宝。仍啓曰、臣国以西有水。源出自谷那鉄山。其邈七日行之不及。当飲是水、便取是山鉄、以永奉聖朝。乃謂孫枕流王曰、今我所通海東貴国是天所啓。是以垂天恩、割海西而賜我。由是国基永固。汝当善脩和好、聚斂土物、奉貢不絶、雖死何恨。自是後每年相統朝貢焉。五十五年(375年)、百済肖古王薨。五十六年、百済王子貴須立為王」
- ②『古事記』中巻・応神天皇記「亦百済国主照古王、以牡馬壹疋、牝馬壹疋、付阿知吉師以貢上〔此阿知吉師者、阿直史等之祖〕。亦貢上横刀及大鏡。又科賜百済国、若有賢人者貢上。故、受命以貢上人、名和邇吉師。即論語十卷、千字文1卷、并十一卷、付是人即貢進。〔此和爾吉師者文首等祖〕」
- ③『三国史記』巻24・百済本紀第2「近肖古王、比流王第二子也。體貌奇偉、有遠識。契王薨、繼位」
 - ・ 同 二十三年(368年)「春三月丁巳朔。日有食之。遣使新羅、送良馬二匹。二十四年〔369年〕秋九月。高句麗王斯由帥歩騎二萬、来屯雉壤。分兵侵奪民戸。王遣太子以兵徑至雉壤、急擊破之。獲五千餘級。其虜獲分賜將士。冬十一月。大闕於漢水南。旗幟皆用黄」
 - ・ 同 二十六年(371年)「高句麗擧兵来。王聞之。伏兵於淇河上。俟其至急擊之。高句麗兵敗北。

冬。王與太子帥精兵三萬。侵高句麗、攻平壤城。麗王斯由力戰拒之。中流矢死。王引軍退。移都漢山」

- ・ 同 二十七年(372年)「春正月。遣使入晋朝貢」
 - ・ 同 二十八年(373年)「春二月。遣使入晋朝貢」
 - ・ 同 三十年(375年)「秋七月、高句麗來攻北鄙水谷城陷之。王遣將拒之。不克。王又將大舉兵報之。以年荒不果。冬十一月。王薨。古記云。百濟開國已來、未有以文字記事、至是得博士高興、始有書記。然高興未嘗顯於他書。不知其何許人也」
 - ・ 同 「近仇首王〔一云、諱須〕。近肖古王之子。先是高句麗國岡王(故國原王〔一云、國岡上王……濱田〕)斯由親來侵、近肖古王遣太子拒之。至半乞壤將戰。高句麗人斯紀本百濟人。誤傷國馬蹄。懼罪奔於彼。至是還來。告太子曰。彼師雖多。皆備數疑兵而已。其驍勇唯赤旗。若先破之。其餘不攻自潰。太子從之。進擊大敗之。追奔逐北。至於水谷城之西北。將軍莫古解諫曰。嘗聞道家之言。知足不辱。知止不殆。今所得多矣。何必求多。太子善之止焉。乃積石為表。登其上。顧左右曰。今日之後。疇克再至於此乎。其地有巖石罅若馬蹄者。他人至今呼為太子馬迹。近肖古在位三十年薨。即位」
 - ・ 同 三年(377)「冬十月。王將兵三萬侵高句麗平壤城。十一月。高句麗來侵」
 - ・ 同 五年(379)「春三月、遣使朝晋。其使海上遇惡風。不達而還」
 - ・ 同 十年(383)「夏四月。王薨」
 - ・ 同 枕流王「近仇首王之元子。母曰阿尔夫人。繼父即位。秋七月。遣使入晋朝貢。九月。胡僧摩羅難陀自晋至。王迎之致宮內禮敬焉。佛法始於此」
 - ・ 同 二年(385)「春二月。創佛寺於漢山。度僧十人。」
- ④『晋書』卷9・簡文帝「咸安二年(372)春正月辛丑。百濟林邑王、各遣使貢方物。六月、遣使拜百濟王餘旬為鎮東將軍領樂浪太守」

＜参考文献＞

- 井上直樹2000「高句麗の対北魏外交と朝鮮半島情勢」『朝鮮史研究会論文集』No.38
- 榎本杜人1950「石上神宮七支刀の銘文」『日本考古学協会第六回總會研究発表要旨』
- 榎本杜人1952「石上神宮の七支刀とその銘文」『朝鮮學報』第3輯
- 榎本杜人1953「七支刀の年代について」『日本考古学協会第11回總會研究発表要旨』、
- 榎本杜人1954「石上神宮の七支刀」『ミュージアム』35
- 榎本杜人1955「古代における金石文、七支刀」『日本考古学講座』5、河出書房
- 榎本杜人1960「七支刀」『アジア歴史事典』4、平凡社
- 榎本杜人1968「七支刀銘文再考—青丘考古記3—」『朝鮮學報』第49輯。のち上田正昭編1971『論集・日本文化の起源』第2巻「日本史」平凡社に収録
- 川口勝康1993「刀劍の賜与とその銘文」岩波講座『日本通史』第2巻、古代1
- 菅政友1907「石上神宮ノ宝庫所藏六叉刀銘」『菅政友全集』雜稿三所収、国書刊行会。成稿は1885年

ごろ

- 菅政友「大和国石上神宮宝庫所蔵七支刀」『同上書』雑稿一所収
- 菅政友「任那考」『菅政友全集』所収。1893年稿
- 木村誠2000「百済史料としての七支刀銘文」『人文学報』第306号、東京都立大文学部
- 金錫亨1963「三韓三国の日本列島内の分国について」『歴史科学』1。邦訳は、鄭晋和訳が『歴史評論』165・168・169(1964年5月・8月・9月)と村山 正雄・都竜雨訳(1964年11月、朝鮮史研究会)。及び井上秀雄・旗田巍編『古代日本と朝鮮の基本問題』(1974年11月、学生社)がある
- 金錫亨1969『古代朝日関係史一大和政権と任那』朝鮮史研究会訳、勁草書房
- 佐伯有清1976「七支刀の銘文を読む—「宣供侯王」の新解釈—」『別冊週刊読売』
- 佐伯有清1976「七支刀銘文の問題点」『北海道新聞』1976年1月13日付け。後に同『日本古代史の風貌』(1977年9月、吉川弘文館)収録
- 佐伯有清1976「“供供”の謎を解く—七支刀銘文の新解釈—」『歴史書通信』12。後に同『日本古代史の風貌』収録
- 佐伯有清1976「ひきがえると七支刀(1)」、「ひきがえると七支刀(2)」『歴史地理教育』248・249号。後に同『日本古代史の風貌』収録
- 佐伯有清1976「七支刀銘文その後」『北海道新聞』4月15日付
- 佐伯有清1977『古代史演習 七支刀と広開土王碑』吉川弘文館
- 佐伯有清1988『三国史記倭人伝』岩波文庫
- 神保公子1973「七支刀研究の歩み」『日本歴史』第301号
- 神保公子1975「七支刀の解釈をめぐる」『史学雑誌』第84編第11号
- 末松保和1949『任那興亡史』吉川弘文館。1956年9月に吉川弘文館再版。1986年7月に『古代の日本と朝鮮』(末松保和朝鮮史著作集、吉川弘文館)に所収
- 鈴木靖民1980『増補古代国家史研究の歩み』3.ヤマト政権の生成—七支刀の意味—新人物往来社
- 鈴木靖民1982「四世紀後半の百済と日本の関係—七支刀銘を中心として」『歴史公論』第8巻第4号・通巻77号
- 鈴木靖民1983「石上神宮七支刀銘についての一試論」坂本太郎博士頌寿記念『日本史学論集』上巻、吉川弘文館
- 鈴木靖民1999「同時代史料で読む激動の東アジア—七支刀と広開土王碑—」『This is 読売』'99年2月号
- 鈴木靖民2002「倭国と東アジア」鈴木靖民編・日本の時代史2『倭国と東アジア』吉川弘文館
- 田中俊明2002『大加耶連盟の興亡と「任那」—加耶琴だけが残った—』吉川弘文館
- 濱田耕策2005「百済紀年考」『史淵』142輯、九州大学大学院人文科学研究院
- 濱田耕策2005「4世紀の日韓関係」『日韓歴史共同研究報告書(第1分科篇)』日韓歴史共同研究委員会
- 福永光司1985「石上神宮の七支刀」『京都新聞』昭和60年2月7・8日付。後に同『道教と古代日本』1987、人文書院収録

- 福山敏男1951「石上神宮の七支刀」『美術研究』第158号
- 福山敏男1951『石上神宮の七支刀』補考『美術研究』第162号
- 福山敏男1952『石上神宮の七支刀』再補『美術研究』第165号
- (以上の3編は、一部修訂されて「石上神宮の七支刀銘文」と題して『日本建築史研究』(1968年6月、墨水書房)、また上田正昭編『論集・日本文化の起源』第2巻「日本史」(1971年5月、平凡社)に収録)
- 藤井稔1995「影印『外来金器文字記』資料並びに解題」『朝鮮学報』第155輯
- 藤井稔1995「菅政友による七支刀銘文の釈読について—「大和国石上神宮宝庫所蔵六叉刀」と『外来金器文字記』の紹介を兼ねて—」『古墳文化とその伝統』西谷真治先生古稀記念論文集、勉誠社
- 宮崎市定1983『謎の七支刀—五世紀の東アジアと日本—』中公新書。後に中公文庫<1992年1月>に所収、また『宮崎市定全集』21<1993年2月、岩波書店>にも収録
- 宮崎市定1984「七支刀銘文試釈」『東方学』第64輯。後に同『古代大和朝廷』<1988年9月、筑摩書房>および『宮崎市定全集』21<1993年2月、岩波書店>収録
- 村山正雄1979「七支刀」銘字一考—榎本論文批判を中心として—旗田巍先生古稀記念会編『朝鮮歴史論集』上巻、龍溪書舎。後に同『石上神宮七支刀銘文図録』<1996年12月、吉川弘文館>に収録
- 村山正雄1979『七支刀』銘字調査の一端『三上次男博士頌寿記念東洋史・考古学論集』、青山学院大学史学研究室。後に同朋社より再刊。また同『石上神宮七支刀銘文図録』<1996年12月、吉川弘文館>に収録。
- 村山正雄1982「七支刀銘文の<侯王>について」『朝鮮学報』第104輯。後に同『石上神宮七支刀銘文図録』<1996年12月、吉川弘文館>に収録
- 村山正雄1985「七支刀」に関する宮崎市定論文について『三上次男博士喜寿記念論文集 歴史編』、平凡社。後に同『石上神宮七支刀銘文図録』<1996年12月、吉川弘文館>に収録
- 村山正雄1990「石上神宮・七支刀銘文発見の経緯と若干の新知見」『朝鮮学報』135。後に同『石上神宮七支刀銘文図録』<平成8年12月、吉川弘文館>に収録
- 村山正雄1996『石上神宮七支刀銘文図録』吉川弘文館
- ◆ 図版編 ◆ 釈文編
 - ・ 七支刀銘釈文比較表について
 - ・ 七支刀銘釈文比較表
 - ◆ 論文編
 - ・ 七支刀銘字一考
 - ・ 七支刀銘字調査の一端
 - ・ 七支刀銘文の<侯王>について
 - ・ 「七支刀」に関する宮崎市定論文について
 - ・ 七支刀銘文発見の経緯と若干の新知見
 - ・ (補論1)「坂元義種論文」百濟侯王制の存在についての再批判
 - ・ (補論2)「宮崎市定論文」とくに銘文裏面部の読み方について

・(補論3)「山尾幸久論文」その道教説の根拠について

[追録]「外来金器文字記」その他新資料の発見

[図版]「外来金器文字記」「石見見聞志」(抄)菅家所蔵

山尾幸久1981「七支刀の銘について」『村上四男博士和歌山大学退官記念朝鮮史論文集』、開明書院

山尾幸久1983『日本古代王権形成史論』Ⅲ編東アジア史、5章倭王権と東アジア、2節石上神宮蔵七支刀の銘文」岩波書店

山尾幸久1986『日本古代の国家形成』大和書房

山尾幸久1989『古代の日朝関係』前篇3章1節「石上神宮七支刀銘の百済王と倭王」塙書房

吉田晶2001『七支刀の謎を解く—四世紀後半の百済と倭』新日本出版社

延敏洙1994「七支刀銘文の再検討—一年号の問題と製作年代を中心に—」『年報 朝鮮学』4、九州大学朝鮮学研究会

李丙壽1980『韓国古代史研究—古代史上の諸問題—』「百済七支刀考」学生社。原載は『韓国古代史研究』<1976年3月、ソウル・博英社>

第3節 広開土王碑文の日韓関係—高句麗・新羅の国家形成と倭国—

楽浪郡が400年余の間、さらにその南半を分割した帯方郡はおよそ100年の間、中国の専制王朝による中央集権の支配下に半島北部地域を置いていた。その支配は朝鮮北部に文明と政治統治の手法をもたらし、政治の覚醒をもたらしている。

中国王朝の混乱と高句麗族と韓族の政治と文化の覚醒はやがて高句麗が313年に楽浪郡を、そして翌314年に帯方郡の支配装置を半島地域から撤退させた。

そこで、4世紀初頭から半ばにかけての半島と列島の両地域との関係はいよいよ激しい併呑をめざす戦争の半世紀を迎えている。高句麗の南下の前に伯済国が馬韓54国のなかからその漢江下流域を中心として百済への国家統合の過程に、また、列島地域では邪馬台国を中心とした地域国家の連合から統一王権への過程にあった。

369年秋9月には広開土王の祖父である故国原王が歩騎2万の兵を率いて南下してきたから百済の近肖古王は太子に命じて兵を率いて迎撃させ、5千余の捕虜を獲得して、11月には漢江で黄色の軍旗を掲げる兵士を閲している。百済が高句麗戦において黄色の軍旗を掲げたことは、何を意味するのか注目される。

371年にも高句麗兵が百済地域に襲来するや、今回は百済の近肖古王は太子とともに精兵3万を率いて高句麗の平壤城を攻め、高句麗の故国原王は力戦のなかで流矢に中って戦死したところで、両軍は兵を引いている。

百済はこの勝利を得て都を漢山に移したことは、高句麗に対する防衛体制の強化とともに、百済の王権が旧馬韓54国の北部に向けた統治が進行し、また王権が強化することを意味する。

この過程のなかで、百済は372年正月に東晋に初めて朝貢し、同年6月には近肖古王(『晋書』巻9・簡文帝では百済王餘句)は「鎮東將軍領楽浪太守」に冊封された。この外交のなかで、百済王は七支刀を下賜されたであろう。

前述したように、百済王の近肖古王とその太子が築いた王権は372年に東晋に遣使して、東晋の皇帝権力の外交と軍事の権威を背景として七支刀を仿製して、これを同年9月頃には倭王に贈与して(『日本書紀』卷九、神功皇后摂政52年)、継続する高句麗からの危機のなかにある百済に倭の兵力が加担することを求めている。

ここで、倭王の軍が百済の対高句麗戦に参戦していたのではないか、との推測とこれを認める説もある。(末松1949、鈴木2002)その参戦が倭王の主導的な行動なのか、否や、倭王は鉄等の実用と威信の財貨を得る実利を求めて、百済王の要請に応じて百済の対高句麗戦に参戦したなどと言う説もある(白2004)。

この後にも高句麗と百済の交戦は継続する。『三国史記』の高句麗本紀と百済本紀によれば、375年秋7月、376年11月、377年10月、同11月、386年8月、389年9月、390年9月と交戦の記録は続く(後掲資料参照)。また、「百済本紀」にはこの間にも387年9月、391年4月に百済は高句麗の反百済姿勢と連携する靺鞨からの攻撃をうけた記録がある。

こうした百済と高句麗の継続する戦いに倭兵が主導的であれ、受動的であれ、百済の戦列に参戦していたとの記録は直接には『日本書紀』や『三国史記』には見られない。『日本書紀』卷9の神功皇后49年条の潤色された「新羅征討」物語(後掲の『日本書紀』参照)が想起されるが、直截の記録ではなく、物語の検討が求められる。

一方、「新羅本紀」では、これに先だつ奈勿尼師今の王代の364年4月に倭兵は大挙して新羅の王城近くに侵入したが、敗走したことが記録されている。翌々年の366年3月と368年春には百済は新羅と交聘して、百済が高句麗の攻撃に備える国際環境を整えており、倭兵が新羅を侵す記録はこの間では見られない。

このように見てくると、倭国が反新羅・親百済の立場にあったことが『三国史記』からも考察される。かの七支刀が百済と倭との軍事的相互関係を象徴することが納得される。

そこで、414年に建立された広開土王碑文が同時代史料として4世紀後半の高句麗、百済、新羅、任那加羅と倭国の関係を伝えており、注目される。ただ、同時代史料としての碑文は同時に建立の動機が明瞭であるが故に時代認識が碑文に直に反映していることに注意される。

この碑石は1880年に清朝政府が鴨緑江流域の住民を管理する県を設置する準備のために、現地調査に入った懐仁県知県の章樾の幕下にいた関月山によって発見された。翌1881年には「墨水廓填」の技法による拓本の製作が始まった。さらに1883年4月から8月の間に現地に兵要地誌の情報調査に入った日本陸軍参謀本部員の酒匂景信が「墨水廓填」の拓本を一揃い購入して、その年末には酒匂は帰国したから、1884年からは参謀本部での酒匂将来の拓本調査に係わった者によって碑文の研究は開始された。(武田1988、2007、2009)

1889年には横井忠直による「高句麗古碑考」などの碑文研究が亜細亜協会発行の『會餘録』第5集に特集されたから、「倭が辛卯年(391)に渡海して、百済、新羅を破って、臣民とした」との理解がこれ以後長く日本では称揚されることとなった。

しかし、1960年代後半から朝鮮民主主義人民共和国の朴時亨氏(1967、1985)と金錫亨氏(1969)の碑文研究が日本に翻訳紹介されると、碑文の解釈を中心に研究の再検討が盛んとなった。

さらに、李進熙氏が1972年以来、酒匂が日本に将来した拓本は酒匂が碑石に石灰を塗って文字を改竄した部分が「辛卯年」条をはじめ所々に見られるとの根本的な批判を勢力的に発表された。史学史に潜む史料の安易な利用を戒め、かつそれまでの日本における古代の日朝関係史研究に見え隠れする帝国主義的な姿勢に反省を喚起する李氏の論調はかなりの反響を生んだ(佐伯1974)。

また、日本陸軍参謀本部による酒匂ほかの兵要地誌資料の調査が進み、碑石の立つ集安における酒匂の行動も具体的になるものと期待されている。(山近・渡辺、2008)

しかし、王健群氏が碑石の立つ現地に聞き取り調査を進めて、碑石の隣りに長らく居住して拓本の販売を生活の糧にもしていた拓工の親族から、碑面の石灰は採拓の効率をあげ、かつ碑字を鮮明にするためであったことを明らかにしていた。(王、1984)さらに、武田幸男氏は酒匂将来の墨水廓墳の拓本より初期に採拓された、即ち碑面をそのままに映し出した原石の拓本について、水谷悌二郎氏(1959)が早く進めていた調査を積極的に継承し、原石拓本を国内と韓国、台湾に計6本を確認され、そのうちの4本を写真で紹介され、また、拓工が石灰を塗布した後の多数の石灰拓本を形式分類し、かつこれを紹介した(武田2009)。さらに、韓国では林基中氏(1995)が北京所在の4本の原石の拓本を、さらに北京在住の徐建新氏(2006)は北京所在の7本の原石の拓本と1本の墨水廓墳の拓本を確認して、その調査の結果を学界に提供された。

こうして、今日では碑石への改竄のことは認められず、拓工による採拓の功利のための石灰の塗布が確認され、原石の拓本に基づく碑文研究こそが進められる段階に至ったのである。

さて、碑文は412年に薨去した広開土王が対百濟戦における戦果、そして、新羅を攻める倭を敗退させた戦果、新羅が高句麗へ向けた従属の深化など、同王の諸戦果を輝かしく顕彰する目的のもとで、これらを巧みな構文と文脈をもって銘記しているのである。その構文の巧みに配慮しつつ、高句麗、百濟、倭、新羅、加耶の関係記述を読めば次の通りである。

◎百殘新羅舊是屬民由来朝貢而倭以辛卯年来渡海破百殘□□新羅以為臣民以六年丙申王躬率□軍討伐殘國軍□□南攻取壹八城曰模盧城各模盧城幹氏利城□□城關弥城牟盧城弥沙城□舍蔦城阿旦城古利城□利城雜珍城奧利城句牟城古須耶羅城莫□□□□城□而耶羅城瑑城於利城農賣城豆奴城沸□□利城弥鄒城也利城太山韓城掃加城敦拔□□□□城婁賣城散□城那旦城細城牟婁城亏婁城蘇灰城燕婁城析支利城巖門□城□城□□□□□城利城就鄒城□拔城古牟婁城閨奴城貫奴城多穰城□□城儒□盧城仇天城□□□□城□其國城□不服敢出百戰王威赫怒渡阿利水□□迫城□□侵穴□便圍城而殘主困逼獻□男女生白一千人細布千匹跪王自誓從今以後永為奴客太王恩赦□迷之御愆錄其後順之誠於是□五十八城村七百將殘王弟并大臣十人旋師還都

永樂「六年」(396年)。「百殘と新羅は舊(もと)」より高句麗の「属民」であり、そこで高句麗に「朝貢」して来ていた。ところが、「倭」が「辛卯年(391年)より以来、渡海し、百殘を破り、(東)へ・武田2007、2009)新羅を□して臣民とした」から、大「王」は「軍を躬率」して「殘国」(百濟)を「討伐」した。大王「軍」は「南」へ「攻」め「取」った城は多数であった。しかし、「其の国城(百濟)は義に服さず、敢えて出でて百戰」し

てきた。そこで、大「王」は「威」をもって「赫怒」し「阿利水」を「渡」り、その国「城」を「圉」むと、「残主」（百濟王）は「困逼し、男女の生口一千人と細布千匹」を「献」じて、大「王」の前に「脆」き、「以後」「永」く（大王の）「**奴客**」となることを「自ら誓」った。「**太王**」は百殘王（百濟王）の「**口迷の愆**（あやまち・高句麗の属民であったにもかかわらず、倭に破られて倭王の「臣民」となったこと）」を「**恩**」をもって「**赦**」し、「後順の誠（「以後、永く大王の奴客となるとの誓い）」を記「**録**」した。そこで、大王の軍は百濟の「**五十八城**」と「**村七百**」を□し、殘主（百濟王）の弟と「**大臣十人**」を「**將**」^{ひき}いて「**師**」を「**旋**」して「**都**」に「**還**」った。

◎八年戊戌教遣偏師觀帛慎土谷因便抄得莫□羅城加太羅谷男女三百餘人自此以来朝貢論事
永樂「八年」（398年）。

永樂「八年」（398年）大王は「偏師」を肅慎土谷に「**教遣**」し、「莫□羅城と加太羅谷の男女三百余人」を「抄得」した。「此より以来、（肅慎土谷は）朝貢し、事を論」ずることとなった。

◎九年己亥百殘違誓与倭和通王巡下平穰而新羅遣使白王云倭人滿其國境潰破城池以奴客為
民歸王請命太王恩慈稱其忠誠□遣使還告以□計。

永樂「九年」（399年）。「百殘」が奴客になるとの「誓」を「違」えて、「倭」と「和通」したから、大「王」は「**平穰**」に「**巡下**」した。すると、「新羅」は「使」を「遣」わして大「王」に「白」して「云」うには、「倭人は其の国境に満ち、城池を潰破しています。（太王の）奴客とは（その身分は）民ですから、王に帰して命を請います」と。そこで、「太王」は「**恩慈**」をもって（新羅王が太王の奴客となるとて帰服してきた）その「忠誠」を「称（たた）」え、新羅の「使」者を新羅に「還」らせ「□計」を新羅王に「告」げさせた。

◎十年庚子教遣歩騎五萬往救新羅從男居城至新羅城倭滿其中官軍方至倭賊退□□□□侵背
急追至任那加羅從拔城城即歸服安羅人戍兵□□□□□城倭□倭潰城大□□□□盡□□□
安羅人戍兵滿□□□□□□□□□□□□□□倭□□□□□□□□□興□□□□
□□□□□□辭□□□□□□□□□□□□潰□□□□安羅人戍兵昔新羅寐錦未有身來
論事□**國** **上** **廣**開土境好太**王**□□□□□□□□僕勾□□□□朝貢。

永樂「十年」（400年）。大王は「歩騎五萬」を「**教遣**」し、「往」きて「新羅」を「救」った。軍は「男居城」より「新羅城」に「至」ったところ、「倭」は「其中」に「満」ちていたが、「官軍」が「方（まさ）」に新羅城に「至」らんとすると「倭賊は退」いた。「官軍」は「急追」して「任那加羅の從拔城に至るや、城は即ちに帰服」した。「安羅人戍兵は……倭は……」「昔、新羅の（王である）寐錦は未だ身づから来たりて事を論」じたことはなかったが、「（**国岡上廣**）開土境好太**王**」の新羅救援戦の成果があがって、新羅の王子の「僕勾」が、……「**朝貢**」してきた。

◎十四年甲辰而倭不軌侵入帶方界□□□□□石城□連船□□□**王** **躬**率□□從平穰□□□ 鋒

相遇王幢要截盪刺倭寇潰敗斬殺無數

永樂「十四年」(404年)。「倭」が「不軌」にも「**帯方界**」に「侵入」し、「連船」したから、大王は「躬率」して「**平穰**」より「□□」して、これと戦った。「倭寇」は「潰敗」し、大王軍が「斬殺するもの無数」であった。

◎十七年丁未教遣歩騎五萬□□□□□□□□師□□合戦斬殺蕩盡所獲鎧鉀一萬餘領軍資器械不可稱數還破沙溝城婁城□住城□□□□□那□城

永樂「十七年」(407年)。大王は「歩騎五萬」を「**教遣**」し、……「合戦」し、敵を「斬殺」し、これを「盪盡」させた。「獲」た「所」の「鎧鉀は一萬餘領」であり、「軍資器械」は「数」を「称(はか)」ることができないほどであった。軍は「還」りに、「沙溝城」等の六城を破った。

碑文は高句麗中心の史観に立脚して、広開土王代の戦果を大王の勲績として記録し、そこで築かれた高句麗中心の国際秩序を後世に国家の典例として伝えることに第一の目的がある。

碑文は辛卯年条の中に、大王即位以前の高句麗、新羅、百濟、倭の関係を高句麗中心に提示する。即ち、「百済と新羅は舊(もと)」より高句麗の「**属民**」であり、高句麗に「**朝貢**」して来ていたのだが、「倭」が「辛卯年(391年)より以来、渡海し、百済を破り、新羅を□して臣民とした」ことから舊(もと)の百済と新羅からの朝貢は途絶したと言う。この辛卯年条は、この4者の関係のその後の展開を碑文に銘記するに先立つ「大前置文」として構文されている。(濱田1973、1974。武田1978、1989)

新羅はともかくとして、百済が大王の即位以前に高句麗の「属民」として「朝貢」していたとは、記録に確認できない。前述したように、『三国史記』には両者は交戦を続けており、大王の祖王であった故国原王は百済との戦中、371に戦死さえしていたのである。

この関係にもかかわらず、百済は高句麗の「属民」であり、高句麗に「朝貢」して来たとするのは、高句麗中心史観が極まった表現である。これに新羅を加えて「属民」が高句麗に「朝貢」していた関係が大王の即位前に倭によって破壊されたとの一文を大王の勲績を銘記する紀年記事の筆頭に提示する。

この倭によって断絶された「属民」たる百済と新羅の2国が高句麗に「朝貢」する関係を回復し、さらには怨讎たる倭を撃退することこそが即位間もない新王の大王が在位年間に獲得すべき課題とされるのである。

大王はこの課題を半ば達成している。「舊(もと)より(高句麗の)属民」であると高句麗が認識した「新羅」を永樂十年(400年)に大王が「歩騎五萬」を「**教遣**」して、「倭賊」から「救」ったが、これにより、「昔、新羅(王)の寐錦(王)は未だ身(み)づから(高句麗に)来たりて事を論じたことはなかつたが、「(国岡上廣)開土境好太王」が新羅を救った戦いの成果があがって、新羅王子の「僕勾」が、……「朝貢」してきたのである。ここに「属民」たる新羅の「朝貢」は回復されたとと言える。

一方、百済については、大「王」は「軍を**躬率**」して「残国」(百済)を「討伐」した。その戦況は、前掲の永樂6年条に動的に表現されている。大王「軍」は「南」のかたより「攻」め、奪「取」した城は多数であったが、「其の国城(百済)」は抵抗してきた。そこで、大「王」は「威」をもって「赫怒」し、「阿利水」(漢江)を

「渡」って、百済の王城を「囲」むと、百済王は「困逼し、男女の生口一千人と細布千匹」を「献」じて、大「王」の前に「脆」いて、「以後」永く(大王の)「**奴客**」となることを「自ら誓」ったのである。そこで、「**太王**」は百済王(百済王)を「**恩**」をもって「**赦**」し、百済の「五十八城」と「村七百」を獲得して、「**残主**(百済王)の弟」と「**大臣十人**」を「**将**」いて「**都**」に凱旋したのである。

ここで、高句麗が獲得した百済の「五十八城」と「村七百」の地は平壤以南から漢江以北辺りの地域であり、この後の永楽「十四年」(404年)に「**倭**」が「**不軌**」にも「**侵入**」した「**帯方界**」の地方であろうが、百済王はこの永楽6年の敗戦では「**奴客**」へと従属を強化されている。

ところが、3年後の永楽9年(399年)には、「**百残**」は大王の奴客となる「**誓**」を「**違**」えて、「**倭**」と「**和通**」した。そこで、「**大王**」は百済を懲らしめるべく「**平穰**」に「**巡下**」したのである。

倭は高句麗の「**奴客**」となった百済を高句麗から離脱させたのみならず、新羅に攻撃を加えている。そこで、新羅は「**平穰**」に「**巡下**」した大王の下に使者を「**遣**」わし、「**倭人**」が新羅の「**国境**」に満ち、城池を潰破している新羅の窮状を報告させて、「(新羅王は大)王に帰して、命を請」うことを大王に申し上げた。

ここに至って、高句麗を中心とする百済、新羅との関係秩序を破壊する者こそ倭であることから、大王は倭に向けて撃退戦を展開することになる。

「**太王**」はまず、「**恩慈**」をもって(新羅王が太王の奴客となると言って帰服してきた)「**忠誠**」を「**称**(たた)え、新羅の「**使**」者に新羅の救援策を新羅王に「**告**」げさせたが、その策とは翌年の新羅救援戦で実現される。

永楽10年(400年)には、大王は「**歩騎五萬**」を「**教遣**」し、「**新羅**」を「**救**」う作戦を展開した。その戦況は、高句麗軍は「**男居城**」より「**新羅城**(新羅の王城である金城)」に「**至**」ったところ、「**倭**」は先の「**国境**」からさらに進入して「**其中**」(新羅の金城)に「**満**」ちていた。しかし、「**官軍**(高句麗軍)」が「**方**(まさ)」に新羅の金城に「**至**」らんとすると「**倭賊**は退いたから、官軍は「**急追**」して「**任那加羅**」の**従拔城**に至るや、その城は即ちに帰服」して来た。

大王が「**倭賊**」を半島の最南部に追いつめて、新羅を救援すると、「**新羅**」の**寐錦**(新羅王)は「**未だ身**(み)づから(高句麗に)来たりて事を論」じたことはなかったが、新羅の王子の「**僕勾**」が、高句麗に「**朝貢**」してきた。

高句麗は「**倭賊**」を半島最南部に後退させたにも拘わらず、その4年後の永楽14年(404年)に、倭は再び高句麗の支配圏を侵している。それは倭が半島の最南部に敗退したにもかかわらず、大王が永楽6年に百済に親征して獲得したその北部の「**帯方界**」にまで海路に北上すると言う、高句麗から見れば倭の「**不軌**」の侵入行為である。

そこで、大王は「**躬率**」して「**平穰**」より出て、これと戦ったから、「**倭寇**」は「**潰敗**」し、大王軍は「**斬殺**」するもの**無数**」の戦果を挙げた。そこで、「**潰敗**」させた「**倭寇**」が再々来しないよう、永楽17年(407年)に大王は「**歩騎五萬**」を「**教遣**」し、百済北部地域の掃討戦に出て、敵を「**斬殺**」し、これを「**蕩盡**」させ、敵から「**鎧紳**は一萬餘領」と無数の「**軍資器械**」を獲得した。さらに、(高句麗)軍は、凱旋の途上では「**沙溝城**」等の6城まで破っている。

ところで、この永楽17年(407)の大王の百済派兵のことは『三国史記』の本紀に対応する記事がない

こともあつてか、後燕に向けて派兵したものとする理解がある(千、1973)。しかし、広開土王代の後燕との関係は『梁書』巻54・諸夷・高句麗には、395年に即位した後燕王の實から広開土王は「平州牧遼東帶方二国王」と冊封されたことが記録されている。また、『晋書』巻124・載記・慕容盛には399年頃に広開土王が後燕に遣使し方物を買いたが、『資治通鑑』巻111・晋紀には400年には広開土王が後燕に対して礼が「慢(おろそか)」であったために後燕王の慕容盛の率いた3万の兵の攻撃を高句麗は受けたから、402年、404年に後燕に反撃し、405年、406年には後燕から攻撃を受けると言う攻防を繰り返している。

こうした攻防戦の後の408年に、広開土王は後燕に遣使したところ、後燕では慕容熙の位を継いだ慕容雲はその祖父が高句麗の支庶である血筋から、広開土王を後燕王室の宗族に叙す関係を得ており、こうした高句麗が後燕との関係では劣位にあり、この関係は広開土王が築く高句麗中心の秩序を銘記する碑文には不適であり、銘記し難いのである。

広開土王が半島南部地域に向けた戦勝の勲績を銘記するこの碑文では、「辛卯年」条において、新羅は高句麗の「属民であり、朝貢してきていた」と前置きしていたが、その新羅からは、王子の「僕勾」が「朝貢」して来る関係を得ている。

一方、同じく高句麗の「属民であり、朝貢してきていた」と前置きしていた百済は一旦は高句麗の「奴客」となりながらも、倭と「和通」し、高句麗の支配圏から離脱したから、これに高句麗は攻撃を加え、その北部の城村を多数に獲得したのだが、高句麗は百済を高句麗支配圏に収めきることは出来ていないのである。

さらに、高句麗から見れば百済と新羅が高句麗に朝貢する国際関係を破壊させた怨讐たる「倭賊」を永樂10年と14年に敗退させ、或いは「潰敗」させたが、「倭賊」を半島南部の「任那加羅」地域に押し下げても、半島地域からは完全にこれを排除させることは出来なかったことが碑文から読み取れる。

そこで、倭は広開土王代に半島地域でどのように行動したのであろうか。「辛卯年」(391年)に倭が「渡海」して「百済新羅」を「破」り、これを「臣民」としたとはこの碑文に構成された「大前置き文」の文意であったが、そのことが史実を直に記録したものか、即ち、391年に倭が「百済新羅」を「臣民」とするまで侵入し、これを征服したものか。

倭は百済とは369年以来の高句麗戦線で共同戦線に立ったことの蓋然性の極めて高いことは七支刀をめぐる外交から首肯されたが、「辛卯年」に倭が「百済新羅」を討ってこれを「臣民」にしたとは、高句麗が倭を怨讐視したことから生まれる過度の表現である。

翻って考えれば、この「大前置文」は高句麗中心に半島地域の国際秩序を回復するという高句麗の正義を提示する文であることから、「辛卯年」の記事は文面のままには理解されてはならないであろう。

ただ、後述するように、『三国史記』の新羅本紀によれば、広開土王代の393年5月、405年4月、407年3月に倭は新羅に侵入している。やはり、広開土王代にも倭が半島東南部地域に侵入したことは否定されない。

この間にも、新羅は402年3月には、実聖王が前王の奈勿王の子の未斯欣を倭に質として送っており、その帰国は広開土王が薨去した後の418年のことである(『三国遺事』紀異第一・奈勿王金堤上)ことから、倭の侵入に苦慮する新羅の動向は理解される。こうした新羅が倭に苦慮する事態は高句麗の「正

義」を提示する「大前置文」では「新羅は倭に敗れて、その臣民になった」と過度に表現されたとも考えられよう。

さて、1970年代では「辛卯年」条に注がれた解釈論では、「渡海」「破」の主語を高句麗としてこれを読み、また、この条のなかの2文字格の空白にも文字を推量して読んで、高句麗に有利な百濟、新羅、倭との関係を読む説が盛んに提出されてもいた。それまで「渡海」「破」の主語を倭と理解して疑問視されなかったのだが、倭に優位な動向をこの条の文脈のなかに解釈してきた通説への批判が盛んであった研究史がある。(佐伯1974)

しかし、「辛卯年」条が「永樂六年」の対百濟親征の前置文であって、さらにはその後の高句麗が百濟と倭賊に征討を加え、また新羅を救援する大戦に至る大王の「躬率」(親征)と「教遣」(派兵)の戦争に高句麗の立場から正当性を掲げた「大前置文」であることが理解されると、この「辛卯年」条は高句麗に不利な状況が大王の親征と派兵とによって解消し、高句麗の戦果と大王の功績がより高く賞賛される構文であることが理解された。

ところが、この「大前置文」の位置と文脈の意味を理解しながらも、「大前置文」や碑文中の倭の動向を別の視角から過小に見る説が1990年代以降では提示されている。例えば、倭は広開土王の勲績を飾るトリックスターであるとの説も碑文の文脈と構文の巧みさを評価する余りに唱えられたひとつの「倭の過小評価」説である側面がないわけでもない。(李成市1994)

また、「倭」「倭賊」「倭寇」とは百濟が招いた「軍事力」と解釈する説も近年提出されている。(金泰植、2005) 高句麗と軍事的に対立を続ける百濟の戦列に倭人の兵が立っていることを認め、その倭兵は百濟や加耶が鉄を倭に供給する対価として倭に求めた軍事力の供給とみなす理解である。

この説は倭兵が能動的に半島地域に出兵したとする旧来の説に換わって、倭兵を受動的な参戦の兵力とみる説である。しかし、この説は倭兵が能動的に百濟に組みして対高句麗戦に参戦したとの説を十分には批判克服できてはいない。七支刀の銘や碑文、そして『三国史記』と『日本書紀』の伝えるところは、百濟の対高句麗、新羅戦線に参加する倭兵、倭人の能動的な行動である。その記憶は5世紀の所謂「倭の5王」が中国の南朝に將軍号を求めて主張した都督の範囲のなかに「百濟、新羅」ほかの半島南部地域を含めた倭の主観的な主張にまで残っている。(坂元1981)

3世紀から4世紀にかけて、倭国では邪馬台国から進んで王権の形成が進行する過程にあり、その4世紀の列島地域では大和地域を中心に北部九州から瀬戸内海地域にわたる地域国家の連合が進展しており、百濟、そして加耶地域の危機的動向はこの連合過程に無縁ではなく、むしろ連合を促進したものであると思われる。(白石2006)

そこで、4世紀後半の半島と列島の地域世界のなかで、倭が「渡海」して、高句麗と交戦する百濟の戦列に立った要因はどこにあったのであろうか。そして、この戦争は戦後である5世紀初には、高句麗、百濟、新羅、倭の4者の関係にいかに関与したのであろうか。

この問題を解くためには、『広開土王碑文』へ向けられた研究成果がまず重視されるが、また、『日本書紀』と『三国史記』の記録も検討されてよい。

【碑文記事に関連する他の史料】

高句麗が313年に楽浪郡を、翌314年には帯方郡と言う中国王朝がBC108年以来に半島の西北地域に設けた中央集権の支配機構に攻撃を加えて、これを半島の西北部地域から消滅させたことはやがて半島と列島地域の政治動向に大きな変化をもたらした。

2郡に交通していた馬韓54国の各国のなかから百済が国家として自律的に成長する過程を促進している。それ故に高句麗との緩衝地域でもあった2郡の消滅は郡県の土地と人材と資源を高句麗と百済が吸収する過程で衝突を招いていた。

広開土王代に高句麗が百済を攻撃する戦争の起因は、まず、広開土王の祖である故国原王が371年10月に平壤まで攻め上ってきた百済の近肖古王が率いた3万の百済軍を迎撃した戦いのなかで流矢に当たり、同月23日に薨去した敗戦に始まる。

その後の両国の交戦は前述した七支刀とその銘文をめぐる東晋と百済と倭、そして高句麗の関係史である。

高句麗と百済の交戦は、一進一退であった。この百済に倭王が連携したのは、2郡の設置以来の倭が郡と王朝に遣使した歴史が規定していよう。

384年7月には近仇首王は晋に通交し、386年には百済の世子の餘暉(辰斯王)が「使持節都督鎮東將軍百済王」に冊封され(『晋書』卷9・孝武帝・太元9、11年)、「百済王」として東晋から評価されており、百済は東晋との関係を進めたが、この百済外交の安定は倭王をより百済にひきつける。

一方、高句麗は対百済策を優勢のうちに進めようと、百済の東に位置する新羅を取り込み、377年春には新羅とともに前秦に通交し(『資治通鑑』卷104・晋紀26・烈宗・太元2年)、また382年には新羅がおそらく高句麗の引導を受けつつ前秦に通交するなど、高句麗は新羅を取り組みつつ華北の王朝に通交した(『太平御覽』卷781・四夷部2・東夷2・新羅・符堅建元18年)。

しかし、広開土王の父の故国壤王は385年に前秦に替わって勢力を築いた後燕の遼東郡と第3玄菟郡に攻め入ったが、敗退している(『梁書』卷54・高句麗伝・孝武太元10年)。

高句麗が南の百済と、また西には後燕の二方の関係に苦慮していた対外情勢のなかで、高句麗は東南方の新羅との関係を優勢に進めた。『三国史記』高句麗本紀によれば、故国壤王は同王9年(392)春に新羅に遣使してこれを威圧すると、新羅王は王の姪の実聖を質として高句麗に入れている。

高句麗は新羅との間で優位な関係を確固とするや、392年5月には薨去した故国壤王の王位を継いだ広開土王(碑文では王の即位は391年)はすぐさま同年7月から南方の百済に攻勢を仕掛けている。その後の王が発動した高句麗の対外戦争は碑文の文脈では前述のように銘記されたのである。

広開土王が百済の東隣りの新羅を従属させ、百済に仕掛けた攻撃の展開は「高句麗本紀」では次のように記録される。

「高句麗本紀」

- ・ 故国壤王3年(386)春正月。立王子談徳為太子。秋八月。王発兵南伐百済。
- ・ 6年(389)秋九月。百済来侵。掠南鄙部落而歸。
- ・ 7年(390)秋九月。百済遣達率真嘉謨攻破都押城。虜二百人以歸。

- ・ 9年(392)春。遣使新羅修好、**新羅王遣姪実聖為質**。
- ・ 広開土王即位年(392)7月。**南拔百濟**、拔十城。9月。北伐契丹。虜男女五百口。又招諭本国陷没民口一萬而歸。冬十月。攻陷百濟閔彌城。其城四面峭絶。海水環繞。王分軍七道。攻撃二十日乃拔。
- ・ 2年(393)。8月。**百濟侵南辺**。命将拒之。
- ・ 3年(394)。7月。**百濟来侵**。王率精騎五千逆擊敗之。餘寇夜走。8月。**築国南七城**。以備百濟之寇。
- ・ 4年(395)。8月。**王與百濟戰於峴水之上**。大敗之。虜獲八千餘級。
- ・ 18年(409)。7月。築国東秃山等六城。移平壤民戸。8月。王南巡。
- ・ 22年(413)。10月。王薨。号為廣開土王。

このなかで高句麗が優勢のうちに展開した対百濟戦は「百濟本紀」では以下のようにより詳しく記録されるが、倭兵の動向が高句麗と百濟の両本紀に見えないことが注意される。

「百濟本紀」

- ・ 辰斯王8年(392)7月。**高句麗王談德帥兵四萬**。来攻北鄙。陷石峴等十余城。王聞談德能用兵。不得出拒。**漢水北諸部落多没焉**。冬10月。**高句麗攻拔閔彌城**。王田於狗原。經旬不返。
- ・ 阿華王2年(393)。8月。王謂武曰。閔彌城者我北鄙之襟容也。今為高句麗所有。此寡人之所痛惜。而卿之所宜用心而雪恥也。**遂謀將兵一萬伐高句麗南鄙**。武身先士卒以冒矢石。意復石峴等五城。先困閔彌城。麗人嬰城固守。武以糧道不繼。引而歸。
- ・ 同3年(394)。7月。**與高句麗戰於水谷城下敗績**。
- ・ 同4年(395)。8月。王命左将真武等伐高句麗。麗王談德親帥兵七千。陣於浪水之上拒戰。我軍大敗。死者八千人。11月。王欲報浪水之役。親帥兵七千人過漢水。次於青木嶺下。会大雪。士卒多凍死。廻軍至漢山城。勞軍士。
- ・ 同6年(397)。5月。**王與倭国結好**。以太子腆支為質。7月。大關於漢水之南。
- ・ 同7年(398)。8月。**王將伐高句麗**。出帥至漢山北柵。其夜大星落營中有声。王深惡之。乃止。9月。集都人習射於西台。
- ・ 同8年(399)。8月。**王欲侵高句麗**。大徵兵馬。民苦於役。多奔新羅。戸口衰滅。
- ・ 同11年(402)。5月。遣使倭国求大珠。
- ・ 同12年(403)。2月。倭国使者至。王迎勞之特厚。7月。**遣兵侵新羅辺境**。
- ・ 腆支王即位(405)。在倭聞訃。哭泣請歸。**倭王以兵士百人衛送**。既至国界。漢城人階忠来告曰。大王棄世。王弟磔禮殺兄自立。願太子無輕入。**腆支留倭人自衛**。依海島以待之。国人殺磔禮。迎腆支即位。
- ・ 同2年(406)。2月。遣使晋朝貢。
- ・ 同5年(409)。倭国遣使送夜明珠。王優禮待之。

『三国史記』の両本紀から読みとれる広開土王代の高句麗と百濟の交戦は武田氏(1989)も指摘した

ように、広開土王碑文に見た両国の戦況と十分に対応する。即ち、大王が即位した392年7月には4万の兵を率いて百済を撃って、「石岬等の10余の城」と「漢水の北の諸部落」を獲得し、さらに395年8月に大王が兵7千の兵を率いて親征し、浪水において百済軍に大敗北を与え、395年同11月には百済の阿華王は同じく7千の兵を率いて高句麗へ報復する親征を行っている。

百済はこの対高句麗戦に不利な戦況のなかで、397年5月には倭国に太子の腆支を質として送り好みを結んだが、ここまでの高句麗と百済の交戦と百済が倭と好みを結んだ外交と、その後、398年と399年には百済が高句麗へ報復戦を図った経過は、碑文では永樂6年(396)に百済が広開土王の親征を被って「五十八城」と「村七百」を失ったばかりでなく、百済王(阿華王)が大王の前に跪拝の礼を踏んで大王の「奴客」となることを誓ったにも拘わらず、その後間もなく広開土王との「誓」を「違」えて「倭」に「和通」し、高句麗と緊張関係を継続した経過とが十分に対応するのである。

また、409年8月に広開土王が「南巡」した軍事も碑文に見た永樂「14(404)年」と「17(407)年」にわたる広開土王の百済との境界域における軍事に通じている。(武田1989)

この404年に「帯方界」に現れた「倭寇」の動向は「百済本紀」では、倭国に入質していた腆支が405年に帰国して即位した事情として、王は倭兵100人に護送されて漢城に帰る直前に海鳴で即位の時機を待ったとの記録と結びつきそうである。

この倭兵が朝鮮半島西海岸を漢城付近まで北上したことは、軍船と海路の確保が倭にあればこそ可能である碑文に記録された倭の「帯方界」への「不軌」の「侵入」である。この碑文と『三国史記』との対応関係は次の「新羅本紀」にも見ることができる。

「新羅本紀」

- ・奈勿麻立干37年(392)正月。高句麗遣使。王以高句麗強盛。送伊飡大西知子実聖為質。
- ・同 38年(393)5月。倭人来困金城。五日不解。将士皆請出戰。王曰。今賊棄舟深入。在於死地。鋒不可当。乃閉城門。賊無功而退。王先遣勇騎二百。遮其歸路。又遣步卒一千。追於濁山。夾擊大敗之。殺獲甚衆。
- ・同 46年(401)。7月。高句麗質子実聖還。
- ・実聖麻立干元年(402)3月。與倭国通好。以奈勿王子未斯欣為質。
- ・同 4年(405)4月。倭兵来攻明活城。不克而歸。王率騎兵。要之濁山之南。再戰破之。殺獲三百餘級。
- ・同 6年(407)。3月。倭人侵東辺。夏6月。又侵南辺。奪掠一百人。
- ・同 7年(408)。2月。王聞倭人於对馬島置營。貯以兵革資糧。以謀襲我。我欲先其未發。揀精兵擊破兵儲。
- ・同 11年(412)。以奈勿王子卜好。質於高句麗。
-
- ・同 14年(415)。8月。與倭人戰於風島克之。
- ・訥祗麻立干2年(418)。正月。王弟卜好自高句麗。與堤上奈麻還来。秋。王弟未斯欣自倭国逃還。
- ・同 8年(424)。2月。遣使高句麗修聘。

- ・同 15年(431)。4月。倭兵来侵東辺。囲明活城。無功而退。
- ・同 17年(433)。7月。百濟遣使請和。従之。

高句麗と新羅の関係では、「新羅本紀」と「高句麗本紀」では392年は『三国史記』では広開土王の即位前であるが、高句麗は新羅から王姪の実聖を質として迎えている。この高句麗が新羅に優位な位置にあることは、「辛卯年」条に銘記された「新羅は旧より(高句麗の)属民」という高句麗中心の史観を支えるひとつの歴史であろう。

さらに、新羅は倭と百濟の兵の襲来に対応して、412年には新羅が王子のト好を高句麗に入質させているが、これは碑文に「永樂10年」(400)の新羅救援戦の戦果として新羅は高句麗へ従属関係を進め、「僕勾」(ト好)が高句麗に「朝貢」したとあることに対応する。

碑文では永樂9年(399)条に百濟の「和通」を受けた倭が、「和通」を契機としてであろうが、新羅の「国境」に「満」ち「城池」を「潰破」していると言う倭兵の具体的な行動が、平壤に「巡下」した広開土王のもとに救援を求めて新羅から派遣された使者によって報告されている。

この経過は「新羅本紀」では、奈勿麻立干38年(393)に倭人が新羅の金城を包囲したが、新羅の騎兵の200と歩卒1千に挟撃されて敗走したこと、402年には新羅は王子を倭に入質させたにも拘わらず、倭は405年と407年に新羅の王都や東辺を攻めたことが記録されている。

こうした倭が新羅の「国境」や王城を襲う記事は碑文の永樂9年(399)条に銘記された新羅の使者が広開土王に報告した「倭人」の動向と新羅の危機、そして翌年の400年に広開土王が新羅を救援して「歩騎五萬」の軍を「教遣」すると、倭賊は「国境」から進行して「新羅城」の「其中」に「満」ちており、高句麗軍の前に「倭賊」が退いた戦況に十分に対応するのである。

ところで、碑文に記録された「新羅城」は「新羅の王城」でなく、「安羅の接境地域として新羅の辺境に位置した可能性が高く、『日本書紀』欽明紀の「久礼山五城」を指すものであり、これを梁山から密陽地域に比定する説がある(白承忠2004)。しかし、倭は「其国境」に「満」ちて、その地域の「城池」を「潰破」し、やがて「新羅城」の「其中」に「満」ちるまで進軍したのであり、広開土王が「教遣」した「官軍」たる高句麗軍が南下進軍した威勢の前に倭人は「退」ぞいた経過を碑文の永樂9年から10年の文脈に把握すれば、この説には従えない。

また、「百濟本紀」には阿華王が397年5月に倭と結好して、高句麗に報復戦を試み、402年5月と403年2月には倭と使者を交換するや、403年7月には百濟が新羅の辺境を襲ったことが記録されている。

こうした新羅を襲う百濟の行動は碑文には記録されていないが、この百濟の動向は新羅をしばしば襲った倭兵とは互いに連携した行動であったと見なければならない。その際には、「新羅本紀」では393年5月に倭兵に応戦した新羅の先遣の騎兵は200、そして追加派兵の歩卒が1000であり、405年4月に「殺獲」した「倭兵」は300余であったこと、また「百濟本紀」によれば、405年に倭が百濟の質であった王子の腆支を百濟に護送した際の倭兵が100人であった兵数が注目される。

一方、碑文では広開土王が「永樂10年」(400年)の新羅救援戦と「永樂17年」(407年)の百濟北部平定戦と思われる戦いにも「教遣」した兵力が「歩騎五萬」とある。この兵数は必ずしも高句麗兵の実数であったか。広開土王の対百濟戦の兵数は「高句麗本紀」では「五千」(394年)、「百濟本紀」では「四萬」

(392)、「七千」(395年)とあり、これに対し百済の阿華王が率いた兵の数は「一萬」(393年)、「七千」(395年)とある。

こうした兵数に比較すれば、『三国史記』に記録された新羅の王城を襲う倭兵の数は多くない。碑文に銘記された「歩騎五萬」の高句麗軍は、百済軍を中核として、これに倭兵が参加する軍に対応する兵力であったと見られ、また、「歩騎五萬」の規模は広開土王の軍事権の掌握能力を顕彰する定型の数字ともみられる。

さしもの広開土王代の高句麗は結局は百済を屈服させることは完遂できていない。また新羅の王城から倭兵を撤退させることは出来たが、それは一時のことであり、半島南部地域に対しても高句麗は圧倒的に優勢な情勢を継続することが出来ていない。それは、高句麗はその西北に隣接する後燕などの勢力にも対応せねばならず、半島地域の南北に全軍を「躬率」あるいは「教遣」することは出来なかったからであろう。

『三国史記』『高句麗本紀』には以下のように盛んに西北に隣する後燕との関係を記録している。

「高句麗本紀」の西北方関係記事

- ・故国壤王2年(385)夏六月。王出兵四萬襲遼東。先是燕王垂命帶方王佐、鎮龍城。佐聞我軍襲遼東。遣司馬郝景將兵救之。我軍擊敗之。遂陷遼東玄菟。虜男女一萬口而環。冬十一月。燕慕容農將兵來侵。復遼東玄菟二郡。初幽冀流民多來投。農以范陽龐淵為遼東太守招撫。
- ・広開土王即位年(392)九月。北伐契丹。虜男女五百口。又招諭本國陷沒民口一萬而歸。
- ・同 9年(400)。春正月。王遣使入燕朝貢。二月。燕王盛以我王禮慢。自將兵三萬襲之。以驃騎大將軍慕容熙為前鋒。拔新城南蘇二城。拓地七百餘里。徙五千餘戶而還。
- ・同 11年(402)。王遣兵攻宿軍。燕平州刺史慕容歸棄城走。
- ・同 13年(404)。冬十一月。出師侵燕。
- ・同 14年(405)。春正月。燕王熙來攻遼東城。且陷。熙命將士毋得先登。俟剗平其城。朕與皇后乘輦而入。由是城中得嚴備。卒不克而還。
- ・同 15年(406)。冬十二月。燕王熙襲契丹至陁北。畏契丹之衆欲還。遂棄輜重。輕兵襲我。燕軍行三千餘里。士馬疲凍。死者屬路。攻我木底城。不克而還。
- ・同 17年(408)。春三月。遣使北燕。且叙宗族。北燕王雲遣侍御史李拔報之。雲祖父高和句麗之支屬。自云高陽氏之苗裔。故以高為氏焉。慕容寶之為太子。雲以武藝侍東宮。寶子之。賜姓慕容氏。
- ・同 18年(409)秋7月。築國東禿山等六城。移平壤民戶。8月。王南巡。
- ・同 22年(413)。10月。王薨。号為廣開土王。

また、『太平御覽』卷359・兵部・障泥によれば、この頃、大王は南燕にも遣使して千里馬や皮障泥等を献じている。

こうした「高句麗本紀」やその原典でもある『資治通鑑』等に記録されながら『碑文』には銘記されなかったのは、広開土王代の西北方面との戦いを含む関係は、「永樂20年」条に北扶餘へ大王が親征して

中断した朝貢関係を復活させた勲績には及ばぬほどに高句麗には劣勢であったからであろう。

即ち、大王の治世を継いだ子の長寿王が大王の殯が明けた414年に父王の顕彰碑を建てた政治課題は、高句麗国家の正統性が「天」に由来し、その基盤が始祖の「巡幸南下」以来、今日にも百済・倭との戦いでの勝利と新羅からの朝貢を継続させると言う「南」方策にあることを後世にも顕示することである。それ故に、『碑文』では「南」における戦果をよく銘記し、かつ西南方を正面として碑を屹立させており、高句麗優位の国際関係を構築できていない西北方面の戦況は銘記されなかったことは理解できる。(濱田2005)

広開土王の「南」に向けた勢力圏の拡張は、始祖の「巡幸南下」に接合する聖戦と理解され、百済と倭兵との戦いは当にその「南」方戦の要であった。その南方進出は長寿王が427年に平壤に遷都したことに一先ず結果として具現する。(濱田2006)

『三国史記』の本紀は年月に従った編年法であるが、碑文は広開土王による「躬率」(親征)と「教遣」(派兵)による戦績によって築かれた高句麗中心の国際関係の構成を限定された碑石の枠内で、かつ、大王への頌徳と戦果の顕彰という目的で効果的な叙述を意図して編年するから、そこには編年の技法が大いに加わっている。

大前置文を設定して対外戦争を「親征」し、或いは「派兵」する広開土王の正当性を中心に対外戦争の発生原因を提示し、その戦争の経過とそれ故に獲得された戦果、その後形成された高句麗中心の国際関係等の順に、おそらくは親征のあった各年を柱に編年する法が碑文では採用されたのであろう。

碑文と『三国史記』の各本紀が同一の歴史を対象としながらも、その事柄の編年が完全には一致しないのは両者のこの編年法の違いに根本原因があると考えられる。

【『日本書紀』の日韓関係】

『日本書紀』ではこの4世紀半ばから5世紀初までの日韓関係はどのように記録されているのであろうか。これを七支刀と広開土王碑や中国史料、さらに『三国史記』によって構成されたここまでの日韓関係史像と照合し、対応することが可能であろうか。

まず、『日本書紀』では百済との関係史が主軸となっている。これを『三国史記』百済本紀の記録と対象すると、『日本書紀』の百済関係記事は圧倒的に構成要素が豊かであって、それらは人物中心の「物語」的な叙述である。そのことは『日本書紀』の編纂過程である7世紀後半に生きる氏族がその「祖」が律令国家の形成過程に務めた業績や王権への寄与の関係を氏族の祖の活躍を物語化した伝承記録が編纂に活用されたことを暗示する。

即ち、対外関係の物語では「百済記」を参考しているように、百済関係記事では「百済記」を注記しない記事にあってもこれを編纂の参考としたことは十分に考えられる。

また、天皇を頂点とした律令国家のイデオロギーが『日本書紀』を編纂する史観の中心にあることも確かである。そうした政治的な立場と史観からの潤色が『日本書紀』の対外関係記事にしばしば見られるが、そのためにこれらを全く無価値として歴史考察の場において除外したり、或いは無視はしてはならない。

例えば、後掲した『日本書紀』の記録のなかで、397年の「王子直支」の日本への入質と405年の直支

の百済への帰国記事は『三国史記』百済本紀に見た腆支の入質と帰国とその後の即位記事に対応して矛盾しない。(三品1962、武田1989)

『日本書紀』と『三国史記』百済本紀の記事が矛盾しない点は405年の阿華王の薨去記事もそうであるが、このほかにも、392年の辰斯王の薨去と阿華王の即位、また375年の肖古王の薨去と翌376年の貴須王の即位は、『三国史記』百済本紀では375年11月に近肖古王が薨去し、近仇首王が即位したとの記録とでは称元法の差異による一年の差はあるが、対応するのである。

この百済本紀によれば、近肖古王30年(375)条には、「古記云、百済開国已来、未有以文字記事、至是博士高興、始有書記、然高興未嘗踰於他書、不知其何許人也」とある。372年には、百済では東晋から下賜された七支刀を仿製し、その由来を説く27文字の独自の短い文を裏面に象眼していたが、この頃より百済は確かに記録書を持つようになったと考えられる。その高興とは出自不明というが、この頃、百済は高句麗の故国原王の軍と一進一退の戦況であったが、こうした中で高興は「高」というその氏姓から推測すれば、高句麗の王族に近い知識人あるいは、かの2郡に連なる漢人系の人物であったかと思われる。

ただ、後掲の『日本書紀』の記録は「百済記」を引用史料のひとつとしており、『三国史記』百済本紀に編年された百済王の系譜に対応するとは云え、『日本書紀』に豊富に記録された人物の行状を中心とした百済と倭国との関係史の細部までがそのままに史実であると認めるには慎重でなければならない。

『日本書紀』のなかで4世紀に相当する記事に表現された「天皇」や「日本」号はこの4～5世紀では未だ成立していないこと、また「天朝」の称号も中国南朝からの冊封を基本とする百済の外交姿勢を考慮すれば、百済が日本に対して唱えた呼称とは認定できず、これも8世紀初頭の『日本書紀』を編纂する前後の天皇の王権を修飾する用語である。

『日本書紀』の記録が氏族の始祖の行状を「物語」化し、また後世の百済関係の記録も『日本書紀』編纂時の「今」、即ち7世紀後半から8世紀初に至るまでの律令国家の成立過程において、氏族の国家への寄与を顕示しつつ「物語」化が進んだものと考えられるからである。

しかし、「物語」化が全くの架空の物語ではなく、「歴史の記憶」を「物語」化したものであることは留意すべきである。この「物語」化のなかに歴史を読みとる作業は批判的に続けなければならない。その「物語」化のなかでは編纂する「今日」に「好ましくない歴史」は氏族の「物語」としては忘却されがちであり、その逆にも「今日」に好都合な「物語」は史料批判を免れ易い。広開土王との戦いが『日本書紀』に全くその影すら読みとれないのはそのためである。

しかし、4世紀末から5世紀初の高句麗との倭の戦いの記憶は『宋書』巻97・倭国伝に記録された478年に倭の五王の一人の武王が上表文のなかで「句驪無道、圖欲見吞」と述べ、宋の順帝に高句麗の「無道」ぶりを非難した歴史の記憶に見られる。このように、4世紀末から5世紀初にも続いた百済に加担して高句麗と戦った倭の戦争の記憶は国家の次元では忘却されてはいないのである。

『日本書紀』

『日本書紀』巻9. 氣長足姫尊(神功皇后)紀

・ 同46年(366)「春三月乙亥朔、遣斯摩宿禰于卓淳国。〔斯摩宿禰者、不知何姓人也〕於是、卓淳

王末錦早岐、告斯摩宿禰曰、**甲子年(364)**七月中、百濟人久氏、彌州流、莫古三人、到於我土日、百濟王、聞東方有日本貴國、而遣臣等、令朝其貴國。故求道路、以至於斯土。若能教臣等、令通道路、則我王必深德君王。時謂久氏等曰、本聞東有貴國。然未曾有通、不知其道。唯海遠浪嶮。則乘大船、僅可得通。若雖有路津、何以得達耶。於是、久氏等曰、然即當今不得通也。不若、更還之備船舶、而後通矣。仍曰、若有貴國使人來、必應告吾國。如此乃還。爰斯摩宿禰即以僮人爾波移與卓淳人過古二人、遣于百濟國、慰勞其王。時**百濟肖古王**、深之歡喜、而厚遇焉。仍以五色綵絹各一匹、及角弓箭、并**鐵鋌四十枚**、幣爾波移。便復開寶藏、以示諸珍異曰、吾國多有是珍寶。欲貢貴國、不知道路。有志無從。然猶今付使者、尋貢獻耳。於是、爾波移奉事而還、告志摩宿禰。便自卓淳還之也」

- 同47年(367)「夏四月、百濟王使久氏、彌州流、莫古、令朝貢。時新羅國調使、與久氏共詣、於是、皇太后、太子譽田別尊、大歡喜之日、先王所望國人、今來朝之。痛哉、不逮于天皇矣。群臣皆莫不流涕。仍檢校二國之貢物。於是、新羅貢物者、珍異甚多。百濟貢物者、少賤不良。便問久氏等曰、百濟貢物、不及新羅、奈之何。對曰、臣等失道、至沙比新羅。則新羅人捕臣等禁囹圄。經三月而欲殺。時久氏等、向天而呪詛之。新羅人怖其呪詛而不殺。則奪我貢物、因以、為己國之貢物、以新羅賤物、相易、為臣國之貢物。謂臣等曰、若誤此辭者、及于還日、當殺汝等。故久氏等恐怖而從耳。是以、僅得達于天朝。時皇太后、譽田別尊、責新羅使者、因以、祈天神曰、當遣誰人於百濟、將檢事之虛實。當遣誰人於新羅、將推問其罪。便天神誨之曰、令武內宿禰行議。因以千熊長彥為使者、當如所願。〔千熊長彥者、分明不知其姓人。一云、武藏國人。**今是額田部槻本首等之始祖也**。百濟記云職麻那々加比跪者、蓋是歟也〕於是、遣千熊長彥于新羅、責以濫百濟之獻物」
- 同49年(369)「春三月、以荒田別、鹿我別為將軍。則與久氏等、共勒兵而度之、至卓淳國、將襲新羅。時或曰、兵衆少之、不可破新羅。更復、奉上沙白、蓋盧、請增軍士。即命木羅斤資、沙々奴跪〔是二人、不知其姓人也。但木羅斤資者、百濟將也。〕領精兵、與沙白、蓋盧共遣之。俱集于卓淳、擊新羅而破之。因以、平定比自牒、南加羅、喙國、安羅。多羅、卓淳、加羅七國。仍移兵、西廻至古爰津、屠南蠻枕彌多禮、以賜百濟。於是、其**王肖古及王子貴須**、亦領軍來會。時比利、辟中、布彌支、半古、四邑、自然降服。是以、百濟王父子及荒田別、木羅斤資等、共會意流村〔今云州流須祇〕。相見欣感。厚禮送遣之。唯千熊長彥與百濟王、至于百濟國、登辟支山盟之。復登古沙山、共居磐石上。時百濟王盟之曰、若數草為坐、恐見火燒。且取木為坐、恐為水流。故居磐石而盟者、示長遠之不朽者也。**是以、自今以後、千秋萬歲、無絕無窮**。常稱西蕃、春秋朝貢。則將千熊長彥、至都下、厚加禮遇。亦副久氏等而送之」
- 同50年(370)「春二月、荒田別等還之。夏五月、千熊長彥、久氏等、至自百濟。於是、皇太后歡之問久氏曰、海西諸韓、既賜汝國。今何事以頻復來也。久氏等奏曰、天朝鴻澤、遠及弊邑。吾王歡喜踊躍、不任于心。故因還使、以致至誠。雖逮萬世、何年非朝。皇太后勅云、善哉汝言。是朕懷也。增賜多沙城、為往還路驛」
- 同51年(371)「春三月、百濟王亦遣久氏朝貢。於是、皇太后語太子及武內宿禰曰、朕所交親百濟國者、是天所致。非由人故。玩好珍物、先所未有。不闕歲時、常來貢獻。朕省此款、每用喜焉。」

如朕存時、敦加恩惠。即年、以千熊長彥、副久氏等遣百濟國。因以、垂大恩曰、朕從神所驗、始開道路。平定海西、以賜百濟。今復厚結好、永寵賞之。是時、百濟王父子、並顙致地、啓曰、貴國鴻恩、重於天地。何日何時、敢有忘哉。聖王在上、明如日月。今臣在下、固如山岳。永為西蕃、終無貳心」

- 同52年(372)「秋九月丁卯朔丙子、久氏等從千熊長彥詣之。則獻七枝刀一口、七子鏡一面、及種々重寶。仍啓曰、臣國以西有水。源出自谷那鉄山。其邈七日行之不及。當飲是水、便取是山鉄、以永奉聖朝。乃謂孫枕流王曰、今我所通、海東貴國、是天所啓。是以、垂天恩、割海西而賜我。由是、國基永固。汝當善脩和好、聚斂土物、奉貢不絶、雖死何恨。自是後、每年相續朝貢焉」
- 同55年(375)「百濟**肖古王**薨」
- 同56年(376)「百濟**王子貴須立**為王」
- 同62年(382)「新羅不朝。即年、遣襲津彦擊新羅〔**百濟記**云、**壬午年**(382)、新羅不奉貴國、々々遣沙至比跪令討之。新羅人莊飾美女二人、迎誘於津。沙至比跪、受其美女、反伐加羅國。々々々王已本旱岐、及兒百久至、阿首至、國沙利、伊羅麻酒、爾汶江至等、將其人民、來奔百濟。百濟厚遇之。加羅國王妹既殿至、向大倭敬云、天皇遣沙至比跪、以討新羅。而納新羅美女、捨而不討。反滅我國。兄弟人民、皆為流沈。不任憂思。故、以來啓。天皇大怒、即遣木羅斤資、領兵衆來集加羅、復其社稷。一云、沙至比跪、知天皇怒、不敢公還。乃自竄伏。其妹有幸於皇宮者。比跪密遣使人、問天皇怒解不。妹乃託夢言、今夜夢見沙至比跪。天皇大怒云、比跪何敢來。妹以皇言報之。比跪知不免、入石穴而死也〕」
- 同64年(384)「百濟國**貴須王**薨。王子**枕流王**立為王」
- 同65年(385)「百濟**枕流王**薨。王子阿華年少。叔父辰斯奪立為王」
『日本書紀』卷10・譽田天皇(応神天皇)紀
- 同3年(392)「是歲、**百濟辰斯王**立之失禮於貴國天皇。故遣紀角宿禰、羽田矢代宿禰、石川宿禰、木菟宿禰、噴讓其無禮狀。由是、百濟國殺**辰斯王**以謝之。紀角宿禰等、便立**阿華**為王而歸」
- 同7年(396)「秋九月、高麗人、百濟人、任那人、新羅人、並來朝。時命武內宿禰、領諸韓人等作池。因以、名池號韓人池」
- 同8年(397)「春三月、百濟人來朝〔**百濟記**云、**阿華王**立無禮於貴國。故奪我枕禰多禮、及峴南支侵、谷那、東韓之地。是以、遣**王子直支**于天朝、以脩先王之好也〕」
- 同14年(403)「春二月、百濟王貢縫衣工女。曰眞毛津。是**今來目衣縫之始祖也**。是歲、弓月君自百濟來歸、因以奏之曰、臣領己國之人夫百廿縣而歸化。然因新羅人之拒、皆留加羅國。爰遣葛城襲津彦、而召弓月之人夫於加羅。然經三年、而襲津彦不來焉」
- 同15年(404)「秋八月壬戌朔丁卯、百濟王遣阿直伎、貢良馬二匹。即養於輕坂上厩。因以阿直岐令掌飼。故號其養馬之處、曰厩坂也。阿直岐亦能讀經典。即太子菟道稚郎子師焉。於是、天皇問阿直岐曰、如勝汝博士亦有耶。對曰、有王仁者。是秀也。時遣上毛野君祖、荒田別、巫別於百濟、仍徵王仁也。其阿直岐者、**阿直岐史之始祖也**」
- 同16年(405)「春二月、王仁來之。則太子菟道稚郎子師之。習諸典籍於王仁。莫不通達。所謂王

仁者、是書首等之始祖也。是歳、百濟阿華王薨。天皇召直支王謂之日、汝返於国以嗣位。仍且賜東韓之地而遣之。〔東韓者、甘羅城、高難城、爾林城是也〕八月、遣平群木菟宿禰、的戸田宿禰於加羅。仍授精兵詔之曰、襲津彦久之不還。必由新羅之拒而滯之。汝等急往之擊新羅、披其道路。於是、木菟宿禰等進精兵、莅于新羅之境。新羅王愕之服其罪。乃率弓月之人夫、與襲津彦共來焉」

- ・ 同20年(409)「秋九月、倭漢直祖阿知使主、其子都加使主、並率己之黨類十七縣、而來歸焉」

参考文献

- 王健群1984『好太王碑の研究』雄渾社
- 金錫亨1969『『広開土王陵碑文』にあらわれた朝日関係』『古代朝日関係史』勁草書房
- 金泰植2005「4世紀の韓日関係史—広開土王陵碑文の倭軍問題を中心に—」『日韓歴史共同研究報告書』第1分科篇
- 木村誠2005「朝鮮三国と倭」武田幸男編『古代を考える 日本と朝鮮』吉川弘文館
- 佐伯有清1974『研究史 広開土王碑』吉川弘文館
- 坂元義種1981『倭の五王—空白の五世紀—』教育社
- 徐建新2006『好太王碑拓本の研究』東京堂出版
- 白石太一郎2006「倭国の形成と展開」上原真人ほか編『列島の古代史 ひと・もの・こと』8「古代史の流れ」岩波書店
- 末松保和1932「新羅建国考」『史学雑誌』第43編第12号(同『新羅の政治と社会』上、1995年吉川弘文館)
- 末松保和1949『任那興亡史』(1956年に吉川弘文館再版。1986年に『古代の日本と朝鮮』(末松保和朝鮮史著作集、吉川弘文館)に所収)
- 鈴木靖民2002「倭国と東アジア」鈴木靖民編・日本の時代史2『倭国と東アジア』吉川弘文館
- 武田幸男1978「広開土王碑文辛卯年条の再吟味」『古代史論叢』上巻 吉川弘文館
- 武田幸男1988『広開土王碑原石拓本集成』東京大学出版会
- 武田幸男1989『高句麗史と東アジア—「広開土王碑」研究序説—』岩波書店
- 武田幸男1989『高句麗史と東アジア』岩波書店
- 武田幸男2007『広開土王碑との対話』白帝社
- 武田幸男2009『広開土王碑墨本の研究』吉川弘文館
- 濱田耕策1973「高句麗広開土王陵碑文の虚像と実像」『日本歴史』第304号
- 濱田耕策1974「高句麗広開土王陵碑文の研究—碑文の構造と史臣の筆法を中心として—」『朝鮮史研究会論文集』NO.11
- 濱田耕策2005「4世紀の日韓関係」『日韓歴史共同研究報告書』第1分科篇
- 濱田耕策2006「高句麗長寿王という時代—父王広開土王の治績を継いで—」『朝鮮学報』第199・200合併号

- 白承忠2004『『広開土王陵碑文』からみた加耶と倭』『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集
- 朴時亨1967「広開土王の陵碑について」『今日の朝鮮』127
- 朴時亨1967「広開土王陵碑」『朝鮮研究年報』9
- 朴時亨1985『広開土王碑』(全浩天訳)そしえて
- 三品彰英1962「高句麗広開土王陵碑」『日本書紀朝鮮関係記事考証』(上巻)吉川弘文館(上・下巻、2002年天山舎)
- 水谷悌二郎1959「好太王碑考」『書品』100号(同1977『好太王碑考付水谷拓本』開明書院)
- 山近久美子・渡辺理絵2008「アメリカ議会図書館所蔵の日本軍将校による1880年代の外邦測量原図」
「日本国際地図学会 平成20年度定期大会発表論文・資料集」
- 李進熙1972『広開土王陵碑の研究』吉川弘文館
- 李成市1994「表象としての広開土王碑文」『思想』842号
- 林基中1995『広開土王碑原石初期拓本集成』東国大学校出版部 ソウル

第2章 5世紀の日韓関係

第1節 倭国・朝鮮半島諸国と中国南北朝との通交

後漢末、三国時代、西晋の不安定な統一の時期から、中国が南北に分裂し、江南では東晋がこの地に定着を進め、華北では五胡十六国の興亡が展開した3～4世紀において、東アジア諸民族はそれぞれが独自に国家を整備する道をとらざるを得なかった。5世紀になると、中国南朝では宋、北朝では北魏による安定が保たれ、中国の情勢に落ち着きが戻ってくる兆しが見える。中国との通交が途絶していた倭国も再び中国史書に動向が知られるようになり、日韓関係に関しても日・韓・中それぞれの史料を比較しながら、検討することが可能になるので、複眼的視野で、より整合的な史実の究明に努めることができる訳である。そこで、ここではまず中国南北朝との通交の様相を媒介に、5世紀の日韓関係を考えていくことにしたい。

1. 倭の五王と中国南朝との通交

まず東晋との通交も含めて、4世紀後半頃から6世紀初までの倭国・朝鮮半島諸国と中国南北朝との通交事例を通覧すると、朝鮮半島諸国の通交事例については大きな問題はなく、この期間には百済は主に南朝、高句麗は主に北朝、時に南朝とも通交している。その他では479年の加羅国王荷知が南斉に通交した事例があるだけで、新羅はまだ中国王朝とのつながりを有していなかった。

一方、倭国の通交事例(表1)に関してはいくつか問題点がある。477年の通交は478年と一体のもので、本紀と列伝の信頼度などから見て、年次は478年の方がよいようである【鈴木英夫1996a】。また479年の南斉、502年の梁による進号は、ともに新王朝成立に伴うものであり、必ずしも各国の入貢を裏付けるものではない。議論が分かれるのは413年の東晋との通交例である。

2-01『晋書』安帝紀義熙9年(413)是歳条

高句麗・倭国及西南夷銅頭大師、竝献方物。

2-02『太平御覧』卷981香部1麝条所引義熙起居注

倭国献貂皮・人参等。詔賜細笙・麝香。

高句麗広開土王碑文によると、4世紀末～5世紀初に倭国は百済を支援して高句麗と戦っており、後述の倭王武の上表文にも倭国の高句麗征討計画が記されている。しかしながら、倭国と戦った広開土王(好太王)が死去して、長寿王が即位した413年以降、427年に高句麗が丸都国内城から平壤に遷都してさらなる南下を企図するまでの間は、倭国が高句麗と連携する可能性があったという意見もある。

そこで、413年には倭・高句麗の共同入貢がなされたとする説が呈されている(共同入貢説【池田温2002、川本芳昭1992など】)。しかし、史料02の倭国の献上品(貂皮・人参)はむしろ高句麗の特産品と思われ、またこの時期にはやはり倭国と高句麗が提携することはなかったと見て、これは高句麗が先の戦役で捕虜にした倭人を伴って入貢したものと解するべきだとする説もある(倭人捕虜同行説【坂元義種1981など(註1)】)。さらに史料02の献上品・下賜品は倭国ではおかしく、これは高句麗の誤記とすべきであるが、史料01は各国の同時入貢と解する必要はなく、個別の入貢を一括して記したものと見れば、倭国の単独入貢であったと位置づけることができるという説(単独入貢説【石井正敏2005】)も示されている。

共同入貢説と単独入貢説は413年の東晋との通交を認めるものであり、倭人捕虜同行説は倭国の通交を否定する説となる。共同入貢説の中には『日本書紀』応神37年(306+120→426?)2月戊午朔条・41年(310+120→430?)2月是月条をこの遣使に充てる理解も呈されているが、年次が合致せず、また『日本書紀』の当該期の伝承(応神28年(297+120→417?)9月条、仁徳12年(324+120→444?)7月癸酉条・8月己酉条)からは5世紀の倭国の高句麗に対する外交意識として、対抗心や敵愾心を読み取ることができるので、共同入貢説は高句麗との和平関係を証明できず疑問が残る。単独入貢説に関しても、この時期に倭国が東晋と通交する積極的な理由が不明で、やはり支持し難い。したがって413年の記事は高句麗の東晋入貢の文脈として理解すべきであり、倭人捕虜同行説が整合的ではないかと思われる。

420年に東晋が滅亡し、宋が興起した時、宋は高句麗王高璉(長寿王)を征東大將軍、百済王余映(腆支王)を鎮東大將軍に進号しており、421年の倭讚の入貢はこの宋成立のタイミングをとらえたもので、それ故に初入貢ながら除授を被ったのだと考えられる。百済では倭国と友好関係を維持した腆支王が420年に死去し、久尔辛王(在位420～427年)、毗有王(在位427～455年)の時代になるが、百済の宋入貢は424年が最初で、東アジア情勢の変化に即応できない何らかの事情があったのだろうか。そこで、倭国としては独自の東アジア外交を模索する必要があり、百済よりも一足早く、宋成立に即応して入貢するという行動に出たのである。

2. 官爵の除正とその意味

次に倭国・朝鮮半島諸国が中国南北朝と通交する目的と当該期の日韓関係のあり方を探るために、中国が授与した官爵とその意味合いを検討する。各国が中国に遣使したのは、自称・除正の称号に示された地位の承認を求めためであった。まず称号の末尾に出てくる「某(国)王」は勿論各国の支配者の地位を国際的に認定してもらうための措置であり、王に冊立されることで、支配領域の認定と国内支配の維持・安定を得たのである。

次いでその他の称号の意味を確認しておく、「使持節」は皇帝から「節」(はたじるし)を授けられて委任を受けたことを示し、「都督……諸軍事」はそこに掲げられた地域の軍事権承認を意味する。ここで留意すべきは、「都督……諸軍事」は軍事権の承認を示すだけで、民政権は含まれていなかったことである。倭国王の称号には朝鮮半島南部の複数の国名・地域名が含まれており、かつてはこれを軍事的領有を示すものと即断し、倭国の半島南部領有を裏付ける材料と位置づけていたが、中国の官爵についての研究が深化され【坂元義種1978a・b】、今日では倭国がその地域を支配していたかどうか、民政権を要求できるような支配を行っていたかどうかは全く別問題であるとする理解が定立されている。したがって使持節都督諸軍事は任務を委ねられた地域での最高の軍事権を意味し、倭国は要求可能な軍事権の委任を求めたものと見ることができる。

倭国王が称する複数の地域名の中では、任那は広開土王碑文にも「任那加羅」として出てきた地域で、南部加耶諸国の中心国の1つ金官国を指す。「任那」が金官国を指す用例は朝鮮側の史料にも散見しており(『三国史記』卷46強首伝、924年崔仁滾撰「真鏡大師月凌空塔碑」)、中国史書の『宋書』でも任那＝金官国と解して大過ないと思われる。

加羅は479年に国王荷知が南斉に入貢したことが知られており、その際に「輔国將軍本国王」に除正されたという(『南斉書』東南夷伝東夷・加羅国条)。この国王荷知は省熱県(慶尚南道宜寧郡富林面、斯二岐国の故地)出身の楽師于勒に12弦の加耶琴で12曲を製させ、楽曲による諸国の統一を図ったとある嘉悉(実)王(『三国史記』新羅本紀真興王12年(551)3月、13年条、卷32志1楽・加耶琴条)に比定できるから(註2)、加羅は北部加耶諸国の中心となる大加耶(高靈、伴跛)を指すものと考えられる。

秦韓・慕韓は辰韓・馬韓で、通常は346年に馬韓から百済、356年に辰韓から新羅が成立すると説明されているが、新羅や百済にまだ編入されていない独立した地域が残っていたものと推定される。議論の詳細は後述することにしたが、近年、朝鮮半島西南部の全羅南道の榮山江流域では5世紀後半～6世紀前半の前方後円墳が見つかり、日本の学界では6世紀前半頃まで百済とは一定の距離をおき、倭国と提携する独自の勢力が存立していたと考え、これを慕韓に比定する見方も有力である【東潮1995、田中俊明2001など】。この地域が百済の領域に編入されるのは、後述の475年の百済の首都漢城陥落と熊津遷都による復興の5世紀末～6世紀のことであり、漢城を首都とする段階では僻遠の地に留まっていた。新羅と秦韓の関係も同様に推測され、秦韓・慕韓は実際の地域名として意味のあるものであった【李鎔賢2008】。

以上、倭王の称号に登場する軍事権要求の範囲が、当時の国際情勢の中でそれぞれに意味を有する地であることを述べた。この点に関しては、490年、495年の百済東城王が臣下に除正を求めた太守号について(表2)、中国の山東・河北省の地名である広陽・城陽や高句麗の領域に含まれる楽浪・朝鮮な

どが見えており(『南齊書』百濟伝)、これらは全くの虚号で意味はないとして、倭王の称号に見える地域名、特に秦韓・慕韓についても同様に解釈しようとする意見が呈されている【李永植1993】。

しかし、『宋書』『梁書』百濟伝によると、百濟は晋代に中国で軍事活動を展開し、遼西・晋平2郡の地を治めたと記されており、対高句麗戦の課題に関わる楽浪郡域ともども、百濟の「旧領」回復の主張が込められたもので、一定の意味合いが存すると考えられる。除正は認められなかったが、百濟王の臣僚が称した面中王・都漢王・八中侯・阿錯王・邁羅(盧)王・辟中王・弗中侯などはいずれも全羅南・北道の地名で、当時百濟が経略を進めていた地域であった。中国南朝が高句麗に与えた称号に見える平・營2州も同様の意味合いを持っていたと解することができる。したがって倭王の称号も含めて、倭国・朝鮮半島諸国が中国に除正を求めた称号は虚号ではなく、何らかの政治的意図を有し、各地域における軍事展開の許可を求める意味があった。

但し、倭王が要求した地域名の中では、倭国側の自称には百濟が含まれているが、宋の除正では必ず除外されていることに注意したい。百濟は372年に東晋に入貢して以来、中国南朝に通交し、「使持節都督百濟諸軍事鎮東大將軍百濟王」(『宋書』高句麗伝、420年宋成立時の進号記事による)などの官爵号を得ていた。したがって倭国がいくら百濟の軍事権付与を求めても、既に百濟を冊封して倭よりも格上の將軍号を与えている宋としては、倭国の要求を認めることはできなかつたのである。

その將軍号であるが、倭王が自称・除正された安東(大)將軍は、四安將軍の1つで、宋の將軍表(表3)では第三品、第二品に相当している。但し、同品内でも各將軍号には序列が存し、高句麗、百濟と比べると、倭王の將軍号は常に劣位であった(註3)。表1によると、478年に倭王武は開府儀同三司を自称しているが、これは高句麗の長寿王が463年に宋から車騎大將軍開府儀同三司に除されていたことに対抗するものであろう。しかし、宋はその除正を認めておらず、倭国の希望は叶わなかつた。

広開土王碑文以後の朝鮮半島の戦況は不明のところが多く、『三国史記』の当該部分を見ても、大々的な戦闘は描かれていない。しかしながら、472年百濟王余慶(蓋鹵王)が中国北朝の北魏に呈した上表文には、「構怨連禍、三十余載財殫力竭、転自孱蹶」とあり(『魏書』百濟国伝)、百濟と高句麗が慢性的な戦争状態にあったことを物語っている。大々的な戦闘がないという点では小康期と評することができるが、倭国としては対高句麗戦への体制整備に努める必要があり、広開土王が一時蹂躪した半島南部の軍事権確保を求めて、宋との外交に活路を見出そうとしたのであった。

ちなみに、倭国が百濟の軍事権を執拗に求めたのは、こうした状況の中で百濟を統属下に置こうとしたとも解せられる。しかし、將軍号は百濟の方が常に上位であるから、たとえ宋が百濟の軍事権委任を倭国に認めたとしても、百濟が上位の將軍号によってむしろ倭王を引率し、百濟自身の軍事権も確保し得るので、倭国の自称と除正要求は百濟も支持していたとする見方も呈されている【高寛敏1997】。ただ、一方では『三国史記』に見える5世紀後半の百濟と新羅の対高句麗戦同盟の形成や毗有王(在位427～455年)代には百濟と倭の関係が円滑でなかつたことに留意すると、5世紀代の百濟と倭の関係は必ずしも良好とは言えなかつたと考えねばならない【熊谷公男2007】。その一因として、百濟の軍事権付与を宋に要求する倭の独自の外交展開が想定される。

この1地域2軍事権の問題に関連して、479年の加羅国の南齊入貢と將軍号除正に留意したい。この時に加羅国王に都督諸軍事が授与されたかどうかは不明であるが、自国の王位承認は当然軍事権委

任を意味するとすれば、新王朝成立に伴う慶賀的な進号ながら、倭国に対する将軍号授与と軍事権委任の範囲に含まれる加羅との関係が問題になろう。倭国王の鎮東大將軍に対して、加羅国王は輔国將軍であり、将軍号から言えば、後述のように、倭王がその臣下に除正を求めた将軍号と等しい低位の地位であった。とすると、中国南朝は1地域の軍事権を複数国に与えたとしても、それは将軍号の上下関係によって解決可能と考えていたのだろうか。

但し、厳密に言えば、479年の倭王の進号には朝鮮半島諸地域の都督諸軍事号の承認を伴っていたか否か不明の点があり、これを1地域2軍事権の明確な事例と見るべきかどうかは疑問も残る。この問題については事例数が少なく【坂元義種1978c】、明解な結論を呈することができないが、そのように考えとしても、百済の軍事権をついに倭国に与えなかったのは、やはり中国から見て、時に武力で中国をも脅かし、南朝にとっては北朝の牽制にも役立つ高句麗、中国王朝との通交を維持する百済、そして絶域の地にあつて稀にしか入貢しない倭国という東アジア諸国の序列は不動のものであったことを強調しておきたい。また中国王朝が認定した軍事権行使の実態については、各地域との具体的な通交のあり方を検討した上で、別途考察すべきである点にも留意したい。

3. 倭王権の成長と府官制的秩序の導入・渡来人の役割

倭国と宋との通交の様子を見ると、倭王は自らの官爵除正を求めるとともに、438年には珍が倭隋ら13人に対して平西・征虜・冠軍・輔国將軍号の除正を求め、451年には済が23人の將軍号・郡太守号除正を要求するなど、配下の人々への官爵授与を取り次いでいる。これらの除正を宋に認めてもらうことは、倭国の国内政治運営、王権の確立に不可欠なものであった。ここでは、倭王権の成長のあり方を朝鮮半島諸国と比較し、また5世紀代に半島から到来した渡来人の役割を検討することを通じて、当該期の日韓関係を考える一助としたい。

「幕府」とは出征中の將軍の幕営をさすのが原義であり、倭王は叙爵された將軍号をもとに、その配下の者を下位の將軍号を有する地位に任命することによって、上下関係を明確にし、倭国の支配組織を確立しようとしたと考えられる。こうした支配体系を府官制的秩序と呼んでいる【鈴木靖民1985】。宋の將軍表(表3)によると、倭王珍が得た安東將軍号は倭隋らの將軍号と同じ第三品ではあるが、上位の將軍号であり、倭王が国内秩序を統制する地位にあることを明示している。但し、倭隋の平西將軍(四平將軍の1つ)と珍の安東將軍(四安將軍の1つ)は僅かに1階の差であり、そこに当時の倭国の王権の性格が反映されているものと見られる。

こうした府官の名称は同じく將軍号を授与された高句麗、百済にも存した。中国王朝との通交や官爵授与の歴史から言えば、むしろ高句麗、百済の方が先行しており、倭国ではそれらの様態を手本にして国内秩序の整備に着手したと見ることができる。単なる通交関係に留まらない日韓関係のあり方を検討するために、高句麗や百済の府官制的秩序の実態を参照してみたい。

まず高句麗に関しては、安岳3号墳墓誌(冬寿墓誌・357年)・徳興里壁画古墳墓誌(某氏鎮墓誌・408年)の2人の亡命中国人の事例が注目される。彼らが有する中国風の職位については、これを虚号と見るのが有力な見解で、『宋書』高句麗伝に見える長史も外交使節としての称号で、府官としての実質的な職務を伴うものではないと解されている【井上直樹2007】。確かに高句麗には中国との通交で臣

下への官爵除正を求めた事例はなく、高句麗が府官制的秩序そのものを国内秩序形成に導入していた様子は窺えない。

但し、冬寿が楽浪相を名乗るのは、高句麗王が楽浪公の官爵を得ていたことと関係があり、その臣僚たることを示すものであった。また安岳3号墳墓誌では東晋年号を用いているのに対して、徳興里壁画古墳墓誌では広開土王の永樂年号が使用されており、高句麗の国内統制が進展している様子が看取される。鎮は中国風の将軍・郡太守号とともに、高句麗の十三等官位制の官名（「國小大兄」は第七等の大兄か）を称していることにも注目したい。高句麗には多くの亡命中国人が仕えており、彼らを統制するためには高句麗王の冊封号を前提とする府官制に基づく秩序構成が有効であったことも認めねばならず、同時に高句麗独自の官位制度の中に編入する努力も払われていたのである。なお、5世紀代と考えられる牟頭婁墓誌には高句麗人の中級貴族一族の動向が知られ【武田幸男1989】、高句麗では亡命中国人と在来の高句麗人とともに支配機構の中に取り込み、独自の十三等官位制による秩序形成を図っていたことが窺われる。

次に百済の場合は、表2のように、中国に対して臣下の官爵除正を申請した事例が存するので、百済が府官制的秩序を利用していたことはまちがいない。『隋書』百済伝には「國中大姓有八族。沙氏、燕氏、劬氏、解氏、貞（真か）氏、國氏、木氏、苜氏。」と、大姓八族が挙げられているが、百済王の下で長史・司馬・參軍などとして登場する人々には5世紀に有力であった真・解氏を始めとする百済の有力貴族の姓氏を持つ人物は見えず、中国系の姓氏を称する者が多いことが特色である【李文基2003】。『隋書』百済伝にはまた、「其人雜有新羅・高麗・倭等、亦有中国人。」と記されており、これは7世紀前後の状況であるが、百済の宮廷の複雑な構成が窺われる。5世紀の百済も高句麗の軍事力に対して、中国王朝との通交、倭国との提携、そして文化の力で対抗しようと企図し、楽浪・帶方系の遺民、あるいは新来の中国人を起用して、王の権力強化に努めていたのであろう。

府官の中には余姓の者も見えており、これは王族をも属僚に取り込み、王権強化を図ったことを示している。475年百済は高句麗の攻勢により存亡の危機を迎え、首都を南遷、半島西南部への支配浸透により国勢を再興しようとする。この時期には地名＋王・侯の称号を有する者として王族や大姓の有力貴族の名前が登場し、王を中心とする身分秩序の中に彼らを編入し、地方支配を委任して国内統制の強化に努めたのだと考えることができる【坂元義種1978d】。百済では府官制的秩序による国家機構の構築が重要な役割を果たしたのである。

倭国の場合、上述のように、安東將軍倭国王珍と平西將軍倭隋には明確な上下関係があったが、その差は1階でしかないとも言える。また倭隋は倭王と同じ「倭」姓を名乗っており、百済王配下の王・侯と同様、王と同族、同程度の者が王権を補佐する構造であったと推定される。この倭国の府官制的秩序の実態や5世紀の国内体制整備の様子を窺わせるものとして、①千葉県市原市稲荷台1号墳出土鉄剣銘（5世紀中葉か）、②埼玉県行田市稲荷山古墳出土鉄剣銘（471年）、③熊本県玉名郡和水町江田船山古墳出土大刀銘（5世紀後半）などの金石文を考察材料としてみたい（註4）。

①②は関東地方、③は九州の古墳から出土したもので、②③に見える獲加多支鹵（ワカタケル）大王は『古事記』『日本書紀』の雄略天皇の名大泊瀬幼武（オホハツセワカタケル）に合致し、倭王武は「タケル」の文字を置換した名乗りと考えられるから、倭王武の上表文に「東征毛人五十五國、西服衆夷六十

六國)、『宋書』倭国伝)とある倭王権の東・西への広がりや裏付ける材料になる。②は関東地方の豪族が杖刀人首、あるいは杖刀人首一杖刀人の関係で、③は九州の豪族が典曹人として宮廷に仕えていたことを示している。『日本書紀』『新撰姓氏録』などにも雄略朝における宮廷組織整備の様子が窺われ、獲加多支鹵大王の世は各地の豪族を倭王権に奉仕させる体制が出現した時代であったと考えられる【鈴木靖民1985】。

『日本書紀』によると、雄略天皇は死去に際して大伴連室屋と東漢直掬の2人に遺詔したといひ(雄略23年(479)8月丙子条)、大伴室屋は倭王権の宮廷組織を分掌した家宰的豪族に属する人物で、宮廷組織の整備、王権強化の推進を担った。もう1人の東漢直掬は、都加使主とも記され、王仁を祖とする西文首とともに東西史部と並び称される最有力の渡来系氏族東漢氏の始祖となる人物である。『日本書紀』雄略2年10月是月条には「唯所愛寵、史部身狭村主青・檜隈民使博徳等也」とあり、東漢氏系の渡来系氏族に対する信頼は厚かった。東漢氏・西文氏は後漢皇帝の後裔、そして秦氏は秦の始皇帝の後裔を称する(『新撰姓氏録』)が、東漢氏は安羅(阿羅、阿那加耶、阿尸良とも。『魏志』韓伝の弁辰安邪国)、秦氏は蔚山付近の出身と考えられ、彼らは主に朝鮮半島南部を出身地とし、高句麗の南下等による半島の混乱を避けて5世紀に倭国に来帰した人々である(『日本書紀』応神14年(283+120→403?)是歳条、同16年8月条、同15年8月丁卯条、同16年2月条、同20年9月条)。

これ以前の渡来人としては、葛城襲津彦が連れ帰ったという桑原・佐廩・高宮・忍海4邑の漢人の祖となった人々がいるが、彼らは葛城氏に帰属したようだ(『日本書紀』神功5年(205?)3月己酉条)。これが5世紀中葉頃までの葛城氏の勢力全盛を支えた1つの、かつ大きな要因となった(註5)。『日本書紀』允恭・安康・雄略紀、即ち倭王済・興・武の時代にはこの葛城氏と王権の対立が描かれており、葛城氏を制圧して勢威を高めた王権にとっても、渡来人の掌握は大きな意味を持っていた。雄略紀にはまた、渡来人の組織化や新来者の招聘を示す記事が散見しており(後掲史料07、『日本書紀』雄略14年(470)正月戊寅条、同15年条、同16年7月条・10月条)、王権による渡来人の把握が進展したものと考えられる。5世紀の渡来人は農業・土木技術や製鉄・織物・須恵器などの生産面における様々な先進技術を齎し、また文字の知識を有する史(フビト)や大蔵の管理を担う蔵部(『古語拾遺』)としての活動で、王権の維持・発展に寄与したところが大きかった。また身狭村主青の「呉」との通交の話(『日本書紀』雄略14年正月戊寅条)は、彼らが先進文物導入の上でも主導的立場にあったことを示している。なお、425年倭王讃が宋と通交した時、司馬の曹達を派遣していること、金石文③の筆者は張安であることなどは、倭国にも中国系の氏姓を持つ人々が到来していたことを教えてくれる。

但し、渡来人の技術、先進文物の導入はまだ倭王権だけの独占物ではなかった。『日本書紀』雄略7年(463)是歳条(後掲史料07)では吉備上道臣田狭と稚媛所生の弟君が新羅に派遣されることになった時、西漢才伎勸因知利という者の発案で、今来才伎(新来の技術者)を招聘する任務も託されたという。弟君は稚媛を雄略に奪われた父田狭の勧誘により倭王権に叛旗を翻そうとしたので、その妻樟媛が弟君を殺したとあるが、或本の記述では弟君は使命を果して百済から帰朝したとも記されている。この時に到来した人々は倭王権に帰属したとあり、王権による新来の技術独占を窺わせる。ただ、吉備地域にも渡来人居住の証拠は多く【亀田修一1997】、王権の用務を担う中で、吉備氏も新来の技術導入を達成することができたものと考えられる。田狭も半島に滞在し続けたようであるから、吉備氏と半島との関係、

先進文物移入ルートは健在であったと言わねばならない。その他、金石文③の江田船山古墳からは百済系の金銅製冠帽・沓・耳飾りが出土しており、これも地方豪族の独自の文物移入ルートの存在を示す事例となろう。

再び金石文①～③に戻ると、5世紀中葉の①では「王」であったのに対して、②・③の獲加多支鹵＝雄略＝倭王武の段階、5世紀後半には「王」を越える称号として「大王」号が成立していることに注目したい。高句麗では4世紀後半～5世紀初の広開土王が好太王と称されており(太王陵古墳出土銅鈴には「辛卯年好大王□〔所カ〕造銅九十六」とある)、新羅の領域内の慶州路西洞140号墳出土の乙卯年(415)銘壺杆に「広開土地好太王」の名が見えている。また延寿元年(451)銘の慶州瑞鳳塚出土銀合杆には「太王教造」の文字があり、長寿王も「太王」を名乗り、新羅に対する高句麗の支配を浸透させていたことが窺われる。府官制的秩序のところの説明したように、百済王の下には王・侯が任命されていたので、百済でも「大王」号が用いられていたと考えられる。

東アジアにおける大王号所稱は、急速な領域の拡大、国内支配の強化、近隣諸国の制圧、中国との積極的な外交などを背景に成立するとされており【坂元義種1978e】、倭王武の時期の倭王権もそうした条件を満たす段階にあった。武の自称である「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大將軍倭国王」には、百済をも軍事指揮下に置く大王として、高句麗に対抗する構想が窺われ、開府儀同三司の仮授も、同じ称号を既に除正されていた高句麗に倣ったものと思われる。

金石文②には「左治天下」、③には「治天下」の表現が見え、「天下」概念が強調されていることにも注目したい。「天下」とは「世界中、中国全土」のことであり、中国皇帝の支配の及ぶ範囲を示すものであった。②③の「天下」は倭王の支配領域を指しており、中国王朝を中心とする「天下」から離れた場所において、自国の領域を「天下」とする観念が成立していたことを窺わせる。倭王武の上表文では、それまでとは異なって、吏僚の官爵について除正を求める明確な文言が見あたらないとする指摘もある。即ち、倭王武は中国王朝を中心とする「天下」から離脱して、独自の「天下」の支配を構想していたと考えられ、これが以後中国南朝との通交が途絶する理由であったと理解される(註6)。その他、479年には当の宋王朝が滅亡し、以後急進的な禪讓革命・下剋上によって寒人からのし上ってくる南朝の皇帝の冊封を受けることに違和感を抱いたことも、通交が断絶する一因であったと思われる【前之園亮一2001】。ともかくも、「治天下大王」の成立によって、倭国が中国王朝の冊封を受けなくても、独自に王権と国土を維持することが可能になったことは重要であり、そこに倭王武段階の1つの達成があったのである。

但し、当時東アジア情勢は緊迫しており、『日本書紀』によると、倭の五王の系譜も武＝雄略の後に断絶の危機を迎えることになる。日韓関係の行方は次節で述べることにして、ここでは最後に国内支配構造の課題を指摘しておきたい。『日本書紀』雄略7年(463)8月条にある吉備下道臣前津屋が倭王権に仕える吉備弓削部虚空を帰郷中に留使したという話は、吉備氏配下の者で倭王権に出仕する者の存在、そうした者も吉備の地では当地の最有力豪族である吉備氏に従わねばならないという、二重身分的な存在形態で地域の有力者と倭王権の両方に仕える人々のあり方を示している。彼らを王権側に一元的に組み込むことが、地方豪族の弱体化、王権の強化につながるのである。吉備氏はいくつかの有力豪族の連合体で、盟主墓も変動しているが、5世紀代には造山古墳、作山古墳など巨大な前方後円墳を築造し、倭王権に匹敵する力を示した。瀬戸内海交通を押さえるだけでなく、瀬戸内の塩、中国山

地の鉄といった有用な資源を持つ点から見ても、倭王権の中に占める位置は大きかったと考えられる。『日本書紀』には吉備氏掣肘の伝承が記されているが、これを完全に制圧することはできず、6世紀前半には朝鮮半島南部における吉備氏の独自の活動も知られる。中国王朝との通交に関しては倭王権が外交権を独占していたが、こうした地方支配の独自性や朝鮮半島諸国との個別的通交に見られる国内外での地方豪族の独立性維持は、倭王権のさらなる成長の中で克服されるべき課題であった。

第2節 百済の南遷と倭国の外交政策

475年、高句麗長寿王は百済の首都漢城を攻略し、蓋鹵王(在位455～475年)を殺害する。壊滅的打撃を被った百済は首都を熊津に南遷し、国勢復興に努めることになる。『三国史記』によると、文周王(在位475～477年)、三斤王(在位477～479年)の2代は治世も短く、大姓八族解氏の解仇による文周王殺害、解仇と結託した燕氏の燕信らと三斤王の対立、真氏の真老による解仇誅殺と燕信の高句麗への逃去などが伝えられており、熊津遷都後の百済復興の混乱期であったことが窺われる。

こうした百済の政情が安定するのは、次に即位した東城王(在位479～501)代である。東城王は新羅と連合して高句麗と戦い、新羅との婚姻同盟形成や南斉への朝貢など国際関係の構築に尽力した。また表2の王・侯の管轄地名に示される朝鮮半島西南部の経略を進め、耽羅(済州島)を服属させて、熊津時代の百済の安定期を作り出している。これが次の6世紀代に東方の加耶諸国への侵攻、新羅との間で争奪戦を展開する事態につながるのである。

ここでは百済の南遷後の倭国の外交活動の様子、百済、新羅、倭国と加耶諸国の関係などを整理してみたい。

1. 倭王武と百済王余慶・牟大の上表文

百済の南遷後、478年に倭王武は中国南朝の宋に入貢し、上表文を捧呈する(『宋書』倭国伝)。倭王武の上表文は、Ⅰ倭国の歴史と過去における宋との関係を概観した上で、Ⅱ近時における国際的案件の発生(高句麗と百済の戦争)と倭国の宋への入貢断続化の現況を説明し、Ⅲ再び時を遡って近き過去の状況として、倭王武の時代の対高句麗戦準備とその中断について述べ、Ⅳ武自身の対高句麗戦遂行の意志とそのため官爵仮授の執行を上表する、という構成になっている。この上表文と472年の百済王余慶の上表文(『魏書』百済伝)は使用されている語句・表現に類似したところがあり、捧呈時期も近接しているので、ともに同一の百済人が起草したのではないかという意見も呈されている【内田清1996】。

しかし、5世紀代の倭国・百済・高句麗が中国王朝に捧呈した上表文の語句・表現を通覧すると、中国史書・経書に依拠して作成された様子が看取され、広く史書・経書に通暁した人物が、前世紀の晋代の用例を意識しつつ、宋・北魏で使われた新たな語句・用例も取り入れて外交文書を起草していたと想定するのがよいであろう【田中史生2005】。倭王武の上表文と百済王余慶の上表文の表現が似ているのは、百済の府官の中に見える中国系の氏姓を有する人々の存在、倭国における曹達や張安のような人物など、中国系渡来人が各国で果たした役割と彼らの教養基盤の共通性に由来するものと考えられる。

同様に、495年の百済王牟大の上表文(『南斉書』百済伝)も、倭王武の上表文と相似している。i 過

去における南朝との関係の強調、ii 近時における国際案件の発生、iii 事件への対応、iv 結果に対する処置としての官職授与の要求という文章構成、冒頭部分の「自昔」という語句の一致を始めとする用字にもよく似たところが見られる【河内春人2003】。こうした東アジアにおける「漢字文化圏」の共有も、当該期の国際情勢を考える上で重要な視点になる。

但し、倭王武の上表文では倭国でも派兵の準備が進められていたかに記されているが、現実には派兵に至っておらず、倭国と百済では対高句麗戦に関する深刻度・切迫感は大いに異なっていると言わざるを得ない【川崎晃2001】。百済王余慶の上表文では、百済と高句麗の戦争の歴史を回顧し、中国の前燕滅亡後に高句麗は北方の脅威がなくなり、広開土王・長寿王代、特に長寿王代に入ったこの30余年間は強盛を極め、百済は対高句麗戦で国力が消耗・枯渇しつつあることを訴える内容になっており、それまで通交関係がなかった中国北朝の北魏に遣使し、援助を求めた次第である。現実にも百済には高句麗の攻撃による首都南遷・国勢再建の危機が訪れ、倭国でも百済を始めとする朝鮮半島諸国の動向と自国の対外政策確立に目配りすることが必要になる。

2. 全羅南道の前方後円墳と百済

熊津時代の百済の南方経営に関連して、近年その存在が知られるようになった全羅南道の前方後円墳をめぐる学説の整理と倭国の関係如何を検討したい。前方後円墳に象徴される日本の古墳時代の始まりは3世紀中葉とされ(3世紀初に遡るとする意見もある)、前方後円形の古墳は日本独自のものと考えられてきた。しかし、1980年代になって韓国西南部の全羅南道の栄山江流域に前方後円墳が存することが判明し、日韓関係を考察する新たな材料が呈された【岡内三眞編1996、朝鮮学会編2002、北郷泰道他2006、朴天秀2007a、辻秀人2007、近藤浩一2008b、新井隆一2008など】。

栄山江流域では5世紀後半～6世紀前半の前方後円墳が13基見つかっている(表4)。その特色は、①栄山江流域を中心に分布しており、朝鮮半島のそれ以外の地には見られない、②1箇所密集しているのではなく、広く分散して分布する、③他の古墳とは離れ、孤立した位置にあるものが多い、④全長は33mの明花洞古墳から76mの海南長鼓山古墳までで、日本列島の前方後円墳に比べると小型である。しかし、百済武寧王陵は約20mの円墳で、その他の百済の王陵も20m前後の円墳であるから、同時期の百済の王陵を凌駕する大きさである、⑤造営プランは全体の統一的な規格はない、⑥主体部は概ね横穴式石室で(チャラボン古墳は竪穴式石室)、九州中・北部の古墳に類似している、⑦日本列島の前方後円墳のような造り出しは見られないが、段築・葺石や周壕は存するものがある、⑧副葬品の多くは百済的である、⑨大加耶系と目される副葬品を伴うものもある(明花洞古墳、新徳古墳)、⑩円筒形土器(埴輪形土製器)や盾形木製品などが出土しており、それらは倭的である、とまとめることができる。

その造営主体に関しては、大別して在地首長説【岡内三眞1996、土生田純之1996、田中俊明2001・2009、朴淳發2001・2003b、李暎澈2006、河承哲2006、辻秀人2007など】と倭人説があり、倭人説は倭からの移住者説と倭系百済官僚説【朱甫暎2000、西谷正2001、朴天秀2007a・2008など】に分かれている。倭からの移住者説には九州または倭王権からの勢力浸透を想定する説【東潮1995・2001、柳沢一男2008、李鎔賢2008、鈴木英夫2008など】と帰郷倭人説【林永珍1997・2000】、つまり朝鮮半島からの渡来人が前方後円墳築造技術を持ち帰ったとする考え方、そして在地人化しつつある倭人説【土生田

純之2008】の3説が存する。倭系百済官僚については次項で触れたいが、倭系百済官僚説は②③⑤⑥⑧の特色に留意して、熊津遷都後、しばらく自力で南方を治める力量が不足していた百済が、既存の秩序を崩すために在地的な基盤のない外部勢力である倭系百済官僚を徙民する方式をとり、かつ倭人同士の結合を警戒して分散的配置を行ったとするものである。但し、倭系百済官僚の生成時期(後述)との齟齬には疑問が呈されており【李鎔賢2008】、また倭系百済官僚は百済王権に臣従するものであるから、④の如き百済の王陵を凌ぐ大きさの前方後円墳を築き得た理由には不審も残る【土生田純之1996】。同様に、倭からの移住者説のうち前2説は他の考古学的痕跡が証明できず、やはり成立困難であるようである。

以上のように、栄山江流域の位置づけは当該期の百済と倭、そして当該地域との関係を理解する中核的論点になる。韓国の文献史学界では『日本書紀』神功49年(249+120→369)3月条(後掲史料04)の加耶地域7国平定の主体を百済と読み替え、既に近肖古王代の4世紀後半には全羅南道地域も百済の領有下にあったとする意見が有力である(註7)が、考古学的立場からは栄山江流域が完全に百済の文化圏に入るのは6世紀中葉以降のことで、問題の前方後円墳の時代はその最終的なせめぎ合いの様相を呈しているという見解も示されてきている【朴淳發2003a・b、徐賢珠2008、吉井秀夫2002・2005・2006など】。とすると、6世紀前半頃までは百済と一定の距離をおき、倭国内の諸勢力、特に九州中・北部の勢力、また大加耶とも提携する独自の勢力が存立していたことになり、上述のように、日本ではこれを5世紀に倭王が中国南朝の宋から除正された軍事権付託の範囲に登場する「慕韓」、即ち馬韓の残存勢力と関連づけようとする見解も呈されている【東潮1995、田中俊明2001・2009など】。こうした当該地域の歴史が前方後円墳築造に体现されているのであり、在地首長説呈示の論拠になる【林永珍2003、朴淳發2003bなど】。

慕韓(馬韓)がひとまとまりの政治勢力であったか否かは措くとしても(註8)、当該地域の歴史的な位置づけを解明するには、栄山江流域の独自性如何をさらに検討していくことが必要である【近藤浩一2008a】。高句麗広開土王の南下によって、倭国に鉄資源や陶質土器などを供給していた南部加耶の金官国が勢力を低下した後に、5世紀代には栄山江流域から陶質土器などの文物が倭国に齎されたことが判明しており、〈百済—栄山江流域—九州—倭王権〉という関係モデルも示されている【朴淳發2001】。つまり5世紀代の倭国はこうした小勢力の自立を支援していた、あるいは九州の勢力が独自に関係を結ぶことを容認していたが、次の6世紀になると、百済の領土拡大を外交的に承認する方策に転じ、ひいては百済の加耶諸国侵攻を支持せざるを得ない選択につながり、関係モデルは〈百済—倭王権〉へと変化するので、そこに大きな画期が生じると展望できる訳である。

3. 倭系百済官僚の生成

全羅南道の前方後円墳の造営主体のところから出てきた倭系百済官僚に関連して、南遷前後の百済と倭国の関係や倭系百済官僚の様態・成立について整理してみたい。

高句麗による漢城攻略の様子は『三国史記』百濟本紀蓋鹵王21年(475)9月条、文周王即位前紀、『日本書紀』雄略20年(476)冬条(分註に引用された「百濟記」には乙卯年(475)とある)などに描かれているが、この百濟南遷の契機となる事件を倭国は後日知ったようである。『日本書紀』雄略21年(477)3

月条には倭国が百濟復興を支援したかに記されているが、『三国史記』によると、百濟が救援を求めたのは新羅であり、5世紀後半になると、新羅も高句麗への従属から脱しようとし、北方では百濟、あるいは「加耶」（高靈、大加耶）と協力して、高句麗の南下に対抗しようとしている（『三国史記』新羅本紀訥祗麻立干39年（455）10月条、炤知麻立干3年（481）3月条、同6年（484）7月条、同16年（494）7月条、同17年（495）8月条、百濟本紀毗有王7年（433）8月条、東城王16年（494）7月条、同17年（495）8月条、『日本書紀』雄略8年（464）2月条など）。

上述のように、東城王は新羅と婚姻同盟を結んでおり、『三国史記』を中心とする韓国の研究では従来から説かれていたが、近年、日本でも5世紀後半の羅濟同盟を考慮に入れて、倭国と百濟の関係を再検討すべきことが提唱されている【熊谷公男2007、森公章2006など】。『三国史記』百濟本紀毗有王2年（428）2月条には「倭国使至、従者五十人。」とあり、これは『日本書紀』応神39年（308+120→428）2月条の新齊都媛（腆支王の妹）来帰記事と対応するものであるが、毗有王（在位427～455年）代の通交例はこれだけで、『日本書紀』は毗有王の存在を抹消しているため、当該期の倭と百濟の関係は必ずしも良好ではなかったようである。次の蓋鹵王代の状況も同様であり、『日本書紀』雄略5年（461）条に加須利君（蓋鹵王）が弟の軍君（昆支）を倭国に派遣したと記されているのは、こうした関係の改善を模索したものと解されよう。しかし、475年の百濟の危機に際して、倭国が即応した様子は見られない。

熊津遷都後の百濟に対して倭国が明確な支援を行ったのは、東城王即位時が初めてであり、三斤王死去に際して、倭国は昆支の第2子末多王に兵器を賜与、筑紫国の軍士500人を遣して衛送し、これを東城王として即位させたとある（『日本書紀』雄略23年（479）4月条）。上述の雄略21年3月条には熊津遷都時に文周王に支援を行ったかに記されているが、分註所引「日本旧記」が述べるように、これは末多王（東城王）代の支援を遡及させたものと考えられる。東城王は文周王代に内臣佐平になった王弟の昆支（477年死去）の子であった。蓋鹵王・文周王・昆支の関係、東城王の王統譜上の位置や昆支の倭国での滞在・百濟への帰国時期については、『日本書紀』と『三国史記』では懸隔があると思われるが、これは今後の検討課題としたい【坂元義種1978f、古川政司1981、山尾幸久1989、李根雨1997など】。

《2つの百濟王統譜》

（『三国史記』）

蓋鹵王 — 文周王
 — 昆支 — 東城王 — 武寧王

（『日本書紀』）

雄略5年条 — 蓋鹵王 — 武寧王
21年条 — 文周王
 — 昆支 — 東城王

武烈4年是歳条所引「百濟新撰」

『日本書紀』雄略23年是歳条にはまた、百濟からの調賦が常例よりも多かったため、筑紫の安致臣・

馬飼臣ら船師を派遣して高句麗と戦ったとある。この戦役は『三国史記』に対応記事を見出せず、不明であるが、この時に派遣された軍士は筑紫、即ち九州の兵力であり、東城王即位時の衛送とともに、倭国の外征軍編成の特色を示すものとして留意したい。次の6世紀代には百済では物部・科野・巨勢・紀臣・葦北君・久米・竹志など倭人の姓を持ちながら、百済の十六等官位を帯する者が散見し(『日本書紀』継体・欽明紀)、彼らは倭国や「任那日本府」との外交交渉に活躍しており、倭系百済官僚と称すべき存在であった(註9)。554年に百済聖明王が新羅に敗死した戦闘には、「東方領物部莫哥武連」が登場している(史料0-01)。『周書』百済伝によると、方領には達率(第2位)を起用すると記されており、『日本書紀』に見える倭系百済官僚は奈率(第6位)の例が多いが、上位に昇進する者もいたことが知られ、『隋書』百済伝に描かれた百済宮廷の融合的な構成が現出していくのである。

筑紫の豪族出身者を含むこうした倭系百済官僚登用の1つの起点は、この東城王即位時に存すると考えられる【朴天秀2007a】。また上述の榮山江流域の勢力の存在に関連して、百済が当該地域を完全に取り込んだ6世紀中葉の段階において、当地の勢力と提携していた倭人が倭系百済官僚になったとする見解も呈されている【熊谷公男2005】。倭系百済官僚が史料に登場するのは次の6世紀であり、加耶諸国への侵攻をめぐる百済と新羅の紛争に際して、彼らは百済からの使者として倭国に到来し、外交問題の協議に従事した。6世紀代に倭国と百済の関係が密接になるのは、儒教や仏教を始めとする先進文物を百済が提供したこととともに、この倭系百済官僚の存在が百済に対する倭国の信頼を醸成したことにも注目すべきであろう。

4. 加耶諸国の情勢と倭国・百済・新羅

東城王即位に伴う以上のような倭国の方策に対して、百済側は必ずしも倭国との関係一辺倒ではなく、東城王代にも新羅や南斉などと多元的な外交を構築しようとしており、倭国との関係もその1つに過ぎなかった。そして、倭国との関係に隔意があったのは、次の6世紀代に百済が新羅とその帰属をめぐる争うことになる加耶諸国との問題があったと考えられる。上述のように、479年には、加羅国王荷知が南斉に入貢しており、この「加羅国」は北部加耶地域の高霊(大加耶、伴跋)のことで、5世紀代には大加耶を中心に大加耶連盟とでも称すべき政治的結合が形成され(註10)、それを背景に中国南朝への入貢が実現したのである。

この北部加耶地域と倭国の関係を示すものとして、東城王代の出来事となる487年の帶山城事件を挙げたい。

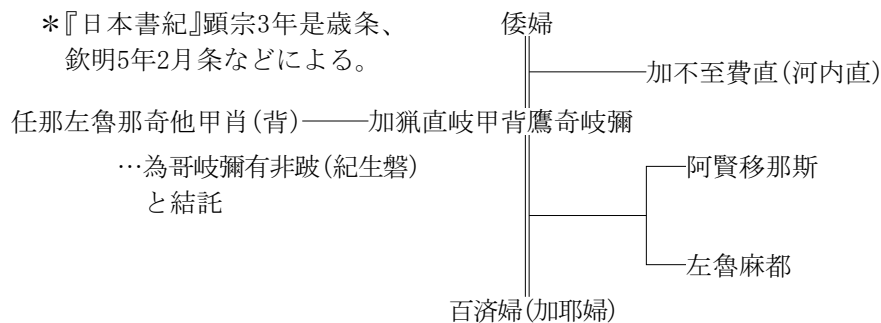
2-03『日本書紀』顕宗天皇3年(487)是歳条

紀生磐宿禰跨據任那、交通高麗、將西王三韓、整脩宮府、自稱神聖。用任那左魯那奇他甲肖等計殺百濟適莫爾解於爾林(爾林高麗地也)。築帶山城距守東道、斷運糧津令軍飢困。百濟王大怒遣領軍古爾解・内頭莫古解等、率衆趣干帶山攻。於是、生磐宿禰進軍逆擊、膽氣益壯、所向皆破、以一當百。俄而兵盡力竭、知事不濟、自任那歸。由是、百濟國殺佐魯那奇他甲肖等三百餘人。

ここに登場する紀生磐宿禰は『日本書紀』雄略9年(465)条で新羅征討のために派遣されたとある將軍の1人紀小弓宿禰の子紀大磐宿禰に比定される。父の兵馬・船官・諸小官を引き継ぐために大磐が渡海すると、將軍間に不和が生じ、この軍事は失敗に終わった。その後、大磐＝生磐は加耶地域と新羅との境界地帯に留まり、487年の帶山城事件で百濟人を殺害するのである(註11)。この事件には「任那左魯那奇他甲肖(背)」という加耶系の人物が関与しており、加耶の勢力が半島で活動する倭国の豪族と高句麗とを引き込んで、百濟の勢力を追い払おうとしたものだったと言えよう。百濟がこの地域に進出する契機としては、481年、484年に高句麗が新羅を攻撃した際に、「加耶」(大加耶)と連携して救援したことが想起され(『三国史記』新羅本紀炤知麻立干3年3月条、6年7月条)、今回の事件を口実に百濟は北部加耶地域制圧に動いたのである。

なお、この那奇他甲背は6世紀の加耶諸国をめぐる紛争の中で、百濟聖明王が非難した加耶系の河内直・移那斯・麻都らの祖と考えられ、百濟には加耶進出をめぐる、倭国と利害が齟齬するところもあったようである。那奇他甲背の有する「左魯」はその子孫である麻都も冠称としており、何らかの称号と考えられ、「甲背」はこれを冠する百濟人の存在が知られるので(『日本書紀』継体23年(529)3月是月条の麻那甲背、欽明2年(541)4月条の城方甲背味奴など)、百濟の称号と推定される。即ち、加耶人でありながら、百濟の称号を有し、百濟・倭、さらには新羅・高句麗とも関係を持ち、複雑な行動をとる勢力が存したことが知られ、当該期の国際関係を理解するには加耶地域の人々の主体的な選択の方向も考慮しなければならないことがわかる。

《任那左魯那奇他甲肖(背)の系譜》



2-04『日本書紀』神功49年(249+120→369+60→429カ)3月条

以荒田別・鹿我別爲將軍、則與久氏等共勒兵而度之、至卓淳國、將襲新羅。時或曰、兵衆少之、不可破新羅。更復奉上沙白盖盧、請增軍士。即命木羅斤資・沙沙奴跪(是二人不知其姓人也。但木羅斤資者、百濟將也)、領精兵與沙白盖盧共遣之、俱集于卓淳、擊新羅而破之。因以平定比自怵・南加羅・喙國・安羅・多羅・卓淳・加羅七國。仍移兵西廻至古爰津、屠南蠻忱彌多禮、以賜百濟。於是、其王肖古及王子貴須、亦領軍來會。時比利・辟中・布彌支・半古四邑自然降服。是以百濟王父子及荒田別・木羅斤資等、共會意流村(今云州流須祇)、相見欣感、厚禮送遣之。唯千熊長彦與百濟王、至于百濟國登辟支山盟之。復登古沙山、共居磐石上。時百濟王盟之曰、若藪草爲坐、恐見火燒。且取木爲坐、恐爲水流。故居磐石而盟者。示長遠之不朽者也。是以自今

以後、千秋萬歳、無絶無窮、常稱西蕃、春秋朝貢。則將千熊長彦、至都下厚加禮遇。亦副久氏等、而送之。

2-05『日本書紀』神功62年(262+120→382+60→442カ)条

新羅不朝。即年遣襲津彦擊新羅。〈百濟記云、壬午年、新羅不奉貴國。貴國遣沙至比跪令討之。新羅人莊飭美女二人、迎誘於津。沙至比跪受其美女、反伐加羅國。加羅國王己本旱岐及兒百久至・阿首至・國沙利・伊羅麻酒・爾汶至等、將其人民、來奔百濟。百濟厚遇之。加羅國王妹既殿至、向大倭啓云、天皇遣沙至比跪、以討新羅、而納新羅美女捨而不討、反滅我國。兄弟人民皆爲流沈、不任憂思。故以來啓。天皇大怒、既遣木羅斤資、領兵衆來集加羅、復其社稷。一云、沙至比跪知天皇怒、不敢公還、乃自竄伏。其妹有幸於皇宮者、比跪密遣使人問天皇怒解不。妹乃託夢言、今夜夢、見沙至比跪。天皇大怒云、比跪何敢來。妹以皇言報之。比跪知不免、入石穴而死也。〉

2-06『日本書紀』応神25年(294+120→414+60→474カ)条

百濟直支王薨。即子久爾辛立爲王。王年幼、木滿致執國政、與王母相姪、多行無禮。天皇聞而召之。〈百濟記云、木滿致者是木羅斤資討新羅時、娶其國婦而所生也。以其父功專於任那、來入我國往還貴國、承制天朝執我國政、權重當世。然天皇聞其暴召之。〉

2-07『日本書紀』雄略7年(463)是歳条

吉備上道臣田狹侍於殿側、盛稱稚媛於朋友曰、天下麗人莫若吾婦、茂矣綽矣、諸好備矣。曄矣温矣、種相足矣、鉛花弗御、蘭澤無加、曠世罕儔、當時獨秀者也。天皇傾耳、遥聽而心悅焉。便欲自求稚媛爲女御、拜田狹爲任那國司、俄而天皇幸稚媛。田狹臣娶稚媛而生兄君・弟君也。〈別本云、田狹臣婦名毛媛者、葛城襲津彦子、玉田宿禰之女也。天皇聞體貌閑麗、殺夫自幸焉。〉田狹既之任所聞天皇之幸其婦、思欲求援而入新羅。于時、新羅不事中國、天皇詔田狹臣子弟君與吉備海部直赤尾曰、汝宜往罰新羅。於是、西漢才伎歡因知利在側、乃進而奏曰、巧於奴者多在韓國、可召而使。天皇詔群臣曰、然則宜以歡因知利副弟君等、取道於百濟、并下勅書、令獻巧者。於是、弟君銜命、率衆行到百濟而入其國。國神化爲老女、忽然逢路。弟君就訪國之遠近。老女報言、復行一日而後可到。弟君自思路遠不伐而還。集聚百濟所貢今來才伎於大嶋中、託稱候風、淹留數月。任那國司田狹臣乃喜弟君不伐而還、密使人於百濟、戒弟君曰、汝之領項有何窄錮、而伐人乎。傳聞、天皇幸吾婦遂有兒息(兒息已見上文)。今恐、禍及於身可躡足待。吾兒汝者、跨據百濟、勿使通於日本。吾者據有任那、亦勿通於日本。弟君之婦樟媛、國家情深、君臣義切、忠踰白日、節冠青松。惡斯謀叛盜殺其夫、隱埋室內。乃與海部直赤尾將百濟所獻手末才伎在於大嶋。天皇聞弟君不在、遣日鷹吉士堅磐固安錢(堅磐、此云柯陀之波)使共復命。遂即安置於倭國吾砺廣津邑、而病死者衆(廣津、此云比盧岐頭)。由是、天皇詔大伴大連室屋、命東漢直掬、以新漢陶部高貴・鞍部堅貴・畫部因斯羅我・錦部定安那錦・譯語卯安那等遷居于上桃原・下桃原・眞神原三所。〈或本云、吉備臣弟君還自百濟、獻漢手人部・衣縫部・宍人部。〉

倭国と北部加耶地域との関係と言えば、史料04の卓淳を拠点とする倭・百濟による新羅攻撃計画とその顛末も注目される。ここでは戦果が卓淳を含む加耶地域7国平定と「南蛮」忧弥多礼(耽羅)の討伐

になっているが、卓淳が討伐対象になっていることは不審で、加耶諸国や耽羅が登場することから見て、6世紀代の百済の活動範囲が遡及されたもので、この記事自体は伝承的な内容と位置づけたい。但し、干支三運加算の紀年修正により【山尾幸久1989】、これが429年の出来事であるとすれば、この年には百済毗有王が適稽女郎を「質」として倭国に派遣しており(『日本書紀』雄略2年(458)7月条所引「百済新撰」に「己巳年」(429)の来朝と見える)、これを受けた倭国が百済とともに加耶諸国を攻撃したのは事実だと解することも可能である。

また史料05は倭国の中央有力豪族葛城氏の沙至比跪(葛城襲津彦か)と「加羅」(大加耶)との関係を窺わせる記事であるが、これも倭の北部加耶地域への進攻失敗を示すものとすれば【田中俊明2003】、451年の倭王済の称号の中に初めて「加羅」(大加耶)が登場することにつながる活動であった。そして、史料06には百済の直支王(腆支王)薨去後、久爾辛王(久尔辛王)即位後の出来事として、王が幼年であったため、木満致が国政を掌握し、王母と相姪して多くの無礼を行ったので、倭王はこれを召喚した旨の話が記されている。ここに登場する木満致は、475年に文周王とともに熊津に遷った木劬満致(『三国史記』百済本紀蓋鹵王21年(475)9月条)に比定され、これも干支三運を加算して年次を修正すべきである(註12)。

史料04・05では百済の木羅斤資の活動が特記されており、これらは木羅斤資—木満致父子が北部加耶地域に勢威を振った様子を伝えている。木(木劬)氏は百済大姓八族の1つで、大姓者には王・侯に封じられた例も見え(表2)、東城王代の百済再建は有力豪族による地方支配推進に支えられていたと言えよう。475年に百済が新羅に救援を要請しようとしたのは、北部加耶地域を介する木氏と新羅の接触があったためとも推測されるところである。その専制を非難された満致が倭国に到来し、倭国がそれを受け入れたのは、倭国には木氏が築いた北部加耶地域との関係を継承する企図があったためではないかと考えられる。

上述のように、南部加耶地域は5世紀の渡来人の出身地であり、また史料07の「任那国司」吉備上道臣田狭のような地方豪族の進出も行われていた。こうした加耶地域と倭国の諸勢力との様々なつながりは、百済と新羅が加耶諸国の争奪を展開する6世紀代において、倭国が先進文物や鉄資源の安定的確保を維持するために、朝鮮半島南部の動乱に関与せざるを得ない要因になるのである。但し、北部加耶地域に対する活動は葛城氏や紀氏(倭系百済官僚の氏姓にも見える)といった有力豪族独自の行動であった可能性もあり、南部加耶地域における吉備氏の活動ともども、こうした中央・地方の有力豪族を如何に統制するのかが、倭王権にとって依然として課題であったと言わねばならない

なお、『三国史記』新羅本紀炤知麻立干18年(496)2月条には「加耶国送白雉、尾長五尺。」とあり、新羅も大加耶との通交を試みていた。その新羅と倭国の関係については、『日本書紀』雄略9年(465)条に倭国の新羅攻撃が描かれており、敵対状況が伝えられている。但し、考古学的知見からは5世紀前半には新羅の金工技術が倭国に移入されていたとする指摘もあり【朴天秀2007b】、倭・新羅関係は必ずしも対立のみではなかったようである。しかし、『三国史記』の倭人関係記事を見ても(表5)、当該期の倭は新羅の領域を侵害する存在として位置づけられている。ここに登場する倭人・倭兵はこれを半島に所在したもの、あるいは加耶と置換して理解する説もある【三品彰英1962、井上秀雄1973】が、倭人・倭兵の行動に着目すると、城を攻略したという記述はあるものの、継続的な占領ではなく、また襲来時期

が海が穏やかな4～6月の春夏に集中するのは、日本列島から半島東海岸への到来を窺わせ、それらは加耶地域と交流し、鉄などの先進文物を得ていた西日本地域を中心とする諸豪族による行為と見るのがよいであろう【鈴木靖民1974、鈴木英夫1996b】。ちなみに、462、3年の大規模兵力襲来の記事は倭王権による出兵と位置づけることができ、6世紀代の加耶諸国をめぐる問題に対する倭国の介入の背景を考える手がかりになる。こうした5世紀代の様相から、倭国が新羅との関係をどのように構築していくのかも、次の6世紀の日韓関係を考察する上での研究課題の1つである。

(註1)その他、堀敏一『中国通史』(講談社、2000年)、西嶋定生「東アジア世界と冊封体制」(『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会、1983年)467頁補1などもこの説を支持している。

(註2)田中俊明『大加耶連盟の興亡と「任那」』(吉川弘文館、1992年)。

(註3)【石井正敏2005】は、同品内の各將軍号は同格であったと考え、宋が倭国に百済の軍事権を与えなかったのは、先行して百済に付与していたことが理由であって、將軍号の序列が問題とされた訳ではないと述べる。百済への先行付与を理由とする点はよいが、諸將軍号が同格であったとする点は支持し難い。

(註4)滝口宏監修、市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター編『「王賜」銘鉄剣概報』(吉川弘文館、1988年)、東野治之『日本古代金石文の研究』(岩波書店、2004年)、東京国立博物館『江田船山古墳出土国宝銀象嵌銘大刀』(吉川弘文館、1993年)など。

(註5)『葛城氏の実像』(樞原考古学研究所、2006年)。

(註6)西嶋定生『日本歴史の国際環境』(東京大学出版会、1985年)。

(註7)千寛宇「韓国史の潮流—三国時代(抄)」(『古代日本と朝鮮の基本問題』学生社、1974年)、金鉉球「「神功紀」の加羅七国平定記事に関する一考察」(『翔古論聚』久保哲三先生追討記念論文集刊行会、1993年)など。【鈴木英夫2008】も5世紀後半には百済が全羅南道を支配していたと見ている。

(註8)【山尾幸久2001】は慕韓を益山・金堤・扶安付近と見て、榮山江流域を慕韓に比定することに反対している。

(註9)李弘植「任那問題を中心とする欽明紀の整理—主要関係人物の研究—」(『青丘学叢』25、1936年)、笠井倭人「欽明朝における百済の対倭外交」(『古代の日朝関係と日本書紀』吉川弘文館、2000年)、金鉉球「日系百済官僚」(『大和政権の対外関係研究』吉川弘文館、1985年)など。なお、663年白村江戦で百済が完全に滅亡した後、倭国(→日本)に亡命した百済人には、『続日本紀』神亀元年(724)5月辛未条に物部・久米姓、宝字5年(761)3月庚子条に竹志・科野姓の者が見えており、彼ら倭系百済官僚は百済滅亡時まで百済に奉仕したことが知られる。

(註10)金泰植「五世紀前半大加耶発展に対する研究」(『韓国史論』12、1985年)、「六世紀前半加耶南部諸国の消滅過程考察」(『韓国古代史研究』1、1988年)、「六世紀中葉加耶連盟の滅亡過程」(『朝鮮学報』146、1993年)、「加耶史軽視論への批判」(『国立歴史民俗博物館研究報告』110、2001年)、田中俊明註(2)書など。

(註11)帶山城の比定地は全羅北道井邑郡泰仁(古名は大尸山)とするのが有力な説であるが、史料03の登場人物・地名から考えると、百済と新羅と加耶の境界付近で、かつ高句麗の領域とも近接する地

を想定した方がよいと思われる。

(註12)【大橋信彌1989】は史料06を久爾辛王即位前の満致の専断体制→429年毗有王即位による倭国への亡命→455年蓋鹵王即位後の帰国と475年文周王に従っての南遷としても年代に矛盾はないとし、毗有王代の倭・百済関係不調を満致の倭国への亡命によるものと見ている。しかし、満致の父木羅斤資の活躍時期から考えて、やはり年代的な整合性に欠けるところがあり、5世紀後半の人物と見るのがよいであろう。なお、木満致を蘇我氏の祖の1人である蘇我満智宿禰に比定する説(門脇禎二『蘇我蝦夷・入鹿』[吉川弘文館、1977年]など)は、現在では殆ど否定されている。

《表1 倭国と中国南朝との通交》

413年	高句麗王高璉、東晋に入貢→使持節都督營州諸軍事征東將軍高句麗王樂浪公となす [宋書高句麗伝] 倭国も入貢するという[『晋書』安帝紀、『太平御覽』卷981香部1麝条所引義熙起居注]
421年	倭讚、宋に入貢→除授あり[伝]
425年	倭王讚、司馬曹達を遣し、宋に入貢[伝]
430年正月	倭国王、宋に入貢[紀]
438年4月	倭王珍、宋に入貢。自称「使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍倭国王」→除正「安東將軍倭国王」、倭隋ら13人の平西・征虜・冠軍・輔国將軍号の除正を求める[伝]
443年	高句麗・百済、宋に入貢[紀] 倭王済、宋に入貢→除正「安東將軍倭国王」[紀・伝]
451年10月	高句麗、宋に入貢[紀]
○	倭王済、宋に入貢→加除「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事」、23人の軍・郡を除正[伝]
462年3月	高句麗、北魏に入貢[紀] 倭王世子興、宋に入貢→除正「安東將軍倭国王」[紀・伝]
477年2月・9月	高句麗、北魏に入貢[紀]
11月	倭国、宋に入貢[紀]
478年5月	倭王武、宋に入貢し、上表。自称「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大將軍倭国王」、「竊自仮開府儀同三司、其余咸仮授」→除正「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍倭王」[紀・伝]
12月	高句麗、宋に入貢[紀]
479年○	加羅国王荷知、南斉に入貢→輔国將軍本国王となす[伝] 南斉、高句麗王樂浪公高璉の使持節散騎常侍都督營平二州諸軍事車騎大將軍開府儀同三司を驃騎大將軍に進号[伝] 南斉、倭王武を鎮東大將軍に進号[伝]
502年4月	梁、高句麗王高雲を車騎大將軍、百済王余大を征東大將軍、倭王武を征東將軍に進号[紀]

※出典を注記したもの以外は、当該の中国史書で、[紀]は本紀、[伝]は当該国の伝を示す。朝鮮半島諸国の入貢記事は同年の入貢があるもののみを参考のために掲げた。

《表2 百濟王配下の王・侯と府官》

久爾辛王5年(景平2=424)〔『宋書』百濟伝〕

長史 張威

毗有王24年(元嘉27=450)〔『宋書』百濟伝〕

臺使 馮野夫→西河太守

蓋鹵王4年(大明2=458)〔『宋書』百濟伝〕

行冠軍將軍右賢王 余紀→冠軍將軍

行征虜將軍左賢王 余昆→征虜將軍

行征虜將軍 余暈→征虜將軍

行輔國將軍 余都→輔國將軍

行輔國將軍 余久→輔國將軍

行龍驤將軍 沐衿→龍驤將軍

行龍驤將軍 余爵→龍驤將軍

行寧朔將軍 余流→寧朔將軍

行寧朔將軍 糜貴→寧朔將軍

行建武將軍 于西→建武將軍

行建武將軍 余婁→建武將軍

蓋鹵王18年(延興2=472)〔『魏書』百濟伝〕

冠軍將軍駙馬都尉弗斯侯長史 余礼

龍驤將軍帶方太守司馬 張茂

東城王8年(永明8=490)〔『南齊書』百濟伝〕

寧朔將軍面中王 姐瑾〔→〕行冠軍將軍都將軍都漢王→冠軍將軍都將軍

建威將軍八中侯 余古〔→〕行寧朔將軍阿錯王→寧朔將軍

建歷將軍 余歷〔→〕行龍驤將軍邁盧王→龍驤將軍

廣武將軍 余固〔→〕行建威將軍弗斯侯→建威將軍

行建威將軍廣陽太守兼長史 高達→建威將軍廣陽太守

行建威將軍朝鮮太守兼司馬 楊茂→建威將軍朝鮮太守

行宣威將軍兼參軍 会邁→宣威將軍

東城王17年(建武2=495)〔『南齊書』百濟伝〕

行征虜將軍邁羅王 沙法名→征虜將軍

行安國將軍辟中王 贊首流→安國將軍

行武威將軍弗中侯 解礼昆→武威將軍

行廣威將軍面中侯 木干那→廣威將軍

行龍驤將軍樂浪太守兼長史 慕遺→龍驤將軍

行建武將軍城陽太守兼司馬 王茂→建武將軍

兼參軍行振武將軍朝鮮太守 張塞→振武將軍

行揚武將軍 陳明→揚武將軍

※[→]・「行」は仮授、→は除正を示す

《表3 宋の將軍号官品表》

第一品	大將軍／諸位從公
第二品	特進／驃騎將軍／車騎將軍／衛將軍／諸大將軍／諸持節都督
第三品	侍中／散騎常侍／四征將軍／四鎮將軍／中軍將軍／鎮軍將軍／撫軍將軍／四安將軍／四平將軍／左・右將軍／前・後將軍／征虜將軍／冠軍將軍／輔國將軍／龍驤將軍／光祿大夫／領護軍／県侯
第四品	二衛將軍／驍騎將軍／遊擊將軍／四軍將軍／左・右中郎將／五校尉／寧湖將軍／五威將軍／五武將軍／四中郎將／刺史領兵者／戎蛮校尉／郷侯
第五品	散騎侍郎／謁者僕射／三將／積射將軍／疆弩將軍／鷹揚將軍／折衝將軍／輕車將軍／揚烈將軍／威遠將軍／寧遠將軍／虎威將軍／材官將軍／伏波將軍／凌江將軍／刺史不領兵者／郡國太守内史相／亭侯

《表4 韓国の前方後円墳》

七岩里古墳(B)…全羅北道高敞郡孔音面七岩里淵洞村東側

全長55m、後円部直径38.4m、高さ10.3m、前方部30.8m、高さ5.7m。段築ありカ。

月溪古墳(月桂古墳)(B)…靈光郡法聖面月山里月溪村

全長41.2m、後円部直径22.5m、高さ6m、前方部長さ18.7m、幅15.5m、高さ2.5m。百濟系筒形器台出土。

月城山古墳(古城里古墳)…潭陽郡水北面古城里月城山

楕円形で長軸は24m。前方後円墳であるか否か？。

月田古墳(?)…潭陽郡古西面聲月里月田

全長45m、高さ2.3m。陶質土器出土。

月桂洞1号墳(B)…光州広域市光山区月桂洞748

全長45.3m、後円部直径25.8m、高さ6.1m、前方部幅31.4m、高さ5.2m。

段築ありカ。周壕あり(円筒形土器、石見型盾形埴輪形の木製品、笠形木製品出土)。

石室から百濟系土器出土。

月桂洞2号墳(B)…光州広域市光山区月桂洞748

全長34.5m、後円部直径20.5m、高さ3.5m、前方部幅約22m、高さ約3m。

段築ありカ。周壕あり。

長鼓山古墳(A)…咸平郡咸平邑長年里長鼓山

全長約70m、後円部直径36～39m、高さ3.5～8m、前方部幅約37m、高さ約7m。

新徳古墳(新徳1号墳)(A)…咸平郡月也面礼德里新徳山176～178

全長51m、後円部直径30m、高さ5m、前方部幅25m、高さ4m。

葺石あり。墳丘周囲に溝がめぐる(石室羨道部前端では途切れる)。

装飾木棺・装身具は百済産か。大加耶系の伏鉢付冑出土。

明花洞古墳(B)…光州広域市光山区明花洞170-5

全長33m(後円部・前方部ともに大きく変形され、本来の墳丘の姿を失う)。

段築あり。周壕あり(円筒形土器出土)。

石室から大加耶様式の蓋、百済系筒形器台出土。

杓山1号墳(馬山里1号墳) [B]…咸平郡鶴橋面馬山里杓山

全長46m、後円部直径25m、前方部幅26m。

チャラボン古墳[?]…霊岩郡始終面泰潤里立石

長軸35.6m、後円部長軸23.3m、短軸20.2m、高さ5m、前方部長さ12.2m、

幅7.4m、高さ2.25m。竪穴式石室。

マルムドム古墳(龍頭里古墳) [A]…海南郡三山面昌里龍頭578

全長40.5m、後円部直径23m、高さ5.1m、前方部長さ19m、幅16.7m、高さ3.5m。

海南長鼓峰古墳(海南長鼓山古墳、新芳古墳) [A]…海南郡北日面方山里

全長約76m、後円部直径43m、高さ10m、前方部幅37m、高さ9m。

※A・Bは【辻秀人2007】による区分。A…後円部墳頂に比較的広く、明瞭な平坦面を持つ。共通の設計といった細部までが一致する様相はない。古墳築造にあたって、築造主体者が自らの持つ情報や政治的な関係の下に、必要に応じて古墳築造に関わる技術者を受け入れながら墳丘や埋葬施設を作り上げた。B…後円部墳頂に明確な平坦面を持たない。墳丘構造の共通性が明瞭で、かつ類似度が高い。地域の中に前方後円墳のあり方のモデルが共有されていた。

《表5 『三国史記』新羅本紀の5世紀の倭人侵入記事》

431年(訥祗麻立干15)4月	倭兵が東辺を侵し、明活城を囲む
440年(訥祗麻立干24)	倭人が南辺を侵し、生口を掠取 6月にまた東辺を侵す
444年(訥祗麻立干28)4月	倭兵が金城を囲むこと10日
459年(慈悲麻立干2)4月	倭人、兵船百余艘で東辺を襲い、月城を囲む
462年(慈悲麻立干5)5月	倭人が活開城を破り、1000人を虜として去る
463年(慈悲麻立干6)2月	倭人が歆良城を侵すも、克たずして去る
476年(慈悲麻立干19)6月	倭人が東辺を侵す
477年(慈悲麻立干20)5月	倭人、兵を挙げて、五道に来侵す
428年(炤知麻立干4)5月	倭人、辺を侵す
486年(炤知麻立干8)4月	倭人、辺を犯す
479年(炤知麻立干19)4月	倭人、辺を犯す
500年(炤知麻立干22)4月	倭人、長峯鎮を攻め陥す

引用文献一覧

- 東潮1995「栄山江流域と慕韓」『展望考古学』考古学研究会
- 東潮2001「倭と栄山江流域—倭韓の前方後円墳をめぐって—」『朝鮮学報』179→『前方後円墳と古代日朝関係』同成社、2002
- 新井隆一2008「古代九州の古墳文化と韓国の前方後円墳」関係論文(日本語文)目録(稿)『古代日本の異文化交流』勉誠出版
- 石井正敏2005「5世紀の日韓関係—倭の五王と高句麗・百濟—」『日韓歴史共同研究報告書』第1分科篇、日韓歴史共同研究委員会
- 池田温2002「義熙九年倭国献方物をめぐって」『東アジアの文化交流史』吉川弘文館
- 井上秀雄1973「古代日本のいわゆる南朝鮮経営」『任那日本府と倭』東出版寧楽社
- 井上直樹2007「集安出土文字資料からみた高句麗の支配体制についての一考察」『朝鮮学報』203
- 内田清1996「百濟・倭の上表文の原典について」『東アジアの古代文化』86
- 大橋信弥1989「百濟における木笏満致専制体制の成立」『立命館文学』514→『日本古代の王権と氏族』吉川弘文館、1996
- 岡内三眞編『韓国の前方後円形古墳』雄山閣出版、1996
- 河承哲2006「五～六世紀における加耶地域の倭系遺物と遺構」『海を渡った日本文化』鉾脈社
- 亀田修一1997「考古学から見た吉備の渡来人」武田幸男編『朝鮮社会の史的展開と東アジア』山川出版社
- 川崎晃2001「倭王権と五世紀の東アジア」『古代国家の政治と外交』吉川弘文館
- 川本芳昭1992「倭国の413年東晋遣使」『新版古代の日本』2、角川書店
- 熊谷公男2005「いわゆる「任那四県割讓」の再検討」『東北学院大学論集』29
- 熊谷公男2007「五世紀の倭・百濟関係と羅濟同盟」東北学院大学『アジア文化史研究』7
- 高寛敏1997「倭の五王と朝鮮」『古代朝鮮諸国と倭国』雄山閣出版
- 河内春人2003「倭王武の上表文と文字表記」『国史学』181
- 近藤浩一2008a「栄山江流域慕韓説の研究史的検討」『古代日本の異文化交流』勉誠出版
- 近藤浩一2008b「韓国栄山江流域 古代史関係文献目録(稿)」『古代日本の異文化交流』勉誠出版
- 坂元義種1978a「五世紀の日本と朝鮮」『古代東アジアの日本と朝鮮』吉川弘文館
- 坂元義種1978b「五世紀における倭国王の称号について」『古代東アジアの日本と朝鮮』吉川弘文館
- 坂元義種1978c「五世紀の日本と朝鮮の国際環境—中国南朝と河南王・河西王・宕昌王・武都王—」『古代東アジアの日本の朝鮮』吉川弘文館
- 坂元義種1978d「五世紀の〈百濟大王〉とその王・侯」『古代東アジアの日本と朝鮮』吉川弘文館
- 坂元義種1978e「古代東アジアの日本と朝鮮」『古代東アジアの日本と朝鮮』吉川弘文館
- 坂元義種1978f「中国史書における百濟王関係記事の検討」『百濟史の研究』塙書房
- 坂元義種1981『倭の五王』教育社
- 朱甫暉2000「百濟の栄山江流域支配方式と前方後円墳被葬者の性格」『韓国の前方後円墳』忠南大

学校出版部

- 徐賢珠2008「栄山江流域における古墳文化の変遷と百済」『百済と倭国』高志書院
- 鈴木英夫1996a「倭王武の対宋外交の一側面—昇明元年の遣使の倭王をめぐる—」『古代の倭国と朝鮮諸国』青木書店
- 鈴木英夫1996b「『三国史記』の倭関係記事」『古代の倭国と朝鮮諸国』青木書店
- 鈴木英夫2008「韓国の前方後円墳と倭の史的動向」『古代日本の異文化交流』勉誠出版
- 鈴木靖民1974「いわゆる任那日本府および倭問題」『歴史学研究』405
- 鈴木靖民1985「倭の五王の外交と内政」林陸朗先生還暦記念会編『日本古代の政治と制度』続群書類従完成会
- 武田幸男1989「牟婁婁一族と高句麗王権」『高句麗史と東アジア』岩波書店
- 田中俊明2001「韓国の前方後円形古墳の被葬者・造墓集団に対する私見」『朝鮮学報』179→『前方後円墳と古代日朝関係』同成社、2002
- 田中俊明2003「倭の五王と朝鮮」姜徳相先生古稀・退職記念『日韓関係史論集』新幹社
- 田中俊明2009『古代の日本と加耶』山川出版社
- 田中史生2005「武の上表文」『文字と古代日本』第2巻、吉川弘文館
- 朝鮮学会編2002『前方後円墳と古代日朝関係』同成社
- 辻秀人2007「栄山江流域の前方後円墳と倭国周縁域の前方後円墳」東北学院大学『歴史と文化』42
- 西谷正2001「韓国の前方後円墳をめぐる諸問題」『朝鮮学報』179→『前方後円墳と古代日朝関係』同成社、2002
- 土生田純之1996「朝鮮半島の前方後円墳」専修大学人文科学研究所『人文科学年報』26→『古墳時代の政治と社会』吉川弘文館、2006
- 土生田純之2008「前方後円墳をめぐる韓と倭」『古代日本の異文化交流』勉誠出版
- 古川政司1981「五世紀後半の百済政権と倭」『立命館文学』433・434
- 朴淳發2001「栄山江流域における前方後円墳の意義」『朝鮮学報』179→『前方後円墳と古代日朝関係』同成社、2002
- 朴淳發2003a『百済国家形成過程の研究』六一書房
- 朴淳發2003b「百済の南遷と倭」『検証古代日本と百済』大巧社
- 朴天秀2007a『加耶と倭 韓半島と日本列島の考古学』講談社
- 朴天秀2007b「5～6世紀金工品の系譜と移入の背景」『日韓交流展 王者の装い』宮崎県立西都原考古博物館
- 朴天秀2008「栄山江流域における前方後円墳からみた古代の韓半島と日本列島」『古代日本の異文化交流』勉誠出版
- 北郷泰道他2006『海を渡った日本文化』鉾脈社
- 前之園亮一2001「倭の五王の通宋の開始と終焉について」『古代国家の政治と外交』吉川弘文館
- 三品彰英1962『日本書紀朝鮮関係記事考證』上巻、吉川弘文館→天山舎、2002
- 森公章2006『東アジアの動乱と倭国』吉川弘文館

- 柳沢一男2008「韓国の前方後円墳と九州」『古代日本の異文化交流』勉誠出版
- 山尾幸久1989『古代の日朝関係』塙書房
- 山尾幸久2001「五・六世紀の日朝関係—韓国の前方後円墳の一解釈—」『朝鮮学報』179→『前方後円墳と古代日朝関係』同成社、2002
- 吉井秀夫2002「朝鮮の墳墓と日本の古墳文化」『日本の時代史』2、吉川弘文館
- 吉井秀夫2005「朝鮮半島西南部における古代国家形成過程の諸問題」『国家形成の比較研究』学生社
- 吉井秀夫2006「考古学から見る百済の国家形成とアンデンティティ」『東アジア古代国家論』すいれん舎
- 李永植1993「五世紀の倭王の称号の解釈をめぐる一視角」『加耶諸国と任那日本府』吉川弘文館
- 李暎澈2006「前方後円形古墳と墳周土器」『海を渡った日本文化』鉾脈社
- 李根雨1997「「百済新撰」と昆支」『古代の日本と渡来の文化』学生社
- 李文基2003「百済内朝制度試論」『学習院史学』41
- 李鎔賢2008「韓国古代における全羅道と百済、加耶、倭」『古代日本の異文化交流』勉誠出版
- 林永珍1997「湖南地域石室墳と百済の関係」『湖南考古学の諸問題』(第21回韓国考古学会発表要旨)、韓国考古学会
- 林永珍2000「栄山江流域の石室封土墳の性格」『栄山江流域古代社会の新照明』歴史文化学会・全羅南道
- 林永珍2003「百済の成長と馬韓勢力、そして倭」『検証古代日本と百済』大巧社

第3章 6世紀の日韓関係

第1節 加耶諸国をめぐる百済・新羅の紛争と倭国

6世紀になると、百済では501年に武寧王が即位し(在位501～523年)、その23年間に及ぶ治世は、熊津時代の百済に安定を齎すものであった。倭国でも5世紀以来の倭の五王の系譜を引く王統に男子が途絶し、その出自には王族説と地方豪族説があつて確言できないが、北近江・越を本拠とし、近江・尾張や河内などの豪族との婚姻関係を勢力基盤として、「誉田天皇(応神)五世孫」と称する男大迹王(継体天皇)が、507年に倭王権の大王に就任している(在位507～531年)。継体も25年の治世を有し、新たな倭国の安定・方向付けに尽力しており、倭国・百済ともに新しい世紀を新たな形で迎える(註1)。

475年高句麗による漢城陥落後、熊津、さらに538年には扶余への遷都と、南遷して国家の維持と南方・東方への新領土拡大を企図する百済は、同じく北方を高句麗に押さえられていたため、南方・西方への発展を目指す新羅との間に、加耶諸国の争奪戦を展開し、倭国は基本的に百済支持の立場でこの紛争に介入していくことになる。ここでは562年大加耶などの滅亡に帰着する新羅による加耶諸国併呑までの過程と倭国・朝鮮半島諸国の関係、また「任那日本府」をめぐる議論などを整理し、6世紀の日韓関係を考える糸口としたい。

1. 百済の己汶・帶沙侵攻と倭国

加耶諸国をめぐる紛争の前半段階、百済と新羅の加耶諸国への侵攻開始と両国が安羅を挟んで直接対峙するに至る530年頃までの過程を整理すると、表1のようになる。百済の加耶諸国への侵攻は『三国史記』には史料がなく、百済系史料に依拠した『日本書紀』に記述されている。今日、この前半段階が表1のように理解されるようになったのは、錯綜していた『日本書紀』の関係記事読解が進展したことが大きい。中でも伴跋＝大加耶(高霊)説が確立され、内陸部の大邱に比定されていた卓淳を金官国と安羅の中間にあたる沿岸部に位置するという見方が呈されて、これらを基軸として、大加耶連盟や安羅など加耶諸国の動向を中心とする視点から、関係記事を正確に理解することが可能になったのは、大きな研究成果を導き出す原動力であったと言える(註2)。

以下、表1を補足する形で、関係史料に触れながら、百済・新羅の加耶諸国への侵攻と倭国の関与のあり方を検討していきたいが、まずは所謂「任那四県割讓」が一連の紛争に関わる意味合いを考えることから始めたい。

3-01『日本書紀』継体3年(509)2月条

遣使于百済(百済本記云、久羅麻致支彌從日本來、未詳)、括出在任那日本縣邑百済百姓浮逃絶貫三四世者並遷百済附貫也。

3-02『日本書紀』継体6年(512)4月丙寅条

遣穗積臣押山使於百済。仍賜筑紫國馬卅匹。

3-03『日本書紀』継体6年12月条

百済遣使貢調。別表請任那國上哆唎・下哆唎・娑陀・牟婁四縣。哆唎國守穗積臣押山奏曰、此四縣連連百済、遠隔日本、旦暮易通、鷄犬難別。今賜百済合爲同國、固存之策無以過此。然縱賜合國、後世猶危、況爲異場幾年能守。大伴大連金村具得是言、同謨而奏。迺以物部大連鹿火充宣勅使。物部大連方欲發向難波館宣勅於百済客。(中略)於是、或有流言曰、大伴大連與哆唎國守穗積臣押山受百済之賂矣。

3-04『日本書紀』欽明元年(540)9月己卯条

幸難波祝津宮。大伴大連金村・許勢臣稻持・物部大連尾與等從焉。天皇問諸臣曰、幾許軍卒伐得新羅。物部大連尾與等奏曰、少許軍卒不可易征。曩者男大迹天皇六年、百済遣使表請任那上哆唎・下哆唎・娑陀・牟婁四縣、大伴大連金村輒依表請許賜所求。由是新羅怨曠積年、不可輕爾而伐。於是、大伴大連金村居住吉宅、稱疾不朝。天皇遣青海夫人勾子、慰問慇懃。大連怖謝曰、臣所疾者非餘事也。今諸臣等謂臣滅任那。故恐怖不朝耳。乃以鞍馬贈使厚相資敬。青海夫人依實顯奏。詔曰、久竭忠誠、莫恤衆口。遂不爲罪、優寵彌深。

本件では「哆唎国守」穗積臣押山が大きな役割を果たしており、彼は「四県」の現状分析を示し、百済への付与を方向づけている(史料03)。この押山の百済寄りの姿勢に着目し、「国守」を管轄領域を有する常駐の地方官と見る立場から、そうした倭国の領域が当該地域に存したことを疑問視し、押山は倭系

百済官僚であって、当該地域も百済の領域であったとする意見が呈されている【金鉉球1985a、李弘植1936】。またこの「四県」の所在地に関しては、これを全羅南道全域に比定する説【末松保和1949】と己汶・帶沙に接する全羅南道東南部地域に比定する見解が示されており【全榮來1985】、また近年の榮山江流域における前方後円墳の存在に関連して、当該地域に比定する説（上哆唎＝靈巖、下哆唎＝光州、娑陀＝咸平・茂長、牟婁＝靈光・務安）も呈されている【田中俊明2009】。ともかくも「四県割讓」により百済は加耶諸国と領土を接することになり、これが次なる目標としての加耶諸国への侵攻の端緒になったことはまちがいない。

史料01は『日本書紀』の中では史料03の百済による「四県」要求の前提となる記事として掲げられている。「任那日本県邑」の正確な所在地は不明であり、勿論倭国が加耶地域を領土的に保有していた事実はないので、その点は措かねばならないが、ここでは百済人が加耶地域に居住しており、既に3・4世代の者もいたとあるので、その居住はかなり以前から行われていた点に注目したい（註3）。こうした交錯した居住形態が百済に住民保護などを口実に加耶地域に進出する糸口を与えるものとなり、ここに百済、そして新羅の加耶諸国への侵攻、争奪戦が大きな問題になる訳である。

倭国の地方官である「国司」の古訓はクニミトモチといい、古くは「国宰」と表記された。この「宰」については、『日本書紀』敏達6年（577）5月丁丑条分註に、「王人奉命為使三韓、自稱為宰。言宰於韓、蓋古之典乎。」、『積日本紀』卷11・述義7に「令持天皇御言之人也。故称美古止毛知。」とあるから、元来は使者を意味するものに他ならなかった。一定範囲の管轄領域を有する国宰の制度が成立するのは、国内統治の場合でも7世紀後半の天武朝頃であり、それ以前は時々の任務を持って地方に派遣されるミトモチの形態をとっていた（註4）。したがって押山の活動は、基本的には百済に派遣された倭国の使者の行動として説明可能であり、百済が要求する南部加耶地域への進出に黙認を伝える役割を果していると解することができる。

そして、この「四県割讓」が約30年後の史料04で蒸し返され、加耶諸国の混乱の発端になったと非難されているのは、第2章で触れたように、5世紀代には全羅南道の榮山江流域や加耶諸国ともつながりを有し、これらの小勢力の自立を支持していた倭国が、ここに至って百済の領土拡大を外交的に承認する方策に転じた点にある。これは百済の加耶諸国侵攻を支持せざるを得ない方向につながり、倭国の外交政策や半島情勢の転換点になる決断となった【熊谷公男2005】。

次に百済の己汶・帶沙への侵攻とその経緯を整理したい。『日本書紀』継体23年（529）3月条・是月条に描かれた多沙津をめぐる問題に登場する「下哆唎国守」穗積臣押山や物部伊勢連父根は、513～515年の己汶・帶沙問題（史料05～07、『日本書紀』継体7年（513）11月是月条、同9年2月丁丑条・是月条、同年4月条、同10年5月条）で活躍する穂積臣押山と物部至至連と同じであり、これらは同一の出来事を述べたもので、継体23年3月是月条はその後の顛末も含めて一括してこの年に懸けた記事と見ることができるので【田中俊明1992】、己汶・帶沙問題自体は513～515年頃の事件と解される。521年百済が中国南朝の梁に遣使したことに関わる『梁職貢図』百済条には、百済に附庸している「旁小国」の中に「上己文」が挙げられている。「旁小国」には実際には附庸関係にはなかったと思われる叛波＝伴跛国＝大加耶などの加耶諸国の国名や斯羅＝新羅も見えており、これは百済の主張を示したものと考えねばならないが、522年に加耶（大加耶）王は新羅と婚姻同盟を結んでおり（『三国史記』新羅本紀法興王

9年3月条)、これは百済に対抗する活路を求めた方策であったと解せられる。したがって己汶、そして帶沙に関しては、521年頃には百済の勢力下にあったと推測される。なお、529年には「加羅」=大加耶と新羅の対立が顕在化し(『日本書紀』継体23年3月是月条)、婚姻同盟が解消されるという流れを押さえることもできる(註5)。

3-05『日本書紀』継体7年(513)6月条

百済遣姐彌文貴將軍・洲利即爾將軍、副穗積臣押山(百濟本記云、委意斯移麻岐彌)、貢五經博士段楊爾。別奏云、伴跋國略奪臣國己汶之地。伏請、天恩判還本屬。

3-06『日本書紀』継体7年11月乙卯条

於朝廷引列百濟姐彌文貴將軍、斯羅汶得至、安羅辛已奚及賁巴委佐、伴跋既殿奚及竹汶至等、奉宣恩勅、以己汶・帶沙賜百濟國。

3-07『日本書紀』継体8年(514)3月条

伴跋築城於子吞帶沙、而連滿奚、置烽候邸閣、以備日本。得築城於爾列比・麻須比、而緇麻且奚・推封、聚士卒兵器以逼新羅、駭略子女剝掠村邑。凶勢所加、罕有遺類、夫暴虐奢侈、惱害侵凌、誅殺尤多、不可詳載。

さて、513年に己汶・帶沙問題が発生すると、11月に倭国で関係国を集めた会議が開催された(史料06)。朝鮮半島諸国からは百済、新羅、安羅、伴跋が参加し、倭国は勿論百済の己汶・帶沙領有を認めようとする。伴跋国=大加耶は珍宝を倭国に献上し、大加耶連盟による己汶・帶沙の維持を求めたが、倭国はそれを顧慮しようとはしなかった(『日本書紀』継体7年11月是月条)。そこで、514年になると、伴跋国は武力による抵抗に出る。史料07は百済系史料に依拠した記事と考えられ、「以備日本」とあるのは、本件の流れから見て、百済の侵攻に対処したものと訂正して理解すべきであろう。

同時に新羅への対処が記されているのは、新羅もこの頃から加耶諸国に攻勢をかけていたことを窺わせ、倭国での会議に新羅が参加したのは、東方から加耶諸国に侵攻する新羅の立場を主張するためであり、また百済の侵攻が国際的にどのように評されるのかにも関心があったのでであろう。その後の顛末としては倭国は使者と舟師500を送り百済を援助したが、伴跋国の軍勢力も強力で、戦線は膠着し、結局は百済が倭国の使者抑留救出を名目に大々的に出兵、己汶・帶沙領有問題に決着をつけ、大加耶連盟は己汶・帶沙を失うことになる(『日本書紀』継体9年(515)2月丁丑条・是月条、同年4月条、同10年5月条、同23年3月条・是月条)。

倭国での会議出席国のうち、安羅は南部加耶諸国の中心国の1つであり、百済・新羅の侵攻が進めば、いずれその存在が焦点になる位置にあったから、この問題には利害を有し、また5世紀代に倭国に到来した有力な渡来系氏族東漢氏は安羅出身と考えられ、安羅は倭国とも深いつながりを持つ国である。伴跋=大加耶に関しても、第2章第2節第4項で触れたように、5世紀後半頃から倭国の朝廷から派遣された者、あるいは倭国の諸豪族が加耶地域で活動していた様子が看取されるので、倭国と様々なつながりを有していたと思われる。したがって倭国にはいくつかの選択肢があった筈であり、伴跋も倭国の支持を期待しており、会議の場として倭国の存在が意味を持ったのも、以上の朝鮮半島諸国と倭国

の関係によるものであった。

しかし、倭国の朝廷は百済の加耶諸国への侵攻を大いに助力し、多元的外交の可能性を自ら否定したことになる。その理由として、本件に決着がついた516年9月、百済使が五経博士高安茂を派遣し、段楊爾と交替させたことに注目してみたい(『日本書紀』継体10年9月条)。五経博士段楊爾の着任は513年で(史料05)、これも「任那四県」領有承認に対する百済の謝意を示すものであった。即ち、倭国は百済の加耶諸国への侵攻を承認したり、直接的な軍事援助を行ったりする見返りとして、百済から先進文物や人材などの文化的享受を得て、国内支配の維持・発展に供することができたのである(註6)。こうした供与は中国南朝と定期的な通交がない加耶諸国には無理であり、ここに百済支持の基本的政策をとる倭国の立場の所以が存した。また第2章第2節第3項で触れたように、百済は倭国との通交に倭系百済官僚を起用しており(『日本書紀』継体10年(515)9月戊寅条が初見)、これも倭国の百済に対する信頼感醸成に有効であった【李弘植1936、金鉉球1985a、笠井倭人1964】。

2. 金官国の興亡と倭国

ところで、513年の倭国での会議には、南部加耶諸国のもう一つの有力国である金官国(大駕洛、意富加羅、南加羅)が姿を見せていないのは何故であろうか。522年の大加耶と新羅の婚姻同盟成立の後、『三国史記』新羅本紀法興王11年(524)9月条には「王出巡南境拓地。加耶国王来会。」とあり、新羅王と大加耶の国王が会同している。この「南境拓地」は東方の大加耶連盟との提携・関係安定を得た新羅の金官国に対する第1次侵攻を示すものと考えられ、当時の金官国は東方から加耶諸国への侵攻を因る新羅の標的とされ、危地にあつたのである。これは同19年(532)条に「金官国主金仇亥與王妃及三子、長曰奴宗、仲曰武徳、季曰武力、以国帑・宝物来降。王礼待之、授上等、以本国為食邑。子武力仕至角干。」とある金官国の滅亡・新羅による併呑に帰結する大きな画期となった(『三国遺事』卷2「駕洛国記」も参照)。

ちなみに、旧金官国の王族は新羅王と同じ金姓を名乗っており、彼らは慶州に居住し、新羅王都の伝統的な居住・出自の区分に由来する六部、梁部(喙部)、沙梁部(沙喙部)、漸梁部(牟梁部)、本彼部、漢祗部(漢岐部)、習比部(習部)のうち、王を出す喙部と並んで、二重王権体制の下で副王である葛文王を出す格式を有する沙喙部に編入され、新羅貴族の一員に迎えられたことが知られる(磨雲嶺新羅真興王巡狩碑(568年)、『三国史記』卷41～43金庾信伝)。喙己吞(喙国)や卓淳も王族がまず新羅の傘下に入ることを求め、国論が二分され、一丸となって新羅に抵抗することができなくなったために、新羅への併呑が進んだと評されている(『日本書紀』欽明2年(541)4月条、同5年(544)3月条、後掲史料12・16)。新羅は旧王族を優遇することで、その故地の人々の感情を和らげるとともに、むしろ新羅と一体になって新羅のために働く環境を用意するという方策をとり、加耶諸国への侵攻を円滑に推進することができたのである。

3-08『日本書紀』継体23年(529)3月是月条

遣近江毛野臣使于安羅、勅勸新羅更建南加羅・喙己吞。百濟遣將軍君尹貴・麻那甲背・麻鹵等往赴安羅式聽詔勅。新羅恐破蕃國官家、不遣大人、而遣夫智奈麻禮。奚奈麻禮等往赴安羅、式

聽詔勅。於是、安羅新起高堂、引昇勅使、國主隨後昇階、國內大人預昇堂者一二。百濟使將軍君等在於堂下。凡數月、再三謨謀乎堂上。將軍君等恨在庭焉。

3-09『日本書紀』繼體23年4月是月

遣使送己能末多干岐并詔在任那近江毛野臣、推問所奏和解相疑。於是、毛野臣次于熊川（一本云、次于任那久斯牟羅）、召集新羅・百濟二國之王。新羅王佐利遲遣久遲布禮（一本云、久禮爾師知于奈師磨里）、百濟遣恩率彌騰利、赴集毛野臣所而二王不自來參。毛野臣大怒責問二國使云、以小事大天之道也（一本云、大木端者以大木續之、小木端以小木續之）、何故二國之王不躬來集受天皇勅輕遣使乎。今縱汝王自來聞勅、吾不肯勅、必追逐退。久遲布禮・恩率彌騰利、心懷怖畏、各歸召王。由是、新羅改遣其上臣伊叱夫禮智干岐（新羅以大臣爲上臣。一本云、伊叱夫禮智奈末）、率衆三千來請聽勅。毛野臣遙見兵仗圍統、衆數千人、自熊川入任那己利城。伊叱夫禮智干岐次于多多羅原、不敢歸、待三月、頻請聞勅、終不肯宣。伊叱夫禮智所將士卒等、於聚落乞食、相過毛野臣僂人河內馬飼首御狩。御狩入隱他門、待乞者過捲手遙擊乞者。見云、謹待三月、佇聞勅旨、尚不肯宣、惱聽勅使。乃知欺誑誅戮上臣矣。乃以所見具述上臣。上臣抄掠四村（金官・背伐・安多・委陀、是爲四村。一本云、多多羅・須那羅・和多・費智爲四村也）、盡將人物入其本國。或曰、多多羅等四村之所掠者、毛野臣之過也。

3-10『日本書紀』繼體24年(530)9月条

任那使奏云、毛野臣遂於久斯牟羅起造舍宅、淹留二歲（一本云、三歲者、連去來年數也）、懶聽政焉。爰以日本人與任那人、頻以兒息諍訟難決、元無能判。毛野臣樂置誓湯曰、實者不爛、虛者必爛。是以投湯爛死者衆。又殺吉備韓子那多利・斯布利（大日本人娶蕃女所生爲韓子也）、恒惱人民終無和解。於是、天皇聞其行狀遣人徵入、而不肯來。願以河內母樹馬飼首御狩、奉詣於京而奏曰、臣未成勅旨還入京鄉、勞往虛歸、慚惡安措。伏願、陛下待成國命、入朝謝罪。奉使之後、更自謨曰、其調吉士亦是皇華之使。若先吾取歸、依實奏聞、吾之罪過必應重矣。乃遣調吉士、率衆守伊斯枳牟羅城。於是、阿利斯等知其細碎爲事不務所期、頻勸歸朝、尚不聽還。由是悉知行迹、心生讎背。乃遣久禮斯己母、使于新羅請兵、奴須久利使于百濟請兵。毛野臣聞百濟兵來、迎討背評（背評地名。亦名能備己富里也）、傷死者半。百濟則捉奴須久利、桎械枷鎖而共新羅圍城、責罵阿利斯等曰、可出毛野臣。毛野臣嬰城自固、勢不可擒。於是、二國圖度便地淹留弦晦、築城而還、號曰久禮牟羅城。還時觸路拔騰利枳牟羅・布那牟羅・牟雌枳牟羅・阿夫羅・久知波多枳五城。

この新羅による第1次金官国侵攻の報に接して、527年6月、倭国は近江毛野を渡海させ、対応を試みている。この近江毛野の進発に際しては、筑紫君磐井の乱が起こり（『日本書紀』繼體21年(527)6月甲午条）、毛野は渡海延期を余儀なくされた。磐井は新羅と結託して反乱したと記されているが、磐井の乱と毛野の派遣や新羅との関係は『日本書紀』の造作によるものであって、本来は無関係であったとする意見も呈されている【坂本太郎1961、池内宏1970、三品彰英2002、熊谷公男2008】。しかし、繼體21年条や史料08には新羅が南加羅（金官国）・喙己吞に侵攻したことが毛野派遣につながったと記されており、新羅には毛野の渡海を妨害する動機があったと思われる。『国造本紀』伊吉嶋造条には「磐余

玉穗朝、伐石井従者新羅海辺人天津水凝後、上毛布直造。」とあり、磐井と新羅の関係を示唆する史料も存する。また6世紀中葉頃までは倭国の半島への派兵は「竹斯嶋上諸軍士」、即ち九州の諸豪族の兵力に依存しており【森公章2008】、その負担に対する不満も考慮すべきであり、やはり毛野の渡海は磐井の乱勃発の1つの好機であったと考えたい。

継体21年条では毛野は軍衆6万を引率したとあるが、磐井の乱には対処できず(朝廷から派遣された物部麁鹿火が鎮圧)、渡海後も3000人の新羅兵到来に対抗できなかったこと(史料09)などから考えて、大規模兵力の渡海は疑問であり【李永植1989、森公章2006、熊谷公男2008】、毛野は外交交渉を任務とする倭国の使者として派遣されたと解せられる。毛野の派遣先は安羅であり、新羅に南加羅(金官国)・喙己吞の再建を交渉することが任務であった。この交渉は安羅で行われ、百済・新羅は使者を派遣したが、安羅の対応は国王と国内の大人が高堂の上に昇り、倭国の使者とだけ協議を重ねるというもので(史料21)、加耶諸国に侵攻を企てる百済・新羅の使者は無視された形になった。安羅には百済・新羅をとともに侵略者として排除しようとする意図があったのかもしれないが、百済に関しては倭国がこの構想に加担することは期待できず(註7)、協議がまとまらなかったと推定される。

こうした中で、毛野は熊川(慶尚南道昌原郡熊川面)に宿所を移し、新羅・百済の王を召集して、事態の解決を図ろうとしている(史料09)。しかし、新羅・百済は事態解決の見通しがいいことを見越していたためか使者を派遣しただけであったので、毛野は改めて国王の召喚を要請した。新羅は今度は上臣伊叱夫礼智干岐(異斯夫=当時の新羅の軍事的指導者)が衆3000を率いて来会したところ、毛野はその軍勢に恐れをなし、熊川から任那己叱己利城(史料08の久斯牟羅)に立て籠ってしまう。新羅は多多羅原に駐屯し、金官・背伐・安多・委陀(一本では多多羅・須那羅・和多・費智)の4村、即ち金官国の主邑を抄掠したとあるので、結局のところ、金官国は新羅の第2次侵攻を受け、さらに壊滅的な打撃を被ったのである。

外交的失策を犯した近江毛野は帰国することができなくなり、翌530年9月になっても久斯牟羅に留まっていた(史料10)(註8)。そこで、「阿利斯等」(安羅王)は使者を新羅・百済に遣し、請兵を行い、この2国の力を借りて毛野を排除しようと計画した。毛野は百済の兵が来ると聞き、「阿利斯等」を同行して背評に籠城した。百済は安羅が派遣した使者を捉え、新羅の兵とともに城を包囲して、「阿利斯等」を責罵して、毛野を出せと言ったという。結局のところ、これは百済による安羅への侵攻の口実に利用されてしまったのであり、百済は久礼牟羅城を築いて引き上げたと記されている。史料10に見える布那牟羅(『日本書紀』継体23年3月是月条にも見える)・阿夫羅・久知波多枳は大加耶方面の城で、これは新羅にも大加耶の5城攻略の戦果があったことを示すものである【田中俊明1992】。近江毛野派遣の総括としては「擾乱加羅」(『日本書紀』継体24年10月条)と評さざるを得ず、ここに安羅を挟んで百済と新羅が直接対峙する段階を迎えることになる。

3. 安羅をめぐる百済・倭国の方策

百済では武寧王の次に聖明王(聖王、在位523～554年)が即位しており、538年には熊津から扶余(泗泚)に遷都し、扶余時代に入っている。安羅をめぐる新羅との対決が焦眉の問題になった時、聖明王は安羅・大加耶などの加耶諸国の面々を百済に参集させ、倭国とともに「任那復興」を相談するという

方策を企図した。この会議は541年と544年の2度に亘って開催されるので、「任那復興会議」Ⅰ・Ⅱと称する。その参加者は表2の通りであり、加耶諸国とともに「任那日本府」からの出席者も登場している。ここでは「任那復興会議」の内容や国際情勢の推移を検討するとともに、「任那日本府」の実態を解明する基本情報収集にも留意したい。

3-11『日本書紀』雄略8年(464)2月条

遣身狭村主青・檜隈民使博徳、使於吳國。自天皇即位至于是歳、新羅國背誕、苞苴不入、於今八年。而大懼中国之心、脩好於高麗。由是高麗王遣精兵士一百人、守新羅。有頃高麗軍士一人取假歸國。時以新羅人為典馬(典馬、此云于麻柯毗)而顧謂之曰、汝國為吾國所破非久矣(一本云、汝國果成吾土非久矣)。其典馬聞之、陽患其腹、退而在後、遂逃入國說其所語。於是、新羅王乃知高麗偽守、遣使馳告國人曰、人殺家内所養鷄之雄者。國人知意、盡殺國內所有高麗人。惟有遺高麗一人、乘間得脱、逃入其國、皆具為說之。高麗王即發軍兵、屯聚筑足流城(或本云、都久斯岐城)、遂歌舞興樂。於是、新羅王夜聞高麗軍四面歌舞、知賊盡入新羅地、乃使人於任那王曰、高麗王征伐我國。當此之時、若綴旒、然國之危殆過於累卵、命之脩短大所不計。伏請救於日本府行軍元帥等。由是任那王勸膳臣斑鳩(斑鳩、此云伊柯屢餓)・吉備臣小梨・難波吉士赤目子、往救新羅。膳臣等未至營止。高麗諸將未與膳臣等相戰、皆怖。膳臣等乃自力勞軍、令軍中促為攻具急進攻之、與高麗相守十餘日、乃夜鑿險為地道、悉過輜車設奇兵。會明高麗謂、膳臣等為遁也、悉軍來追。乃縱奇兵、步騎夾攻、大破之。二國之怨自此而生(言二國者、高麗・新羅也)。膳臣等謂新羅曰、汝以至弱當強、官軍不救、必為所乘、將成人地殆於此役。自今以後、豈背天朝也。

3-12『日本書紀』欽明2年(541)4月条

安羅次早岐夷吞奚・大不孫・久取柔利、加羅上首位古殿奚、卒麻早岐、散半奚早岐兒、多羅下早岐夷他、斯二岐早岐兒、子他早岐等、與任那日本府吉備臣(闕名字)、往赴百濟俱聽詔書。百濟聖明王謂任那早岐等言、日本天皇所詔者、全以復建任那。今用何策起建任那。盍各盡忠奉展聖懷。任那早岐等對曰、前再三廻與新羅議而無答報所圖之旨、更告新羅尚無所報、今宜俱遣使往奏天皇。夫建任那者、爰在大王之意、祇承教旨、誰敢問言。然任那境接新羅、恐致卓淳等禍(等謂喙己吞・加羅。言卓淳等國有敗亡之禍)。聖明王曰、昔我先祖速古王・貴首王之世、安羅・加羅・卓淳早岐等、初遣使相通、厚結親好、以為子弟、冀可恒隆。而今被誑新羅使天皇忿怒而任那憤恨、寡人之過也。我深懲悔而遣下部中佐平麻鹵・城方甲背昧奴等赴加羅會干任那日本府相盟。以後繫念、相續圖建任那、旦夕無忘。今天皇詔稱、速建任那。由是欲共爾曹謨計、樹立任那國、宜善圖之。又於任那境、徵召新羅、問聽與不、乃俱遣使奏聞天皇、恭承示教。儻如使人未還之際、新羅候隙侵逼任那、我當往救、不足為憂。然善守備、謹警無忘。別汝所導、恐致卓淳等禍、非新羅自強故所能為也。其喙己吞、居加羅與新羅境際、而被連年攻敗、任那無能救援、由是見亡。其南加羅、蕞爾狹小、不能卒備、不知所託、由是見亡。其卓淳上下携貳、主欲自附、內應新羅、由是見亡。因斯而觀三國之敗、良有以也。昔新羅請援於高麗、而攻擊任那與百濟、尚不剋之。新羅安獨滅任那乎。今寡人與汝戮力并心、翳賴天皇、任那必起。因贈物各有差。忻忻

而還。

3-13『日本書紀』欽明2年7月条

百濟聞安羅日本府與新羅通計、遣前部奈率鼻利莫古・奈率宣文、中部奈率木苧味淳・紀臣奈率彌麻沙等〈紀臣奈率者、盖是紀臣娶韓婦所生、因留百濟爲奈率者也。未詳其父。他皆效此也〉、使于安羅、召到新羅任那執事謨建任那。別以安羅日本府河内直通計新羅、深責罵之〈百濟本記云、加不至費直阿賢移那斯佐魯麻都等、未詳也〉。乃謂任那曰、昔我先祖速古王・貴首王、與故旱岐等、始約和親、式爲兄弟。於是我以汝爲子弟、汝以我爲父兄、共事天皇、俱距強敵、安國全家至于今日。言念先祖與舊旱岐、和親之詞、有如皎日。自茲以降、勤修隣好、遂敦與國、恩踰骨肉、善始有終、寡人之所恒願。未審何緣輕用浮辭、數歲之間、慨然失志。古人云、追悔無及、此之謂也。上達雲際、下及泉中、誓神乎今、改咎乎昔、一無隱匿、發露所爲、請誠通靈、深自克責、亦所宜取。盖聞、爲人後者、貴能負荷先軌、克昌堂構、以成勲業也。故今追崇先世和親之好、敬順天皇詔勅之詞。拔取新羅所折之國、南加羅・喙己吞等、還屬本貫、遷實任那、永作父兄、恒朝日本、此寡人之所食不甘味、寢不安席、悔往戒今之所勞想也。夫新羅甘言希誑、天下之所知也。汝等妄信既墮人權。方今任那境接新羅、宜常設備。豈能弛柝。爰恐陷羅誣欺網罟、喪國亡家、爲人繫虜。寡人念茲、勞想而不能自安矣。竊聞、任那與新羅運策席際、現蜂蛇恠、亦衆所知。且夫妖祥所以戒行、災異所以悟人、當是明天告戒、先靈之徵表者也。禍至追悔、滅後思興、孰云及矣。今汝遵余、聽天皇勅、可立任那、何患不成。若欲長存本土、永御舊民、其謨在茲。可不慎也。聖明王更謂任那日本府曰、天皇詔稱、任那若滅、汝則無資、任那若興、汝則有援。今宜興建任那、使如舊日、以爲汝助、撫養黎民。謹承詔勅悚懼填胸、誓効丹誠。冀隆任那、永事天皇、猶如往日。先慮未然、然後康樂。今日本府復能依詔、救助任那、是爲天皇所必哀讚、汝身所當賞祿。又日本卿等、久住任那之國、近接新羅之境。新羅情狀、亦是所知。毒害任那、謨防日本、其來尚矣、匪唯今年、而不敢動者。近羞百濟、遠恐天皇、誘事朝廷、僞和任那。如斯感激任那日本府者、以未禽任那之間僞示伏從之狀。願今候其間隙、詰其不備、一舉兵而取之。天皇詔勅勸立南加羅・喙己吞非但數十年、而新羅一不聽命、亦卿所知。且夫信敬天皇、爲立任那、豈若是乎。恐卿等輒信甘言、輕被謾語、滅任那國、奉辱天皇。卿其戒之、勿爲他欺。

3-14『日本書紀』欽明4年(543)11月甲午条

遣津守連、詔百濟曰、在任那之下韓百濟郡令・城主、宜附日本府。并持詔書、宣曰、爾屢抗表、稱當建任那十餘年矣。表奏如此、尚未成之。且夫任那者爲爾國之棟梁、如折棟梁、誰成屋宇。朕念在茲、爾須早建。汝若早建任那、河内直等〈河内直已見上文〉自當止退、豈足云乎。是日、聖明王聞宣勅已、歷問三佐平内頭及諸臣曰、詔勅如是、當復何如。三佐平等答曰、在下韓之我郡令・城主、不可出之。建國之事宜早聽聖勅。

3-15『日本書紀』欽明5年(544)2月条

百濟遣施德馬武・施德高分屋・施德斯那奴次酒等、使于任那、謂日本府與任那旱岐等曰、我遣紀臣奈率彌麻沙・奈率已連・物部連奈率用歌多、朝謁天皇。彌麻沙等還自日本、以詔書宣曰、汝等宜共在彼日本府早建良圖副朕所望、爾其戒之、勿被他誑。又津守連從日本來〈百濟本記云、津守連已麻奴跪。而語誑不正、未詳〉、宣詔勅而問任那之政。故將欲共日本府・任那執事、議定

任那之政、奉奏天皇。遣召三廻尚不來到、由是不得共論圖計任那之政、奉奏天皇矣。今欲請留津守連、別以疾使、具申情狀遣奏天皇、當以三月十日發遣使於日本。此使便到、天皇必須問汝。汝日本府卿・任那旱岐等、各宜發使共我使人、往聽天皇所宣之詔。別謂河內直（百濟本記云、河內直移那斯・麻都。而語訛未詳其正也）、自昔迄今、唯聞汝惡。汝先祖等（百濟本記云、汝先那干陀甲背、加臘直岐甲背。亦云、那哥陀甲背、鷹哥岐彌。語訛未詳）、俱懷奸偽、誘說爲哥可君（百濟本記云、爲哥岐彌、名有非岐）專信其言不憂國難、乖背吾心縱肆暴虐。由是見逐、職汝之由。汝等來住任那、恒行不善。任那日損、職汝之由。汝是雖微、譬猶小火燒焚山野、連延村邑。由汝行惡、當敗任那、遂使海西諸國官家、不得長奉天皇之闕。今遣奏天皇、乞移汝等、還其本處。汝亦往聞。又謂日本府卿・任那旱岐等曰、夫建任那之國、不假天皇之威、誰能建也。故我思欲就天皇、請將士、而助任那之國。將士之糧我當須運。將士之數未限若干、運糧之處亦難自決。願居一處、俱論可不、擇從其善、將奏天皇。故頻遣召、汝猶不來、不得議也。日本府答曰、任那執事不赴召者、是由吾不遣、不得往之。吾遣奏天皇、還使宣曰、朕當以印哥臣（語訛未詳）、遣於新羅、以津守連、遣於百濟。汝待聞勅際、莫自勞往新羅・百濟也。宣勅如是。會聞印哥臣使於新羅、乃追遣問天皇所宣詔、曰、日本臣與任那執事、應就新羅、聽天皇勅、而不宣就百濟聽命也。後津守連遂來、過此、謂之曰、今余被遣於百濟者、將出在下韓之百濟郡令・城主。唯聞此說、不聞任那與日本府、會於百濟、聽天皇勅。故不往焉、非任那意。於是、任那旱岐等曰、由使來召、便欲往參、日本府卿不肯發遣、故不往焉。大王爲建任那、觸情曉示、觀茲忻喜難可具申。

3-16『日本書紀』欽明5年3月条

百濟遣奈率阿弋得文・許勢奈率哥麻・物部奈率哥非等、上表曰、奈率彌麻沙・奈率己連等至臣蕃、奉詔書曰、爾等宜共在彼日本府同謀善計、早建任那。爾其戒之、勿被他誑。又津守連等至臣蕃、奉勅書、問建任那。恭承來勅、不敢停時。爲欲共謀、乃遣使召日本府（百濟本記云、遣召烏胡跛臣、盖是的臣也）與任那、俱對言、新年既至、願過而往。久而不就、復遣使召、俱對言、祭時既至、願過而往。久而不就、復遣使召、而由遣微者、不得同計。夫任那之不赴召者、非其意焉。是阿賢移那斯・佐魯麻都（二人名也、已見上文）奸佞之所作也。夫任那者以安羅爲兄、唯從其意、安羅人者、以日本府爲天、唯從其意（百濟本記云、以安羅爲父、以日本府爲本也）。今的臣・吉備臣・河內直等、咸從移那斯・麻都指搆而已。移那斯・麻都、雖是小家微者、專擅日本府之政、又制任那、障而勿遣。由是不得同計奏答天皇、故留己麻奴跪（蓋是津守連也）、別遣疾使迅如飛鳥、奉奏天皇。假使二人（二人者、移那斯與麻都也）在於安羅、多行奸佞、任那難建、海西諸國、必不獲事。伏請移此二人、還其本處、勅諭日本府與任那、而圖建任那。故臣遣奈率彌麻沙・奈率己連等、副己麻奴跪上表以聞。於是詔曰、的臣等（等者謂吉備弟君臣・河內直等也）往來新羅非朕心也。曩者、印支彌與阿鹵旱岐在時、爲新羅所逼、而不得耕種。百濟路迴、不能救急。由的臣等往來新羅、方得耕種。朕所曾聞。若已建任那、移那斯・麻都、自然却退。豈足云乎。伏承此詔、喜懼兼懷。而新羅誑朝、知匪天勅。新羅春取喙淳、仍擯出我久禮山戍、而遂有之。近安羅處、安羅耕種、近久禮山處、新羅耕種、各自耕之不相侵奪。而移那斯・麻都、過耕他界、六月逃去。於印支彌後來許勢臣時（百濟本記云、我留印支彌之後、至既酒臣時。皆未詳）、新羅無

復侵逼他境、安羅不言爲新羅逼不得耕種。臣嘗聞、新羅每春秋、多聚兵甲、欲襲安羅與荷山。或聞、當襲加羅。頃得書信、便遣將士、擁守任那、無懈怠也。頻發銳兵、應時往救。是以任那隨序耕種、新羅不敢侵逼。而奏百濟路迴、不能救急、由的臣等往來新羅、方得耕種、是上欺天朝、轉成奸佞也。曉然若是、尚欺天朝。自餘虛妄、必多有之。的臣等猶住安羅、任那之國恐難建立。宜早退却。臣深懼之。佐魯麻都雖是韓腹、位居大連、廁日本執事之間、入榮班貴盛之例、而今反著新羅奈麻禮冠、即身心歸附、於他易照。熟觀所作、都無怖畏。故前奏惡行、具錄聞訖。今猶著他服、日赴新羅域、公私往還、都無所憚。夫喙國之滅、匪由他也。喙國之幽跛旱岐、貳心加羅國、而內應新羅。加羅自外合戰、由是滅焉。若使幽跛旱岐不爲內應、喙國雖小、未必亡也。至於卓淳、亦復然之。假使卓淳國主不爲內應新羅招寇、豈至滅乎。歷觀諸國敗亡之禍、皆由內應貳心人者。今麻都等腹心新羅、遂着其服、往還旦夕、陰構奸心。乃恐、任那由茲永滅。任那若滅、臣國孤危、思欲朝之、豈復得耶。伏願天皇玄鑒遠察、速移本處、以安任那。

3-17『日本書紀』欽明5年11月条

百濟遣使召日本府臣・任那執事曰、遺朝天皇、奈率得文・許勢奈率哥麻・物部奈率哥非等還自日本。今日本府臣及任那國執事、宜來聽勅同議任那。日本吉備臣、安羅下旱岐大不孫・久取柔利、加羅上首位古殿奚、卒麻君、斯二岐君、散半奚君兒、多羅二首位訖乾智、子他旱岐、久嵯旱岐、仍赴百濟。於是、百濟王聖明略以詔書示曰、吾遣奈率彌麻佐・奈率已連・奈率用哥多等、朝於日本。詔曰、早建任那。又津守連奉勅問成任那、故遣召之。當復何如能建任那、請各陳謀。吉備臣・任那旱岐等曰、夫建任那國、唯在大王。欲冀遵王、俱奏聽勅。聖明王謂之曰、任那之國、與吾百濟、自古以來約爲子弟。今日本府印岐彌（謂在任那日本臣名也）、既討新羅、更將伐我。又樂聽新羅虛誕謾語也。夫遣印支彌於任那者、本非侵害其國。往古來今新羅无道、食言違信、而滅卓淳股肱之國、欲快返悔。故遣召到俱承恩詔。欲冀興繼任那之國、猶如舊日永爲兄弟。竊聞、新羅・安羅兩國之境有大江水、要害之地也。吾欲據此脩繕六城、謹請天皇三千兵士、每城充以五百、并我兵士勿使作田、而逼惱者、久禮山之五城、庶自投兵降首、卓淳之國、亦復當興。所請兵士吾給衣糧。欲奏天皇、其策一也。猶於南韓置郡令・城主者、豈欲違背天皇遮斷貢調之路、唯庶尅濟多難殲撲強敵。凡厥凶黨、誰不謀附。北敵強大、我國微弱。若不置南韓郡領・城主修理防護、不可以禦此強敵、亦不可以制新羅。故猶置之攻逼新羅撫存任那。若不爾者、恐見滅亡不得朝聘。欲奏天皇、其策二也。又吉備臣・河內直・移那斯・麻都、猶在任那國者、天皇雖詔建成任那、不可得也。請移此四人、各遣還其本邑。奏於天皇、其策三也。宜與日本臣・任那旱岐等、俱奉遣使、同奏天皇、乞聽恩詔。於是、吉備臣・旱岐等曰、大王所述三策、亦協愚情而已。今願歸以敬諮日本大臣（謂在任那日本府之大臣也）・安羅王・加羅王、俱遣使同奏天皇。此誠千載一會之期、可不深思而熟計歟。

3-18『日本書紀』欽明13年(552)5月乙亥条

百濟・加羅・安羅、遣中部德率木弼今敦・河內部阿斯比多等、奏曰、高麗與新羅、通和并勢、謀滅臣國與任那。故謹求請救兵、先攻不意。軍之多少隨天皇勅。詔曰、今百濟王・安羅王・加羅王與日本府臣等、俱遣使奏狀聞訖。亦宜共任那、并心一力。猶尚若茲、必蒙上天擁護之福、亦賴可畏天皇之靈也。

3-19『日本書紀』欽明14年(553)8月丁酉条

百濟遺上部奈率科野新羅・下部固徳汝休帶山等上表曰、去年臣等同議、遣内臣・徳率次酒・任那大夫等、奏海表諸彌移居之事、伏待恩詔如春草之仰甘雨也。今年忽聞、新羅與狛國通謀云、百濟與任那頗詣日本、意謂是乞軍兵伐我國歟。事實實者、國之敗亡可企踵而待。庶先日本兵未發之間、伐取安羅絶日本路、其謀若是。臣等聞茲深懷危懼、即遣疾使輕舟、馳表以聞。伏願、天慈速遣前軍・後軍、相續來救、逮于秋節以固海表彌移居也。若遲晚者噬臍無及矣。所遣軍衆來到臣國、衣糧之費、臣當充給。來到任那亦復如是。若不堪給、臣必助充令無乏少。別的臣敬受天勅、來撫臣蕃、夙夜乾乾勤修庶務。由是海表諸蕃皆稱其善、謂當萬歲肅清海表。不幸云亡、深用追痛。今任那之事誰可修治。伏願天慈速遣其代、以鎮任那。又復海表諸國、甚乏弓馬。自古迄今、受之天皇、以禦強敵。伏願天慈多貺弓馬。

「任那復興會議」Iは突如として招集されたという感が強く、その内容を見ていくと、終始百濟聖明王が領導しており、『日本書紀』の依拠史料も「百濟本記」によるものと考えられ、百濟による安羅確保の方策を示すものに他ならない。I・IIの参加者は概ね同じ面々であり(表2)、加耶諸国からは早岐=王あるいはそれに準じる肩書を有する人々が出席しているのは、近江毛野が百濟・新羅の王を招集した時に、身分の低い使者しか来なかったことに比べると、各国がこの會議にそれなりの期待を抱いていたことを窺わせる。

541年4月のIは安羅に迫りつつある新羅への対応を協議するもので、これ以前に百濟は使者を大加耶に派遣し、「任那日本府」とも会して相盟したとあり(史料12)、會議参加者への根回しを行っていたことがわかる。加耶諸国は新羅とも交渉を持ったが、成果がなく、有効な対処方法がなかったため、この會議に参加したようである。百濟は近肖古王(在位346~375年)・近仇首王(在位375~384年)代以来の加耶諸国との歴史的な友好関係を強調し、金官国等が支配者層の新羅への内応によって滅亡したことに鑑みて、①百濟と加耶諸国の提携維持を図ること、②新羅の侵攻に対しては、百濟が救軍を派遣して戦うことを提案している。

ところが、I終了後、7月には「安羅日本府」が新羅と通計したという情報が齎された(史料13)。これは安羅に伏在する反百濟的動向に基づくもので、「安羅日本府」の河内直移那斯・麻都らを中心とする行動であった。第2章第2節第4項で触れたように、彼らの父祖は百濟とも倭とも通交する加耶系の人物だったらしく、国際情勢を見据えながら、複雑な活動を展開している。I-②の提案は百濟による安羅への軍事進駐を意味するもので、おそらく百濟は541年7月の時点で「任那之下韓」に進出し、郡令・城主を設置するという強硬手段に出ていたのである。

百濟は542、543年と連年倭国に遣使しており(『日本書紀』欽明2年(3年=542カ)7月条、同4年9月条)、「下韓任那之政」、つまりこの間の事情説明に努めたと思われる。欽明4年条の「扶南財物」(扶南はインドシナ南部メコン川下流地方にあったクメール族の国)は百濟が541年に中国南朝の梁に入貢した際に得た物品を分賜したもので、先進文物供与による倭国の支援獲得を企図した行為であった。しかし、倭国の朝廷は百濟の安羅駐屯には難色を示したようであり(史料14)、「日本府」や安羅が新羅と通計したのもこの百濟の進駐に対する反発であったと考えられる。倭国は新羅と通謀した河内直らに開

しては、百済が加耶地域の安定を確立すれば解決するので、大した問題ではないと述べるばかりであった。百済は郡令・城主の退却は不可として、加耶地域の安定に努めるという点のみ、倭国の意見を取り入れることになった。

こうした情勢を受けて、544年11月にⅡが開催される。この段階では百済と安羅の関係は前回ほど円滑ではなく、「任那執事」・「任那早岐等」や「日本府執事」・「日本府」は色々な理由を述べて参集を延引したので(『日本書紀』欽明4年12月条・是月条、同5年正月条・是月条、史料15・16)、開催まで紆余曲折が存した。また彼らは倭国が百済の軍事進出を全面的に支持している訳ではないことも悉知していた(史料15)。そこで、百済としては「日本府」や安羅に存する親新羅・反百済の気運を転換することが急務であり、Ⅱでは①531年以来新羅が守備する久礼山の5城を攻取し、卓淳国を復興する、②百済が下韓(南韓)に設置した郡令・城主は「任那」守護のために必要である(したがって百済の軍事的進出は維持する)、③「日本府」の吉備臣・河内直・移那斯・麻都らを追却する、の3策を示し、加耶諸国とともに倭国に遣使して共同提案という形で倭国の支持を得るという方策を探っている。

しかし、会議には③の対象である吉備臣も列席しており、また出席者は全権委任を得ていなかったのも、各々帰国して「日本府之大臣」、安羅王、加羅(大加耶)王などに諮問したいと述べ、百済の方策に対する返答は保留されている。百済は結局単独で倭国に遣使しており(『日本書紀』欽明6年(545)5月条)、加耶諸国との連携は実現しなかった。百済はまた「呉財」=対中国外交で得た物品を用いて、加耶諸国を自陣に引き留めようとしている(欽明6年9月条)。

倭国は百済使帰国に際して、相当量の軍事物資を与えている(『日本書紀』欽明7年(546)正月丙午条)が、これは①で要請された3000人の兵士派遣に対する協力拒否の代償であったと思われる。上述のように、倭国は②には不賛成で、③に関しても、「任那復興」が達成されれば、彼らの存在は問題にならないと述べるばかりで、全く実行力がなかった。倭国にとっては安羅の独立保持、百済と新羅の勢力均衡による加耶諸国の現状維持が望ましかったのであり、ここに至って加耶諸国をめぐる倭国と百済の方策には齟齬が生じることになる。

4. 「任那」の用法と「任那日本府」(「在安羅諸倭臣等」)の実態

前項の「任那復興会議」における一連の百済聖明王の発言に関連して、「日本府」の構成や特色がわかるので、ここで「任那」の語義や「任那日本府」に関する知見を整理してみたい。

『日本書紀』における最初の外交記事は崇神65年(紀元前33?)年7月条・垂仁2年(紀元前28?)是歳条の任那人蘇那曷叱知=意富加羅王之子都怒我阿羅斯等(別名を于斯岐阿利叱智干岐といい、「蘇」は「于斯」(牛)の朝鮮語sioを、「那曷」は「岐(来)」と同義である「出る」「行く」の朝鮮語の語根na-kaを写したものと説明できるというので、蘇那曷=于斯岐で、阿利叱智・叱知、干岐はいずれも君主を示す語)の来航で、ここに登場する「任那」=意富加羅は『三国遺事』卷2所収「駕洛国記」の大駕洛、即ち金官国に他ならない。第2章第1節第2項で見たように、「任那」が金官国を指す事例は朝鮮・中国の史料にも存し、①「任那」=金官国が「任那」の語義の基本である(註9)。

但し、『日本書紀』の「任那」には②加耶諸国を漠然と「任那」と称する事例もある。また本節第1～3項で触れたように、③「任那」=大加耶や④「任那」=安羅など、金官国以外の加耶諸国の中の有力国を

指す場合も見られる。「任那」の用法は区々であり、「任那」がそれぞれの文脈で何を意味しているかを個別に確定した上で、個々の史料を解釈していかねばならないことがわかる。なお、「加羅」は概ね北部加耶諸国の大加耶を示すものと考えられるが、「加羅」「韓」が加耶諸国を漠然と指す用例もあり、また「任那復興会議」の場面に見える「南加羅」は南部加耶諸国の有力国の1つで、もう1つの「大駕洛」たる金官国を指す表現として使用されている。

では、「任那日本府」の実態はどのように理解すべきであろうか。まず「任那日本府」に関する学説を整理する【李永植1993、鈴木英夫1987、鄭孝雲2005、中野高行2007】。

A倭王権の出先機関説…倭国が半島南部を領有し、その経営のために設置した機関で、行政・外交機能を持つ軍事基地と理解する【末松保和1949、井上秀雄1973a、八木充1963】。

B分国論…倭王権が支配したと『日本書紀』に記される百済・新羅や「任那」などは朝鮮半島諸国から日本列島に移住した集団が建国した「分国」であり、「任那日本府」はそれら日本列島内の諸「分国」を統治する機関と見る立場【金錫亨1969】。

C加耶地域居住の倭人説…安羅に残存した倭人集団による組織で、倭王権の出先機関でも朝鮮半島経営の拠点でもないとする立場【井上秀雄1972・1973b、鈴木靖民1974、鬼頭清明1976・1992、山尾幸久1977、森俊道1983、佐伯有清1983、延敏洙1990、森公章2006、中野高行2007】。

D加耶諸国による設置説…新羅倭典＝対倭外交機関を参考にして、加耶諸国が対倭外交のために設置したものと見る【奥田尚1976】。

E百済の出先機関説

a軍司令部説…Aの主体を倭から百済に置換して史料を読み直した上で、行政・外交機能を持つ軍事基地と理解する【金延鶴1977、千寛宇1974・1983、金鉉球1985b】。

b(D-b)貿易仲介所説…元来は百済が設置した「倭国使節駐在館」と言うべきもので、百済はこれによって対倭交易のルートを確保していたと見る。但し、540年以後は安羅がこれを掌握し、安羅王の指揮下に対倭外交・交易機関に再編され、安羅の勢力誇示と百済の圧力緩和に役立ったとする【金泰植1993】。

F使者・外交交渉団体説…倭国から「任那」に派遣された使者、あるいは倭国の使節と加耶諸国の早岐との間に構成された外交交渉団体とする考え方で、倭王権の出先機関、または倭王権と君臣関係を結ぶ臣僚集団としての性格は認めるものの、軍隊や領土は保有していなかったと解する【請田正幸1974・1987、吉田晶1975、山尾幸久1980、大山誠一1980、鈴木靖民1983、平野邦雄1985、鈴木英夫1987・1996・2006、李永植1989、角林文雄1996、李鎔賢2002、鄭孝雲2005、熊谷公男2008】。

G新・分国論…朝鮮半島の人々が倭国に渡来し、その後裔である九州の倭が本国である加耶地域全域で随時交易を行った臨時交易所であり、その中心は安羅であるとする説【尹錫暁1993】。

これらのうち、A説は『日本書紀』に記された神功皇后の「三韓征討」の後、神功49年3月条に見える荒田別・鹿我別による加耶地域7国などの平定と百済への付与の軍事の際に、宰を置いて諸韓国を統制したのが「日本府」であるとする『大日本史』や新井白石の「白石史論」(現存せず)の説を踏襲したもので、1970年頃までは通説的地位を占めていた。しかし、第2章第2節第4項で触れたように、神功49年条に登場する地域を百済が領有・侵攻したのは5世紀末～6世紀前半の時期と考えられ、むしろ当該期

の加耶諸国をめぐる百済の主張が込められたものと位置づけることができる(註10)。したがってこれを「任那日本府」の起源とすることは不可能であり、特に1970年代以降、『日本書紀』の史料的性格の再検討・関係記事の整合的解釈の構築が進められ、現在ではA説は否定されていると思われる。またB・Gの分国論についても『日本書紀』の解釈に無理があり、やはり認め難いものと言わねばならない(註11)。

では、C～F説に関しては如何であろうか。以下、関係記事から窺われる「任那日本府」の特色を整理する形で、諸説の当否や「任那日本府」の実像を明らかにしてみたい。

(イ)「日本府」は百済・新羅の加耶地域への侵攻が進む6世紀代に登場する。これ以前に唯一「日本府」が登場するのは史料11であり、これを「日本府」の起源とする意見もあるが【大山誠一1980】、史料11には「日本府行軍元帥等」と記され、倭国の中央豪族の膳臣斑鳩、地方豪族の吉備臣小梨、外交の実務を掌る吉士集団の難波吉士赤目という構成は、むしろ後述の6世紀の「日本府」の構成員を反映したのではないと思われる。また史料11では「日本府」が独自の軍事力を有していたと描かれているが、6世紀の「日本府」にはこうした様態は看取できず、「日本府」に軍事力があつたか否かは保留しておかねばならない。

(ロ)史料13には「安羅日本府」の表現も見られるが、これは同じ史料中の「任那日本府」と同義であり、所在地は安羅であつたと考えられる。

(ハ)「在安羅諸倭臣等」(史料0-01)がその正式名称である。『日本書紀』の「日本府」の「府」字の古訓は欽明紀のみミコモチとあるが、これは倭国の朝廷とのつながりを誤解した訓で、その他の箇所「府」字の古訓ツカサが本来の訓と考えられる。但し、史料38の「今日本府印支彌」を分註で「在任那日本府臣名也」と説明する事例から見て、「日本府」は組織・個人いずれにも使用されており、充分意識された用語ではなく、「臣」「府」「府臣」は相通じる語として用いられているようである【鈴木英夫2006】。

(ニ)構成員には日本府大臣—日本府臣の序列があり(「日本府卿」「日本府執事」はこれらの総称か)、前者には的臣などの倭の中央豪族の姓を有する者が就任し、後者には吉備臣などの地方豪族がおり、その下に河内直・阿賢移那斯・佐魯麻都など加耶系の人々(倭人との混血児を含む)が実務官として実権を握るという実態であつた(史料12・13・14・15・16・17)。

(ホ)544年当時の「日本府大臣」は的臣(烏胡跛臣)であるが、史料16・17によると、前任者として印支彌、許勢臣(既酒臣)などがいたことが知られる。史料16では倭国側の発言として、かつて印支彌と阿鹵旱岐(安羅王の名、あるいは阿鹵=安羅で、「安羅王」の謂か)の時代に、新羅が安羅に侵攻し、耕種できなくなり、百済も救援を送ることが不可能であつたと述べられており、百済側の説明ではこれは久礼山周辺の耕種をめぐる紛争ととらえられている。とすると、これは531年の新羅による卓淳制圧と百済の久礼山守備退去=新羅による久礼山の確保に関わる出来事と解することができよう。史料17では印支彌は当初新羅と対決姿勢であつたが、後には反百済に転じたといい、史料16によると、次の許勢臣の時には新羅の侵攻が小康状態であつたことと、百済が時に応じて救兵を派遣したので、久礼山周辺の耕種が可能であつたと記されている。許勢臣の就任時期、的臣への交替の過程は不明であるが、現任の的臣らが親新羅の方策をとる理由の1つには、この久礼山周辺の耕種、緩衝地帯の維持という目的があつたものと考えられる。

(へ) 印支彌について、史料16所引「百濟本記」には「我留印支彌之後、至既酒臣時」、史料17の百濟聖明王の言に「夫遣印支彌於任那者、本非侵害其國」とあり、印支彌は百濟が派遣したもので【奥田尚1976】、その去就も百濟王の意向次第であったと描かれている。E-a説では彼らを倭系百濟官僚とし、百濟が送り込んだもので、「日本府」を百濟の出先機関と見る論拠の1つとしている(註12)。一方、F説では印支彌を百濟在住の倭系の人物と見るが、「日本府」に就任した後は「倭臣」として倭王の臣僚になったと解し、その活動に不満を抱いた百濟は彼を實力で排除したと説明している。史料16・17による限りは、許勢臣・的臣の来歴は確言できない(史料19では的臣は「敬受天勅、來撫臣蕃」(この場合の「臣蕃」は聖明王から見た「任那」のことか)とある)が、印支彌が百濟から来た点は認めねばならない。但し、印支彌は必ずしも百濟の意図通りには活動しておらず、「日本府」が百濟の統制下にあったとするのは無理であろう。史料15・16・17によると、百濟は河内直らの追却を倭国に要請し、史料19では的臣の死去を報告するとともに、「伏願天慈速遣其代、以鎮任那」と述べており、百濟の認識としては「日本府」官人の進退は倭国側の統制下にあると考えられていたことを示している。史料13・15には百濟が安羅に派遣した使者の中に倭系百濟官僚の紀臣奈率彌麻沙、施德斯那奴次酒が見えており、「日本府」の吉備臣・河内直らに対する百濟の認識、つまり彼らを倭人と位置づけていることがわかるとする指摘も存する【李永植1989】。史料13にはまた「日本卿等、久住任那之國、近接新羅之境」とも記されているので、印支彌はたとえ百濟から到来したとしても、百濟とは別個の「日本府」の一員、「在安羅諸倭臣等」として行動する必要があったのである。

(ト) 「日本府」の活動内容・役割としては、百濟・新羅、高句麗など朝鮮半島諸国や倭国との交渉を行い、「任那執事・國國早岐等」(史料14)、「任那執事」・「任那早岐等」(史料15・17)、「任那諸國早岐等」(史料0-01)と同席・協議し、行動をともにしていることが挙げられる。史料15では「日本府」の意向が「任那早岐等」の行動を規制したように記されており、史料16にも「夫任那者以安羅爲兄、唯從其意、安羅人者、以日本府爲天、唯從其意(百濟本記云、以安羅爲父、以日本府爲本也)」とあるが、これは百濟への参集を遅延する口実や百濟の「日本府」排除要求を支える過大評価に由来する可能性も指摘されており【中野高行2007】、加耶諸国、特に安羅に対する決定的影響力は割り引いて考える必要がある。但し、こうした「日本府」と安羅との関係から見て、D説、E-b説のように安羅による設置を想定することは難しいと言わねばならない。

(チ) 史料18には「日本府臣」が百濟・加耶諸国とともに倭国に遣使したことが見えるが、「日本府」が単独で倭国に遣使した事例はない。また史料15によると、倭国の方策については、「日本府」は倭国が新羅あるいは百濟に派遣した使者から情報を得ており、倭国が「日本府」に遣使することはなかった。原表記と思われる「在安羅諸倭臣等」にも「倭臣」、即ち倭王権の臣下、倭王権との直接的つながりを示唆する表現が存するが、百濟が「日本府」官人の排除を再三倭国に要請した時、倭国は言を左右にして積極的に行動しておらず(史料14・16)、(へ)で触れた百濟側の「日本府」官人と倭国の関係の叙述はあくまでも百濟の認識を示すものであって、実際には「日本府」は倭国の指示を受けるなどの直接的なつながりはなかったと考えられるので、F説も支持し難い。

以上が「日本府」に関する知見であるが、結論としては、「日本府」(「在安羅諸倭臣等」)とは、5世紀代の倭と半島との関係や地方豪族の独自の通交などにより、加耶地域、特に古くから倭とつながりの深

かった安羅(有力な渡来系氏族東漢直氏は安羅出身とされる)に居住した倭人の一団であり、加耶諸国と共通の利害を有し、ほぼ対等な関係で彼らと接し、主に外交交渉に協同で従事していたとまとめることができ、C説が整合的であると思われる。安羅における具体的な存在形態は不明であるが、従来イメージされているような出先機関的な機構としてのまとまりを形成していた訳ではなく、平時におけるその存在意義は大きなものではなかったと解される。

彼らの存在がクローズアップされたのは、百済と新羅が安羅を挟んで直接対峙した段階以降であり、倭国は百済の加耶諸国への侵攻を支持していたが、加耶諸国の滅亡、百済・新羅のこれ以上の侵攻は望んでおらず、安羅などが緩衝地帯として存続することを期待していたようである。こうした中で「在安羅諸倭臣等」は本国である倭国の朝廷、あるいはそれぞれの出身豪族ともいくつかのパイプを有しており、何よりも自らの存立・活動の場を保持するために、独立維持を希望する安羅など残存の加耶諸国と共同して、百済と新羅、倭国、さらには高句麗とも外交交渉を行い、その時々で最善の方策を模索する行動をとったのであった。そして、その活動は安羅侵占を企図する百済には大きな阻害要因として映じたため、百済系史料に依拠した『日本書紀』では彼らの存在が重要視されているのであろう。

ちなみに、『日本書紀』欽明紀ではこの「在安羅諸倭臣等」の消滅、加耶諸国が滅亡に向かう段階以降に、倭国の国内支配体制整備に関わる記事が現れ始める。特に吉備地域に屯倉という倭王権の支配の拠点を設置した(欽明16年(555)7月壬午条、同17年7月己卯条)のは、半島における吉備臣の活躍によって独自の通交ルートを有していた吉備氏が、そのパイプを失い、勢威が低下した間隙を突いたものと見ることができ、国際関係が国内政治とも深いつながりを持っていたことが窺われる。またこうした地方豪族の独自の外交権を奪取し、朝廷が外交権を一元化する方向も看取でき(欽明31年(570)4月乙酉条・5月条)、倭王権の外交・軍事面での国内統制はむしろこれ以降に整備されていくものと展望される(註13)。

5. 百済聖明王の敗死と加耶諸国の行方

安羅をめぐる方策において若干の隔意が生じた倭国と百済であったが、百済には別の脅威が迫り、倭国も百済支援を打ち出さざるを得なくなる。それは北方からの高句麗の南下であった。

548年正月、高句麗は濊兵6000で百済の独山城(忠清北道忠州市説、忠清南道礼山郡礼山邑説、ソウル市北方の山岳説などがある)を攻撃した。この時百済は新羅に救援を求め、援兵3000を得て、高句麗の侵攻を退けることができたという(『三国史記』新羅本紀真興王9年2月条、高句麗本紀陽原王4年正月条、百済本紀聖王26年正月条)。この戦役について、4月に到来した百済使は、高句麗人捕虜の証言に依拠して、「馬津城之役」は安羅と「日本府」が高句麗を招来したもので、「日本府」の移那斯・麻都らが高句麗の武力を利用して百済を安羅から追却しようと企図したと報告している(『日本書紀』欽明9年(548)4月甲子条)。この時に倭国は「安羅逃亡空地」への援兵派遣を約しており、おそらく安羅と「日本府」の反百済勢力は瓦解し、百済の安羅掌握が決定的になったため、倭国も百済の安羅駐留を承認せざるを得なくなったのであろう。倭国はまた、370人を派遣して百済の得爾辛(徳斤支＝忠清南道論山郡恩津の地ともいうが未詳)の築城を支援している(『日本書紀』欽明9年10月条)。

550年正月、百済は高句麗の道薩城(忠清北道槐山郡槐山面)を陥し、遂に漢山城の故地を奪回し

た。しかし、3月には高句麗が金峴城(忠清北道鎮川郡鎮川面)を包囲し、高句麗と百済の戦闘が続く中で、新羅が間隙に乗じて道薩城と金峴城を奪取したといい(以上、『三国史記』による)、ここに新羅が半島西海岸に進出するとともに、北方においても百済と新羅の対立が始まることになるのである(註14)。新羅は553年7月にこの地に新州を置き、領土確保を果している。そこで、百済・「加羅」(大加耶)・安羅は倭国に遣使して出兵要請を行っており(史料18)、今や百済と運命共同体になった加耶諸国にとっても切迫した事態になっていたことが窺われる(註15)。百済は553年にも倭国に遣使し、高句麗と新羅が提携して百済・安羅を攻撃するという風聞を伝え、援兵派遣を要請しており(史料19)、これは百済と「在安羅諸倭臣等」・「任那諸国早岐等」の共通意志であるといい(史料0-01)、この段階で漸く百済を中心とする結束が確立したのである。そして、554年5月に渡海した倭国の軍兵(『日本書紀』欽明15年5月戊子条)が6月に到着すると、百済は早速新羅に攻撃を加え、倭系百済官僚の東方領物部莫奇武連が率いる軍士が函山城(管山城、忠清北道沃川郡沃川邑)を攻めて、倭国の有至臣が引率した竹斯物部莫奇委沙奇の火箭が威力を発揮し、城を陥落することができたという。

ここで高句麗の介入を恐れた百済は、自らの軍士1万人を増強するとともに、倭国の「竹斯嶋上諸軍士」の増援を要請しており、倭国の派遣軍が筑紫の豪族を中心とするものであったことが窺われる。ところが、要請した倭国の軍隊の来否が明らかでないうちに、前年に対高句麗戦で勝利し(『日本書紀』欽明14年10月己酉条)、自信を持った百済王子余昌(威徳王)は現有勢力でのさらなる新羅攻撃を行った。父聖明王が余昌を慰労するために前線に向かったところ、新羅はこれを撃破し、聖明王は敗死してしまう(『三国史記』新羅本紀真興王15年7月条、百済本紀聖明王32年7月条)。余昌も新羅軍に包囲されたが、「能射人」筑紫国造が新羅の騎兵を射落したので、余昌らはかろうじて包囲網を脱して帰国することができた(史料0-01)。結果として百済は国王の敗死という大敗北の痛手を負うことになるのである。

以上が安羅をめぐる百済と倭国の方策とその結末である。大勝利した新羅は、百済の後ろ盾を失った加耶諸国の制圧に邁進し、若干の紆余曲折はあるが、562年に加耶諸国併呑を完成するのであった(『日本書紀』欽明23年正月条、『三国史記』新羅本紀真興王23年条)(註16)。

なお、この聖明王敗死に至る戦役への出兵をめぐる倭国と百済の交渉の中で、百済は倭国に仏教伝来を始めとする先進文物の供与を行い、倭国はその代価として軍兵派遣を実行したことがわかる。倭国の仏教公伝年次には『上宮聖徳法王帝説』、『元興寺縁起』の538年説と『日本書紀』の552年説(欽明13年10月条)がある。538年説の1つの根拠に、522年の「大唐漢人」案部村主司馬達止による仏像崇拜、即ち先行する私伝が存したことが挙げられている(『扶桑略記』欽明13年10月13日条所引「日吉山薬恒法師法華験記」)。達止の一族は倭国で最初の出家者となる嶋女(善信尼)、仏師として著名な鳥(止利仏師)などを輩出しており、倭国における初期の仏教受容が彼ら渡来系氏族に担われていたことはまちがいない。しかし、584年に女の嶋が出家した時に11歳であったというから、達止が仏像を崇拜したという壬寅年は、干支一運下げて582年頃のことと解するのが妥当であり、達止の仏教私受の年次に近いから538年説をとるといふ訳にはいかないのである。また『元興寺縁起』撰進過程についても再検討が行われ、538年説は聖徳太子信仰の展開によって後代に創出された年次である可能性も指摘されており、必ずしも『日本書紀』に先行あるいは匹敵する有力説を伝えているのではないとする見解も示されている。一方、552年説にも当時考えられていた末法開始年に設定したもので、必ずしも正確な年次を伝えている

る訳ではないとする批判が存する。したがって仏教公伝の時期については、最大公約数的に6世紀中葉の欽明朝の出来事というくらいに理解しておくしかできない(註17)。

ただ、東アジアの国際関係という観点を加味すると、538年は聖明王が扶余遷都を行い、百済にとっては重要な年であったが、国際情勢は552年の方が切迫しており、文物の供与によって倭国の外交的支援や軍事援助を引き出してきた百済としては、最も効果的な形で切り札を出したと見れば、552年説の方が有力であろう。ちなみに、倭国が百済から仏教を導入したのは、541年に百済が梁に入貢し、529年頃から整備される戒律思想と皇帝菩薩による国家統治を基盤とする梁仏教を受容したためとする指摘もなされている【上川通夫2007】。そうすると、倭国への仏教伝来は541年以降にならざるを得ない。倭国は仏教を説授する僧侶の他に、五経博士や医博士など諸学芸伝授のための人材、また諸文物を百済から享受しており、倭国の文明化を進める上で、百済との関係は断ち切り難いものであった。

第2節 加耶諸国滅亡後の朝鮮半島諸国と倭国

6世紀後半の朝鮮半島は高句麗・百済・新羅の朝鮮三国の時代を迎える。百済との加耶争奪に勝利した新羅は半島西海岸に達する新領統治を確立し、中国南北両朝に入貢するなど、国際的にも存在感を増していく。倭国にとってはこの新羅との関係構築が新たな問題になるが、新羅にも対百済・高句麗のための方策を模索するという課題が存した。570年には高句麗が倭国に遣使する(『日本書紀』欽明31年(570)条～敏達3年(574)条)が、その通交関係はまだ頻繁にはなっておらず、以下では、百済・新羅との通交を中心に、6世紀後半の日韓関係のあり方を考えたい。

1. 倭・百済関係の推移

聖明王の敗死後、百済では余昌が即位し、威徳王(在位554～598年)となった。威徳王は555年2月に弟の王子恵を倭国に派遣し(『日本書紀』欽明16年2月条)、倭国が親百済策を維持するように働きかけている。恵は援兵派遣を求めたが、倭国側は国家体制の安定を教示しており、倭国としては即座の出兵には慎重な態度をとったことがわかる。それでも、翌年に恵が帰国する時、阿倍臣らが筑紫国舟師を率いて衛送したといい、別に筑紫火君が勇士1000人を率いて弥氏(慶尚南道南海島(蟾津江口)東南端の弥助里か)に衛送し、「津路要害之地」を守らせたと記されているので(『日本書紀』欽明17年正月条)、倭国の「竹斯嶋上諸軍士」の健在ぶりが知られるとともに、百済に対する倭国の支援継続が看取される。

威徳王の治世は40年以上に亘り、恵王(在位598～599年)、法王(599～600年)の短期間を挟んで、武王(600～641年)、義慈王(641～660年)と続く新世紀の百済興隆を齎す基盤を築いたものと見ることができる。加耶諸国滅亡後の百済の新羅に対する方策として、その軍事行動の様子を整理すると、表3の通りである。この中では577～79年の侵攻が注目され、これは新羅優勢の状況を築き上げた真興王(在位540～575年)の死去、次の真智王(576～579年)即位の間隙を突いた軍事で、新羅の西辺、即ち旧加耶地域の奪回を企図したものであった。575年に百済が倭国に遣使した(『日本書紀』敏達4年2月乙丑条)のは、事前の提携を模索したものと考えられる。百済の国是は新羅に侵攻して旧加耶地域を領土的に奪取することであり、これが百済の「任那復興」に他ならない。

なお、表3を見ると、威徳王の新羅への侵攻は579年以降記録がなく、王の残りの治世の長さに比して、以後は積極的な新羅への侵攻が控えられたことが看取される。ここには581年から始まる隋との関係という新しい要素、東アジア情勢の大きな変化とそれへの対応を想定すべきであると考え、この点は7世紀の日韓関係に関する検討に譲り、ここでは倭国と百済の関係をさらに見ていきたい。

3-20『日本書紀』敏達12年(583)是歳条

復遣吉備海部直羽嶋召日羅於百濟。羽嶋既之百濟、欲先私見日羅、獨自向家門底、俄而有家裏來韓婦、用韓語言、以汝之根入我根内、即入家去。羽嶋便覺其意隨後而入。於是、日羅迎來、把手使坐於座、密告之曰、僕竊聞之、百濟國主奉疑天朝、奉遣臣後留而弗還、所以奉惜不肯奉進。宜宣勅時、現嚴猛色催急召焉。羽嶋乃依其計而召日羅。於是、百濟國主怖畏天朝不敢違勅、奉遣以日羅、恩率德爾、余怒、哥奴知、參官、柁師德率次干德、水手等若干人。日羅等行到吉備兒嶋屯倉、朝廷遣大伴糠手子連而慰勞焉。復遣大夫等於難波館使訪日羅。是時日羅被甲乘馬到門底下、乃進廳前進退跪拜歎恨而曰、於檜隈宮御寓天皇之世、我君大伴金村大連奉爲國家使於海表火葦北國造刑部靱部阿利斯登之子、臣達率日羅、聞天皇召恐畏來朝、乃解其甲奉於天皇。乃營館於阿斗桑市使住日羅、供給隨欲。復遣阿倍目臣物部贄子連・大伴糠手子連、而問國政於日羅。日羅對言、天皇所以治天下政、要須護養黎民。何遽興兵翻將失滅。故今令議者仕奉朝列、臣連二造(二造者、國造・伴造也)、下及百姓、悉皆饒富令無所乏。如此三年、足食足兵、以悅使民、不憚水火、同恤國難。然後多造船舶、每津列置、使觀客人、令生恐懼。爾乃以能使使於百濟、召其國王。若不來者、召其太佐平王子等來、即自然心生欽伏、後應問罪。又奏言、百濟人謀言、有船三百、欲請筑紫。若其實請、宜陽賜予。然則百濟欲新造國、必先以女人小子載船而至國家。望於此時、壹岐・對馬多置伏兵、候至而殺、莫翻被詐。每於要害之所、堅築壘塞矣。於是、恩率・參官臨罷國時(舊本以恩率爲一人、以參官爲一人也)、竊語德爾等言、計吾過筑紫許、汝等偷殺日羅者、吾具白王、當賜高爵。身及妻子、垂榮於後。德爾・余奴皆聽許焉。參官等遂發途於血鹿。於是、日羅自桑市村遷難波館、德爾等晝夜相計將欲殺、時日羅身光有如火焰、由是德爾等恐而不殺。遂於十二月晦、候失光殺。日羅更蘇生曰、此是我馭使奴等所爲、非新羅也。言畢而死(屬是時、有新羅使、故云爾也)。天皇詔贄子大連・糠手子連、令收葬於小郡西畔丘前。以其妻子・水手等居于石川。於是、大伴糠手子連議曰、聚居一處、恐生其變。乃以妻子居于石川百濟村、水手等居于石川大伴村。收縛德爾等置於下百濟阿田村、遣數大夫推問其事、德爾等伏罪言、信、是恩率・參官教使爲也、僕等爲人之下不敢違矣。由是下獄復命於朝廷、乃遣使於葦北、悉召日羅眷族、賜德爾等、任情決罪。是時葦北君等受而皆殺投彌賣嶋(彌賣嶋、蓋姫嶋也)、以日羅移葬於葦北。於後海畔者言、恩率之船被風沒海、參官之船漂泊津嶋、乃始得歸。

583年、倭国の朝廷は倭系百済官僚の達率(第2位)日羅という者を招聘し、「任那復興」策を相談しようとしている。日羅の父は宣化朝に渡海したことのある火葦北国造刑部靱部阿利斯登で、「竹斯嶋上諸軍士」の一員であるとともに、大伴金村を「我君」と仰ぎ、大伴氏の下で朝廷の軍事力の一端を担う靱部

(靺鞨)の呼称や倭王権の王族資養に奉仕する刑部などを帯しており、倭国の朝廷とのつながりも緊密であった。日羅自身も賢明・勇敢な人物との評判が伝わっており、倭国にとっては百済王権の内部に意志が通じる者が存するのは心強いことであった。

日羅は他の百済人とともに来朝し、「国政」の諮問を受けて献策を行っている(史料20)。その内容は、大別して、次の2項目に要約できよう。Ⅰ 拙速な出兵を抑制し、民政安定・国力充実の上、船舶造営・毎津列置による脅迫によって、百済王または大佐平・王子の来朝を促し、問責を行う。Ⅱ 百済の筑紫における「新国」造り計画に対しては、騙されたふりをして、女子・小子を受け入れ、壱岐・対馬に伏兵を潜ませて殺害する。これは百済に対する方策を建言したものに他ならず、百済に不利益を齎す内容であったためか、その後日羅は同行した百済人によって殺害されてしまう。

この日羅献策はこれまでの倭・百済関係の流れからは難解なもので、その内容解明に踏み込んだ研究は少ない。まずⅠについては、「任那復興」に協力的でない百済に圧力をかけて、百済との結合を深めつつ、「任那復興」を実現する方策であったとする説明が呈されている【西本昌弘1987】。しかし、百済が武力による「任那復興」に努めていたのは上述の通りであり、Ⅰでは日羅は倭国に対してその百済への軍事援助を見合わせるように勧告しているのである。この点に関連する事柄として、後代の事例であるが、642年に百済義慈王が旧加耶地域の40余城を奪回した際の倭国との通交のあり方を参照する(後掲史料28・29)と、百済は旧加耶地域を奪回しても、倭国に充分な量の「任那調」を貢上しない、あるいはその積算根拠が曖昧であるという問題があったことが知られる。つまり百済の「任那復興」は必ずしも倭国の利益に直結する訳ではなく、575年の遣使(『日本書紀』敏達4年2月乙丑条)の如く、「益恒歳」という物実送付を実行しない百済の姿勢が問題とされ、それを問責・解決しないと、倭国の「任那復興」策が進展しないと目されたのではないだろうか【森公章2002】。

次にⅡの「新国」造り計画に関しては、「新国」は「任那」の移住民集団が造ろうとしたもので、火葦北国などが相対的な独立性を保っていた筑紫に「新国」を造ることは、倭国との関係を強化し、また筑紫への倭王権の勢力拡張と先進文物の導入経路確保、そして半島南部における百済の制海権保持などに資するものとして構想されたとする解釈が示されている【金鉉球1985c】。『隋書』倭国伝には筑紫から10余国を経て隋使が入京したことを記した後に、「自竹斯国以東、皆附庸於倭」とあり、当時の倭国は畿内ヤマト王権を中心に、竹斯国などの小国＝地方豪族である国造が歴史的支配を築いていたクニが附庸(外交権を奪われて従属)する形で存立していると見なされていたので、百済には筑紫が割譲を得るのに可能な地と映じていたのかもしれない。

但し、上述の火葦北国造と倭国の朝廷の関係から考えて、磐井の乱後の筑紫に対する支配が不十分なものであったとは思われない。当時百済が基本的には軍事力を用いて新羅から旧加耶地域を奪取しようとしていた点に留意すると、570年代末の侵攻が一段落つき、次なる展開を企図する上では、百済には筑紫の軍事力を確保することが重要であったと推定される。Ⅱの百済の筑紫の地の賜与要求、「新国」造りとは、こうした「竹斯嶋上諸軍士」を百済に編入して、自由に差発できるようにするためのもので、百済人を送り込んで、百済の拠点を作る計画ではなかったかと考えておきたい【森公章2002】。

以上の日羅献策は執行されることはなかったが(註18)、百済に対しては「百済是多反覆之國」という評言も見られ(『日本書紀』推古31年(30カ=622)是歳条)、倭国は百済に不信任を残したままであった。

その一因として、新羅との関係を模索する流れが想起されるので、次に新羅との関係を検討したい。

2. 「任那調」をめぐる倭国と新羅の関係

575年6月、加耶諸国滅亡後では交渉内容が判明する最初の新羅使が到来する(史料21)。この時新羅は「多多羅・須奈羅・和陀・發鬼四邑之調」を送付したといい、この4村は金官国の主邑であり(史料22)、これは以後問題になる「任那調」の謂に他ならなかった。

3-21『日本書紀』敏達4年(575)6月条

新羅遣使進調多、益常例。并進多多羅・須奈羅・和陀・發鬼四邑之調。

3-22『日本書紀』推古8年(600)是歳条

命境部臣爲大將軍、以穗積臣爲副將軍(並闕名)、則將萬餘衆、爲任那擊新羅。於是、直指新羅以泛海往之、乃到于新羅攻五城而拔。於是、新羅王惶之、舉白旗到于將軍之麾下、而立割多多羅・素奈羅・弗知鬼・委陀・南加羅・阿羅々六城以請服。時將軍共議曰、新羅知罪服之、強擊不可。則奏上。爰天皇更遣難波吉士木蓮子於任那、並檢校事狀。爰新羅・任那二國遣使貢調、仍奏表之曰、天上有神、地有天皇、除是二神、何亦有畏乎。自今以後、不有相攻、且不乾般柁、每歳必朝。則遣使以召還將軍。將軍等至自新羅、即新羅亦侵任那。

3-23『日本書紀』推古18年(610)7月条

新羅使人沙喙部奈末竹世子、與任那人喙部大舍首智買、到于筑紫。

3-24『日本書紀』推古19年(611)8月条

新羅遣沙喙部奈末北叱智、任那遣習部大舍親周智、共朝貢。

3-25『日本書紀』推古31年(30カ=622)7月

新羅遣大使奈末智洗爾、任那遣達率奈末智、並來朝。仍貢佛像一具及金塔并舍利、且大灌頂幡一具・小幡十二條。即佛像居於葛野秦寺、以餘舍利・金塔・灌頂幡等皆納于四天王寺。是時、大唐學問者僧惠齊・惠光及醫惠日・福因等並從智洗爾等來之。於是、惠日等共奏聞曰、留于唐國學者、皆學以成業、應喚。且其大唐國者法式備定之珍國也。常須達。

3-26『書紀』推古31年(30カ=622)11月

磐金・倉下等至自新羅。時大臣問其狀、對曰、新羅奉命以驚懼之、則並差專使、因以貢兩國之調、然見船師至而朝貢使人更還耳。但調猶貢上。爰大臣曰、悔乎、早遣師矣。時人曰、是軍事者、境部臣・阿曇連、先多得新羅幣物之故、又勸大臣、是以未待使旨而早征伐耳。初磐金等渡新羅之日、比及津、莊船一艘迎於海浦。磐金問之曰、是船者何國迎船。對曰、新羅船也。磐金亦曰、曷無任那之迎船。即時更爲任那加一船。其新羅以迎船二艘始于是時歟。

3-27『日本書紀』皇極2年(643)7月辛亥条

遣數大夫於難波郡檢百濟國調與獻物。於是、大夫問調使曰、所進國調、欠少前例。送大臣物、不改去年所還之色、送群卿物、亦全不將來、皆違前例。其狀何也。大使達率自斯・副使恩率軍善俱答曰、即今可備。自斯、質達率武子之子也。

3-28『日本書紀』大化元年(645)7月丙子条

高麗・百濟・新羅、並遣使進調。百濟調使兼領任那調使、進任那調。唯百濟大使佐平縁福遇病、留津館而不入於京。巨勢徳大臣、詔於高麗使曰、明神御宇日本天皇詔旨、天皇所遣之使、與高麗神子奉遣之使、既往短而將來長。是故可以温和之心相繼往來而已。又詔於百濟使曰、明神御宇日本天皇詔旨、始我遠皇祖之世、以百濟國爲内官家、譬如三絞之綱。中間以任那國屬賜百濟、後遣三輪栗隈君東人觀察任那國堺。是故百濟王隨勅悉示其堺、而調有闕、由是却還其調。任那所出物者、天皇之所明覽。夫自今以後、可具題國與所出調。汝佐平等、不易面來、早須明報。今重遣三輪君東人・馬飼造(闕名)。又勅、可送遣鬼部率意斯妻子等。

3-29『日本書紀』大化2年(656)9月条

遣小徳高向博士黒麻呂於新羅而使貢質、遂罷任那之調(黒麻呂更名玄理)。

史料から知られる(註19)「任那調」の特色を整理すると、次の通りである【鈴木英夫1983】。

①「任那調」は新羅による加耶諸国併呑後に登場するものであり、それ以前に加耶諸国が倭国に何らかの物品を齎していたという痕跡はない。

②「任那調」とは旧金官国四邑の「調」(ミツキ＝服属の意味を含んだ貢納品)に他ならない(旧金官国には王弟が現地に残り、「食邑」を管理していた)。

③その「任那調」を一定の官位を有する「任那」使が齎すことに意義があり、新羅は倭国への「任那調」送付に際し、自国の使者とともに、実際には新羅人であるが、別に「任那」使を仕立てて来朝させている(史料26の迎船の規定も参照)。

④新羅は旧金官国を「任那」として、「任那調」を倭国に納めることで、加耶を復興したという形を整え、加耶諸国の復興を名目に倭国の軍事援助を引き出そうとする百濟の対倭外交に対抗しようとした。

⑤倭国にとっては、独立した「任那」使が来朝し、「任那調」を齎すことが「任那復興」を意味するのであり、したがって実際の領有関係を問題とすることなく、「任那調」の納入さえ確保できればよかった。

このような「任那調」は倭国と新羅の高度に政治的・外交的な妥協の産物であったと位置づけることができる。表3に見られるように、百濟が高句麗とともに新羅を攻撃する状況の中で、新羅としても倭国と通交し、倭国が百濟・高句麗側に加担しないようにする方途を巡らす必要が生じていたのである。倭国にとっては新羅との交渉→「任那」使の来朝、「任那調」の獲得＝「任那復興」の名目を得ることができ、百濟とは別の立場で朝鮮三国と通交することが可能になる。但し、「任那調」送付は新羅の国際情勢判断に依存しており、新羅使が単独で到来し、「任那」使が来ない場合も多く、倭国が新羅使を追却する事態も発生する。倭国には新羅とも百濟とも十全な関係が構築できないという課題が残るが、一方では高句麗を含めた朝鮮三国の勢力均衡の上に立って、等距離外交を展開できるという利点もあった。

3. 倭国と朝鮮半島諸国との等距離外交

6世紀後半～7世紀前半の倭国と朝鮮半島諸国との通交事例を整理すると、表4の如くである。倭国と百濟との通交は仏教を中心とする文物の交流が主となり、「任那復興」云々の政治問題は表面に出てこなくなる。新羅、高句麗も仏教を中心に倭国に人・物を供与しており、『隋書』倭国伝の「新羅・百濟、皆以倭為大国、多珍物、竝敬仰之、恒通使往来」という評言は、これら朝鮮三国から均等な形で通交が行

われた様子をふまえたものと考えられる(註20)。倭国は朝鮮半島諸国と等距離外交の時代を迎えるのである。

当該期の倭国の飛鳥文化は、古墳時代以来の伝統を基盤に、中国南北朝の文化を朝鮮三国から吸収することで、国際色豊かな最初の仏教文化を開花させたものであった。最初の本格的な寺院となる飛鳥寺(法興寺)の造営に際しては、百済から仏舎利が献上され、寺工、鑪盤博士、瓦博士、画工など寺院建立に必要な技術者も百済から派遣されている。倭国の最初の出家者である善信尼は百済に赴いて戒法を学んでおり、到来した高句麗僧慧慈と百済僧慧聡が「三宝之棟梁」として仏教界を主導したとあるから、僧尼養成など仏教文化の移入・定着には百済、また高句麗に依存するところが大きかったことがわかる。新羅からも仏像が齎されており、京都太秦の広隆寺に伝来する半跏思惟像(弥勒菩薩像)などには新羅仏教の影響が看取されるところである。

倭国の仏教文化受容を推進したのは蘇我氏であり、蘇我氏は東漢氏を始めとする渡来系氏族とも密接な関係を有していた。飛鳥寺の刹柱を立てた時、蘇我馬子と100余人の人々は百済服を着して列席したというから(『扶桑略記』崇峻元年(588)正月条)、百済文化の讃仰者としての蘇我氏の姿が窺われる。従来の倭国の宮室は歴代遷宮の形をとったが、宮都を飛鳥地域に継続的に営み、首都としての飛鳥の整備を進めたのも蘇我氏であった(註21)。飛鳥寺の西の広場は国家的饗宴の場であり、そこには百済の路子工が造営した須彌山石が不思議な情景を供していた。飛鳥の宮都は飛鳥川右岸の低湿地に所在していたため、川原石や凝灰岩の切石などを用いた石敷き施設が多いが、苑池の造営ともども、これらは百済、あるいは新羅の首都に倣った景観を作り出す意図もあったのではないかと考えられる。

このような形で倭国が等距離外交の成果を享受しているうちにも、朝鮮半島では半島統一をめぐる三国の抗争が激化していく(表3)。また4世紀初頭以来長らく南北朝の分裂が続いていた中国でも、589年に北朝の隋が南朝の陳を滅ぼし、中国統一を実現するという大きな変化が起きている。隋、そして次の唐は朝鮮半島の紛争にも介入し、東アジアは激動の時代を迎えることになる。この新たな国際情勢の中で、倭国と朝鮮半島諸国がどのような道を歩んでいくのかは、次の7世紀の日韓関係の考察課題である。

(註1)継体の本拠地であった近江国高島郡水尾村に所在する鴨稻荷山古墳は6世紀前半の前方後円墳で、継体即位以後のものということになるが、金製耳飾、金銅製冠、金銅製双魚佩、金銅製沓など、朝鮮半島南部とのつながりを示す副装品が検出されており、継体大王を生み出したこの地域の国際的環境を推察させる材料を呈する【大山誠一1999b】。そして、和歌山県橋本市隅田八幡宮所蔵人物画像鏡には「癸未年八月日十大王年男[字]弟王在意柴沙加宮時斯麻念長奉遣開中費直穢人今州利二人等[尊]取[所(取)]白上同(銅)二百早(桿)作[所(作)]此竟(鏡)」「〔 〕は有力な異積、()は読み替え」とあり、癸未年は443年とする説もあるが、『歴史考古学大辞典』(吉川弘文館、2007年)「隅田八幡神社・人物画像鏡」の項(寺西貞弘氏執筆)によると、鏡の考古学的年代は6・7世紀を下るものではないといふから503年説が妥当と考えられ、即位前の男弟王=継体が大和国の忍坂宮にいた時、斯麻=百済の武寧王から「長奉」=友好関係の継続を期待されるような立場にあったことが看取されるので、倭王権が百済支持の外交方策をとる背景が知られる。

(註2) 大韓民国における【金泰植1985・1988】などの研究を受けて、日本では【田中俊明1992】が大きく研究を進めた。なお、伴跋＝大加耶説は、例えば【今西龍1970b】が【今西龍1970a】では伴跋＝本彼(星州)とする通説を支持していたのに対して、「伴跋は星州を第二中心とし、高霊の地を第一中心とせし大加耶の名なるべしと推定するに至れり」(391頁)と述べており、そうした説もあった。しかし、加耶諸国からの視点を軸に、関係記事の全体的理解の再検討を推進したのは金泰植氏・田中俊明氏の優れた研究成果である。なお、卓淳の比定地に関しては、金泰植氏は今西説を継承して洛東江の南の昌原説をとるが、【松波宏隆1994】は洛東江東北岸と解し、昌寧(比自休)の南の霊山を卓淳に充てている。

(註3) 原因としては、475年高句麗の攻撃による百済の南遷後の混乱、東城王代にも散見し、武寧王代の502年、506年、521年(新羅に逃亡したものが900戸と記されている)と打ち続く疫病や飢饉(『三国史記』)も考慮されるべきものと思われる。

(註4) 森公章「評の成立と評造」(『古代郡司制度の研究』吉川弘文館、2000年)、「国宰、国司制の成立をめぐる問題」(『歴史評論』643、2003年)など。

(註5) 『新增東国輿地勝覽』巻29高霊県・建置沿革条所引崔致遠撰「稷利貞伝」に記された大加耶王家の系譜によると、新羅と婚姻関係を結んだのは異脳王、所生子は月光太子ということになるが、『日本書紀』継体23年(529)4月戊子条、史料09の「任那王己能末多干岐」は「己能末多」の誤記で、異脳王を指すものと考えられる。王自身が倭国に到来したというのは不審であるが、この「任那」は「加羅」＝大加耶を示すと理解できる。

(註6) 【田中史生2008】は、『日本書紀』欽明15年(554)2月条で五経博士王柳貴と交替した固徳(第9位)馬丁安は百済の官位を有しており、百済王権に仕える官人として、百済の政治的・戦略的意図を倭王権の政策に反映させる役割を有していたのではないかと述べている。

(註7) 【古川政司1980】は、後述の百済の安羅への軍事進出をめぐる倭国との意見対立をふまえて、毛野派遣時にも倭と百済の間には何らかの対立があり、それが百済の使者排除につながったとするが、この時点ではそうした対立はなかったと考えたい。

(註8) 【熊谷公男2008】は、毛野派遣の失敗の後に、安羅在住の倭系人を「任那日本府」として組織したと見ており、毛野が行っていた「韓子」に関する裁判はその後身である「任那日本府」にも引き継がれ、安羅およびその周辺地域在住の倭系人の統括に関わっていた可能性を指摘しているが、毛野の裁判行為を正当なものとするのはできないと思う。

(註9) この場合の「任那」ニナは「主の国」の如き意味で、金官国の王邑を指したものか。あるいは『三国志』魏書東夷伝弁辰条の彌烏邪馬国に由来するという説も有力である。

(註10) 神功49年条の「南蛮忱彌多禮」について、【金鉉球1993】は全羅南道康津に比定しているが、181頁註(39)では耽羅に比定できる可能性も指摘されている。森公章「古代耽羅の歴史と日本」(『古代日本の対外認識と通交』吉川弘文館、1998年)で検討したように、「南蛮」の冠称は耽羅を指すものと解するのがよく、耽羅が百済の附庸国になったのは5世紀末～6世紀頃であるから、ここに登場する地名もその時期の百済の活動範囲を反映したものと考えたい。

(註11) 平野邦雄「帰化人研究の諸問題」(『帰化人と古代国家』吉川弘文館、2007年)。

(註12) 【金鉉球1985b】は、史料38の「任那復興会議」IIで問題になった百済の郡令・城主を久礼山

の近くに置かれたものとし、「日本府」の軍司令部的性格を主張する。しかし、郡令・城主が置かれた「下韓」「南韓」がこの地域を指すとする明証はなく、その後の経緯を見ても、久礼山の奪回は果されていないので、安羅の反百済の気運から考えても、安羅と卓淳の境界付近と目される久礼山周辺に百済が一気に軍事展開を行うことができたとは思われない。久礼山周辺の駐兵はⅡ－①の方策であり、②の郡令・城主設置は別件とすべきであろう。なお、D説の【奥田尚1976】も、印支彌・許勢臣を百済から派遣された人物と見る。

(註13) 森公章「海北」から「西」へ(『遣唐使と古代日本の対外政策』吉川弘文館、2008年)。

(註14) 『日本書紀』はこの争奪戦を551・2年の出来事とし、欽明12年(551)年「百済聖明王親率衆及二國兵(二國、謂新羅・任那也)、往伐高麗、獲漢城之地。又進軍討平壤。凡六郡之地、遂復故地。」、同13年(552)年「百済棄漢城與平壤、新羅因此入居漢城。今新羅之牛頭方・尼彌方也(地名未詳)。」と描いているが、欽明11年(550)4月庚辰朔条の高句麗人捕虜送付はこの年の戦闘を示すものではないかと思われる。

(註15) 史料18の使者のうち、河内阿比多はその名前から考えて「日本府」の構成員と見なされ、この段階でも「日本府」ないしはその残存勢力が加耶諸国と共同で外交活動を行ったことが知られる。なお、【李永植1989】は加耶と安羅の使者とするが、「日本府臣」と見る余地もあると述べている。

(註16) 『日本書紀』欽明22年(551)年「復遣奴氏大舍獻前調賦。於難波大郡序諸蕃、掌客額田部連・葛城直等使列于百済之下而引導。大舍怒還不入館舍、乗船歸至穴門。於是、脩治穴門館。大舍問曰、爲誰客造。工匠河内馬飼首押勝欺給曰、遣西方無禮使者之所停宿處也。大舍還國告其所言。故新羅築城於阿羅波斯山、以備日本。」の阿羅波斯山は咸安の城山山城に比定され、ここからは木簡が出土しており、新羅の旧加耶諸国支配の方式が明らかになりつつある【朴鍾益2007、李鎔賢2007】。なお、築城目的に「以備日本」とあるのは、むしろ百済の攻撃に備えたものと読み替えるのがよいであろう。

(註17) 以上の研究史は、速水侑『日本仏教史』古代(吉川弘文館、1986年)、本郷真紹『元興寺縁起』の再検討(『律令国家仏教の研究』法蔵館、2005年)などを参照。

(註18) 日羅献策の有効性を示す事柄としては、後代の事例ではあるものの、651年に新羅が唐風化を進め、到来した使者が唐国服を着用するという事件が起きた時の対応方法が注意される。『日本書紀』白雉2年(651)年「新羅貢調使知万沙滄等、著唐國服泊于筑紫。朝廷惡恣移俗、訶嘖追還。于時巨勢大臣奏請之曰、方今不伐新羅、於後必當有悔。其伐之状不須舉力、自難波津至于筑紫海裏、相接浮盈艫舳、召新羅問其罪者、可易得焉。」とあり、船舶を毎津列置して脅迫するという方式は日羅献策Ⅰの執行を企図したものに他ならなかった。これは執行対象が百済ではなく新羅であるが、日羅献策が朝鮮半島諸国に対する倭国の行動方式を決定する上で大きな影響力を残したことが窺われる。

(註19) 【延敏洙1992】は、元金官国王の食邑は金仇衡の死後(575年以前には死去)に廃止されていたと見て、「四邑之調」は新羅の直接収取下にあったので、これは服属の意を表す「調」ではなく、鉄資源などかつての南部加耶と倭との交易物資を供与し、新羅が倭国に先進文物を提供することができることを示したものであって、『日本書紀』の任那使人来朝の記述(史料21～26)には編纂時の造作があると

位置づけ、服属の意を示す「調」の送付という考え方を否定している。しかし、史料26によると、倭国は任那使人の来朝、「任那」の存続という形式の保持を求めたのであり、新羅もその虚構性を認識しながら、あくまでも倭国の「任那復興」の要望に応じた形を示すという合意のもとに実施された外交形式であったと考えれば、造作と見る必要はないと思われる。

(註20)黒田裕一「推古朝における「大国」意識」(『国史学』165、1998年)は、『隋書』各国伝の「大国」の用例を検討し、内に礼節を整え保持するとともに、礼的秩序社会を形成し得る国が「大国」であり、600年の遣隋使以降に倭国が礼制の摂取を推進したことを追認した上で、隋の対高句麗戦争遂行のために、倭国が創建した「大国」的構造を隋の礼的秩序社会に編入するという政治的意図があったことを指摘している。「大国」の意味合いはこの通りかもしれないが、現実の通交関係にも目配りする必要がある、本文のように解しておきたい。

(註21)森公章編『日本の時代史』3倭国から日本へ(吉川弘文館、2002年)、明日香村編『続・明日香村史』上巻(2006年)など。

《表1 百済と新羅の加耶諸国への侵攻》

(百 済)

(新 羅)

*5世紀後半から居染山国などの南部加耶

諸国は新羅の影響下にあった

512(智証王11)何瑟羅州軍主異斯夫が于山国(鬱陵島)を降す(参考)

513(武寧王13)己汶に侵入

514 大加耶は子呑・帯沙に築城して対抗

516 己汶を確保

→さらに帯沙に進出し、確保

522 大加耶は新羅に求婚→新羅との婚姻同盟成立

524(法興王11) 金官国・喙己呑に第1次侵攻。この時、大加耶王と会盟

525(聖王3)百済と新羅が交聘

527 倭国は近江毛野派遣を計画

529 近江毛野渡海／大加耶は新羅との婚姻同盟を破棄

529 金官国に第2次侵攻

531 安羅に進駐し、久礼山を守備 531 卓淳を攻撃し、久礼山を落とし、卓淳を制圧

532 金官国降服

※百済・新羅の王代は交替のある時のみ注記した

《表2 「任那復興会議」の参加者》

国名	I 欽明2年(541)4月	II 欽明5年(544)11月
百濟	聖明王(聖王)	聖明王(聖王)
安羅	次早岐 夷吞奚・大不孫・久取柔利	下早岐 大不孫・久取柔利
加羅	上首位 古殿奚	上首位 古殿奚
卒麻	早岐	君
散半奚	早岐兒	君の兒
多羅	下早岐 夷他	二首位 訖乾智
斯二岐	早岐兒	早岐
子他	早岐	早岐
久嗟	—	早岐
—	任那日本府臣 吉備臣	任那日本府臣 吉備臣

《表3 百濟・高句麗の新羅への侵攻・略年表》

557年10月	百濟、新羅の西邊境を侵略→敗退。新羅内利西城を築く。 (威徳王24/真智王2)
587年	百濟、閼也山城(全北益山郡勵山面)を得る。
579年 2月	百濟、熊峴城(忠北報恩郡内俗離面)・松述城を築き、新羅の萩山城(慶北醴泉郡醴泉邑)・応峴城・内利西城への路を梗ぐ。
602年 8月	百濟、新羅の阿莫山城を囲む→敗退。(武王3/真平王24)
603年 8月	高句麗、新羅の北漢山城(ソウル市鐘路区新宮)を攻撃→敗退。 (嬰陽王14/真平王25)
605年 2月	百濟、角山城(全北井邑郡内藏面葛峴)を築く。
8月	新羅、百濟の東邊を侵略。
608年 4月	高句麗、牛鳴山城(咸南安辺瑞谷面)を抜く。
611年 8月	百濟、赤岳城を築く。
10月	百濟、新羅の椴岑城(忠北槐山郡槐山面)を滅す。 《611~614 隋の高句麗征討》
616年10月	百濟、新羅の母山城を攻撃。
618年	新羅、椴岑城を回復す。 《618 唐の成立》
623年	百濟、新羅の勒弩県(忠北槐山郡槐山面)を襲撃。 《623 唐、朝鮮三国を冊封》
624年10月	百濟、新羅の速含(慶南咸陽郡咸陽面)・桜岑・岐岑・烽岑・旗懸・穴柵6城を取る。
626年 7月	百濟、新羅の主在城(忠北清原郡文義面)を攻撃し、城主を殺害。
627年 7月	百濟、新羅の西鄙2城を取る。

《627 唐、三国和親を説諭》

- 628年 2月 百済、新羅の椴岑城を包囲→敗退。
632年 7月 百済、新羅攻伐の発兵→不利。
633年 8月 百済、新羅の西谷城を取る。(武王34／善徳王2)
636年 5月 百済、新羅の独山城(慶北月城郡西面)攻撃を計画し、玉門谷(慶北月城郡西面泉村)に伏兵を置く→敗退。
638年10月 高句麗、七重城(京畿坡州郡積城面)を攻撃→敗退。
(宝蔵王21／善徳王7)

※括弧内の王名は百済王・高句麗王・新羅王の交替がある場合のみ表示した。

《表4 6世紀後半～7世紀前半における倭国と朝鮮三国の通交》

- 584年 9月 百済から帰朝した鹿深臣が弥勒石像1軀、佐伯連が仏像1軀を将来。
587年 6月 来朝した百済調使に対して、大臣蘇我馬子が善信尼らの渡航、戒法学習を依頼するも、この時は果せず。
588年 百済使が来朝し、仏舎利、僧、技術者を献上。善信尼らの百済行きが実現。
595年 5月 高麗僧慧慈来朝。
百済僧慧聡来朝。慧慈とともに「三宝之棟梁」となる。
597年 4月 百済王子阿佐が朝貢。
11月 吉士磐金を新羅に派遣。
598年 4月 難波吉士磐金が帰朝し鵠2隻を献上。
8月 新羅が孔雀1隻を貢上。
599年 9月 百済が駱駝1匹・驢1匹・羊2頭・白雉1隻を貢上。
602年10月 百済僧観勒が来朝。曆本・天文地理・遁甲方術之書を献上。
閏 10月 高句麗僧僧隆・雲聰が来朝。
605年 4月 高句麗王が飛鳥寺丈六仏に黄金300両を献上。
608年 6月 遣隋使小野妹子らが百済を経由して帰朝。
新羅人が化来する。
610年 3月 高句麗僧曇徴・法定が来朝。曇徴は彩色・紙墨・碾磑の製法を伝える。
612年 百済より路子工(芝耆摩呂)が化来し、須弥山形・呉橋を作る。
また伎楽に通じた味摩之も来る。
615年 7月 遣隋使犬上御田鍬らが百済の送使とともに帰朝。
11月 高句麗僧慧慈が帰国。
616年 7月 新羅使が仏像を貢上。
618年 8月 高句麗が対隋戦争の捕虜・戦利品を送る。
621年 新羅使が朝貢し、上表文を捧呈。
622年 7月 新羅使・「任那」使が来朝し、仏像・金塔・舎利・大灌頂幡・小幡を貢上。

	遣隋留学生らの帰朝を送る。
625年正月	高句麗僧惠灌が来朝。僧正に任ず。
630年 3月	高麗使、百濟使が来朝。
632年 8月	遣唐使犬上御田鍬らが新羅の送使とともに帰朝。唐使高表仁も同行。 遣隋留学僧靈雲・僧旻らも帰朝。
635年 6月	百濟使が朝貢。
638年	百濟、新羅・「任那」が朝貢。
639年 9月	遣隋留僧惠穩・惠雲が新羅送使とともに帰朝。
640年10月	遣隋留僧清安・学生高向漢人玄理らが新羅を經由して帰朝。 百濟・新羅の送使が来朝し、朝貢。

※出典は『日本書紀』

【引用文献目録】

- 池内 宏1970『日本上代史の一研究』中央公論美術出版
- 井上秀雄1972『朝鮮史』日本放送出版協会
- 井上秀雄1973a「いわゆる任那日本府について」『任那日本府と倭』東出版寧楽社
- 井上秀雄1973b「任那日本府の行政組織」『任那日本府と倭』東出版寧楽社
- 今西 龍1970a「加羅疆域考」『朝鮮古史の研究』国書刊行会
- 今西 龍1970b「己汶伴跋考」『朝鮮古史の研究』国書刊行会
- 尹錫曉1993『加耶国と倭地』新泉社
- 請田正幸1974「六世紀前期の日朝関係」『古代朝鮮と日本』龍溪書舎
- 請田正幸1987「任那日本府」『週刊朝日百科日本の歴史』41原始・古代8邪馬台国と倭国
- 延敏洙1990「任那日本府論」『東国史論』24
- 延敏洙1992「日本書紀の「任那の調」関係記事の検討」『九州史学』105
- 大山誠一1980「所謂「任那日本府」の成立について」『古代文化』32-9・11・12→『日本古代の外交と地方行政』吉川弘文館、1999
- 奥田尚1976「「任那日本府」と新羅倭典」大阪歴史学会編『古代国家の形成と展開』吉川弘文館
- 角林文雄1996「任那・加羅・伽耶と倭」『日本書紀研究』第20冊、塙書房
- 笠井倭人1964「欽明朝における百濟の対倭外交」『日本書紀研究』第1冊、塙書房→『古代の日朝関係と日本書紀』吉川弘文館、2000b
- 上川通夫2007「ヤマト国家時代の仏教」『日本中世仏教形成史論』校倉書房
- 鬼頭清明1976「「任那日本府」の検討」『日本古代国家の形成と東アジア』校倉書房
- 鬼頭清明1992「所謂「任那日本府」の再検討」『東洋大学文学部紀要』史学科篇17
- 金延鶴1977『任那と日本』小学館

- 金鉉球1985a「日系百濟官僚」『大和政権の対外関係研究』吉川弘文館
- 金鉉球1985b「任那日本府」の実体『大和政権の対外関係研究』吉川弘文館
- 金鉉球1985c「蘇我・物部氏の紛争による日羅の召喚と対百濟関係の断絶」『大和政権の対外関係研究』吉川弘文館
- 金鉉球1993「神功紀」の加羅七国平定記事に関する一考察『翔古論聚』久保哲三先生追討記念論文集刊行会
- 金錫亨1969『古代朝日関係史—大和政権と任那—』勁草書房
- 金泰植1985「五世紀前半大加耶発展に対する研究」『韓国史論』12
- 金泰植1988「六世紀前半加耶南部諸国の消滅過程考察」『韓国古代史研究』1
- 金泰植1993「六世紀中葉加耶連盟の滅亡過程」『朝鮮学報』146
- 熊谷公男2005「いわゆる「任那四県割讓」の再検討」『東北学院大学論集』29
- 熊谷公男2008「金官国の滅亡をめぐる国際関係」『百濟と倭国』高志書院
- 佐伯有清1983「任那日本府はなかったのか」『朝鮮・モンゴル』〈世界の国シリーズ15〉、講談社→『日本の古代国家と東アジア』雄山閣出版、1986
- 坂本太郎1961「継体紀の史料批判」『國學院雑誌』62-9→『日本古代史の基礎的研究』上、東京大学出版会、1964
- 末松保和1949『任那興亡史』大八洲出版
- 鈴木英夫1983「任那の調」の起源と性格『国史学』119→『古代の倭国と朝鮮諸国』青木書店、1996
- 鈴木英夫1987「加耶・百濟と倭—任那日本府」論—『朝鮮史研究会論文集』24→『古代の倭国と朝鮮諸国』青木書店、1996a
- 鈴木英夫1996「任那日本府」(在安羅諸倭臣)の解体と高句麗『日本古代の国家と祭儀』雄山閣出版
- 鈴木英夫2006「任那日本府」と「諸倭臣」『國學院大學紀要』44
- 鈴木靖民1974「いわゆる任那日本政府及び倭問題—井上秀雄『任那日本政府と倭』評を通して」『歴史学研究』405
- 鈴木靖民1983「東アジア諸民族の国家形成と大和王権」『講座日本歴史』1、東京大学出版会
- 全榮來1985「百濟南方境域の変遷」『千寛宇先生還暦紀念韓国史学論叢』正音文化社
- 千寛宇1974「韓国史の潮流—三国時代(抄)」『古代日本と朝鮮の基本問題』学生社
- 千寛宇1983「任那日本府管見」『韓』7-7
- 田中俊明1992『大加耶連盟の興亡と任那』吉川弘文館
- 田中俊明2009『古代の日本と加耶』山川出版社
- 田中史生2008「六世紀の倭・百濟関係と渡来人」『百濟と倭国』高志書院
- 鄭孝雲2005「六世紀の東アジア情勢と任那日本府」『日語日文学』27
- 中野高行2007『日本書紀』における「任那日本府」像『新羅史学報』10(『政治と宗教の古代史』慶應義塾大学出版会、2004の改訂版・韓国語訳)
- 西本昌弘1987「東アジアの動乱と大化改新」『日本歴史』468
- 平野邦雄1985「任那日本府」の問題『大化前代政治過程の研究』吉川弘文館

- 古川政司1980「六世紀前半の日朝関係」『立命館史学』1
- 朴鍾益2007「咸安城山山城の発掘調査と出土木簡の性格」『韓国出土木簡の世界』雄山閣出版
- 松波宏隆1994「欽明紀「任那復興」関係記事と卓淳」『龍谷史壇』101・102
- 三品英彰2002『日本書紀朝鮮関係記事考證』下巻
- 森公章2002「加耶滅亡後の倭国と百済の「任那復興」策について」『東洋大学文学部紀要』史学科篇27
→『遣唐使と古代日本の対外政策』吉川弘文館、2008
- 森公章2006『東アジアの動乱と倭国』吉川弘文館
- 森俊道1983「任那日本府と加不至費直」『東アジアの古代文化』37
- 八木充1963「任那支配の二形態」『山口大学文学会誌』14-2→『律令国家成立過程の研究』塙書房、
1968
- 山尾幸久1977『日本国家の形成』岩波書店
- 山尾幸久1980「任那支配の実態」『ゼミナール古代史』下、光文社
- 吉田晶1975「古代国家の形成」『岩波講座日本歴史』2、岩波書店
- 李永植1989「所謂「任那日本府」の語意について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』16→「任那日本府の実体」『加耶諸国と任那日本府』吉川弘文館、1993
- 李永植1993「いわゆる任那日本府に関する研究史」『加耶諸国と任那日本府』吉川弘文館
- 李弘植1936「任那問題を中心とする欽明紀の整理—主要関係人物の研究—」『青丘学叢』25
- 李鎔賢2002「任那と日本府の問題」『東アジアの古代文化』110
- 李鎔賢2007「咸安城山山城出土木簡」『韓国出土木簡の世界』雄山閣出版

おわりに

以上、4・5・6世紀の倭国が様々なつながりを有して、朝鮮半島諸国と通交した様子を整理してみた。朝鮮半島における倭人の活動の痕跡は随所に認められるが、倭国の領土が存したという理解は不可能である。また当該期には倭王権だけでなく、中央・地方の有力豪族も独自に朝鮮半島諸国と通交することができており、多元的な国際関係を想定せねばならない。後代における国境線の画定と厳密な領域概念は未成立であり、朝鮮半島では高句麗、百済、新羅、加耶諸国などがそれぞれに領域を画定し、王権を確立していく途上にあった。倭国でも百済・高句麗などに範を求めながら、倭王権が急速に成長を遂げるものの、中央集権的統治の確立はまだ達成されていなかったと考えられる。

なお、広開土王碑文に描かれた倭の軍隊展開規模は不明であるので、措くとして、それ以外では当該期における倭国から朝鮮半島への派兵は「竹斯嶋上諸軍士」と称される九州の豪族を主体とし、概ね最大でも1000人規模であった。したがって倭国が大々的な軍事展開を行ったとする理解には、再検討・訂正が必要であろう。倭国が万人規模の軍隊を渡海させるのは7世紀後半の百済復興運動支援の段階が初めてであり、その過程や様相については7世紀の日韓関係を検討する際の課題としたい。